整版『源氏小鏡』（神戸親和女子大学附属図書館蔵　解題・翻刻）

――付、『源氏小鏡』の挿し絵――

岩坪　健

はじめに

源氏物語は、中世の文学・文芸に多大な影響を及ぼした。とりわけ連歌が盛んになり、地方にまで広まると、連歌を詠む上で源氏物語の知識を求める人が増大した。しかしながら当時、源氏の写本を完備していたのは、公家や武家など限られており、それゆえ大多数の人々の需要に応えるため、源氏の梗概書が数多く作成された。その中で最も流布したのが、南北朝期に成立した『源氏小鏡』である。本書は江戸時代になっても重宝され、幾度も版を重ねた。にもかかわらず、版本『源氏小鏡』は今のところ、影印も翻刻もない。そこで本稿では数ある整版のうち、最善本を選び翻刻し、また版本の挿し絵についても言及する次第である。

一、整版『源氏小鏡』の本文系統

『源氏小鏡』（以下『小鏡』と称す）の版本は、古活字版と整版とに大別され、古活字版はさらに嵯峨本など版により八種類に分かれるが、いずれも本文は同一と見なされていた。[注1] しかしながら実は、三系統の本文に分類できるのである。[注2] 古活字版に引き続き整版が刊行され、吉田幸一氏は次の十一種に分類された。[注3]

一、整版正文本

〔い〕慶安四年刊秋田屋版　三巻三冊

〔ろ〕無刊記正文大本　三巻三冊

〔は〕寛文六年版薄様小本　三巻三冊

二、整版絵入本（挿画本）

第一類　上方版大本

〔イ〕明暦三年刊安田十兵衛版　三巻三冊

〔ロ〕明暦三年浅見・吉田相版　三巻三冊

第二類　上方版小本

〔ハ〕寛文六年版小本　三巻三冊

〔ニ〕寛延四年吉田屋・加賀屋相版　三巻三冊

〔ホ〕文政六年加賀屋版　三巻三冊

第三類　江戸版大本

〔ヘ〕延宝三年舛弥生吉辰鶴屋版　三巻三冊

〔ト〕舛弥生吉辰鶴屋版　三巻六冊

第四類　江戸版中本

〔チ〕文林堂須原屋版　三巻三冊

吉田氏の調査によると、版式が同じなのは〔い〕と〔ろ〕、〔イ〕と〔ロ〕、〔は〕と〔ハ〕〔ニ〕〔ホ〕、〔ヘ〕と〔ト〕であり、後摺りの方を除くと、〔い〕〔イ〕〔ハ〕〔ヘ〕と〔チ〕が残る。(注4) 以下の考察では、この五件に限定し、無刊

記の〔チ〕は版元の名にちなみ須原屋版、他は初版が刊行された年号で呼ぶことにする。ちなみに出版された順に並べると、〔い〕慶安四年（一六五一）、〔イ〕明暦三年（一六五七）、〔ハ〕寛文六年（一六六六）、〔へ〕延宝三年（一六七五）になる。

各版の本文に関しては、伊井春樹氏が同一系統と述べられたが[注5]、その根拠となる例は挙げられていないので、以下、三巻を取り上げる。まず少女の巻を見ると、新築した六条院の秋の御殿の件で、文脈が不自然な箇所がある。

（上略）梅つほの女御と申、六条の宮す所の御むすめ、けんしの御やしなひの御むすめなれは、にし、ひつしさるの町にすみ給ふ。これは内より出給ふ御さとの為なり。此女御の君、秋の夕しめ給へは、秋の野をはるかにうつし植て、木たかき紅葉の色をましへ、ことにおもしろし。其頃のおりに、『此きみ、秋をこのむ中宮、冷泉院のきさき共いふ。』いときよらを、ましたり。（整版の本文は慶安版による。以下、同じ）

私に『　』を付けた部分は秋好女御の説明文であり、その一節がなければ、「其頃のおりに、いときよらを、ましたり。」で文意が通じる。これは本来、傍注だった箇所が、本文に紛れ込んだと考えられる。

次に玉鬘の巻の衣配りの段で、慶安版は出だしが「紅梅のいといたく」と唐突に始まり、末尾は光源氏のセリフの途中「いて、此かたちのよそへは」で終り、尻切れとんぼである。ちなみに古活字版には不自然な点はなく、「又、きぬくはりといふ事あり。」で始まり、各人の衣裳と寄合の詞を列挙し、源氏のセリフはない。

最後に浮舟の巻において、古活字版と慶安版を比較すると、後者は二ヶ所、長文が抜けている。以下、古活字版の本文を引き、慶安版にない部分の初めと終りに記号（A～B、C～D）を付ける。

すゝり。ゑ。(絵)川よりおち。(遠)やと。あしろひやうふ。

これは、「宇治かはよりおち」なとの心に、よせへし。

Aたと〳〵しくなかき日、もろともになかめ出し給へは、雪いみしくつもりて、かの我すむかたをみやり給

へは、かすみのたへ〳〵に、木すへはかりそ見えける。山は、かゝみをかけたるやうに、きら〳〵として、ゆふ日かゝやきたるに、よくわけこし道のはりなさをあはれみ、かへり給ふおりの歌に、

みねの雪みきはのこほりふみわけて君にそまよふ道はまとはす

といふ歌、何事にも、おもしろきためしに云事也。これも宇治河よりおちの事なれは、とりわきて付へし。ころは春也。「春のゆき」なとよし。B

其後、かほる大将のおはするに、そらをそろしくはつかしくて、うちしつまりて居給へるを、大将は、「まとをなるを、さらぬやうにて心くるしく、こよなくもてつけてあるか」と、心まさりして、あはれもふかくおほしめし、つゐたちころの夕つく日に、もろとも、はしちかくうちふして、Cなかめいたしたまへは、おとこは過しかたの事をおもひいたして、かたみに物をおもはし（ママ）。山の方はかすみへたてゝ、さむきすさきにたてる（驚）さきも、所々はいとおかしう見えたる。しはつみ（柴）船、こゝかしこに行ちかふなと、ほのかにして、めなれぬ事のみ、とりあつめたる所なれは、みるまなく（ママ）、日ことに、そのかみの事のみ、たゝいまの心ちして、「こよなきなくさみも、此世のみかは」と、たゝあわれにて、恋しかなしと、おりたゝねとも、つねにあひ見ぬほとのくるしさを、さまよき程にうちかたらひて、D歌に、

宇ちはしのなかきちきりはたへせしとあやふむかたにこゝろさはくな

と、よみしなり。されは、「かさゝき」「しはふね（柴舟）」なと、「宇ち」に付へし。かくて、二、三日すきて帰り給ふに、おもかけも、いとおこかましくおほえけり。

一つめの欠落（A〜Bの間）に関しては、稲賀敬二氏が指摘されており（注6）、氏が使用された写本では、その箇所はちょうど一丁の裏一面に当たり、かつAもBも直前が「付べし」であることに基づき、「目移りのため脱落したと見る事もできる」と推測された。それに対して、二つめ（C〜D）は、CとDの前に共通する語句がなく、目移りの可

能性は低い。しかしながら、欠文の中で傍線を付した一節「寒き洲崎に立てる鷺（鵲カ）」は寄合の詞で、たとえば二条良基編『光源氏一部連歌寄合』（注7）にも「かさゝき　さむきすさき」とあり、この一節を故意に除いたとも考えがたい。

以上の三巻における誤脱は慶安版のみならず、いずれの整版にも見られる。このほかにも慶安版には文意不明の箇所が多くあり、それらも全ての版本に共通することから、整版の本文は同一系統といえる。

では本文は、どの版も全く同じかというと、そうではない。というのは校合すると、一部の版本にのみ脱落が見出せるからである。まず明暦版の桐壷の巻で、次の一行分、

□□□□□□けんしのきみ十二にてけんふく其日みなも

を、寛文版は欠いており、この一節がないと文意が通じない。また明暦版では行頭の六字分（□の部分）が空白で、慶安版も行頭が五字分あいている。一方、延宝版と須原屋版には空白はない。従って慶安版の空白部分を明暦版は受け継ぎ、また明暦版の一行分を寛文版は抜かしたことになる。

そのほか延宝版の夢浮橋の巻で、次の一行分、

手ならひの君の心の中さこそ有けれ御返事にいかにそやあき

を、須原屋版だけが欠いている。よって刊年不明の須原屋版は、延宝版を元に版が組まれたと推定される。（注8）

以上の二例により、五件の整版を大別すると、

慶安版－明暦版－寛文版

延宝版－須原屋版

の二種類に分かれ、－の上の版が下のより先行するので、以下の考察に取り上げるのは慶安版か延宝版に限定できる。両者を校合すると、慶安版の方が本文が良い。たとえば紅梅の巻の一節で、

北のかたは、ひけくろ大将のむすめ、かのひとりのは（い、か）けし人のはらそかし。真木はしらの、はなれ

かたくせし姫君、ほたる兵部卿の宮の（北の）かたに成しを、

において、延宝版は（　）内の文字を欠く。このような脱字が、他にも散在する。

また延宝版は、慶安版の本文を元に版が組まれたと推定される。その根拠を一例示すと、慶安版の蛍の巻には、行脚に五字分の空白がある。それは、次の＊の個所で、その前後は文脈が続いており、欠文の可能性は考えられない。

かのかつらの親王と聞えし人は、清和天／王の第五の御子、ひわの上手そかし。これを、／きりつほのみかとに第五とかけり。＊／ひわひきとあり。おもしろし。（／は改行を示す）

その他の版も＊の箇所に空白があり、須原屋版は慶安版のように行脚が十一、二字分あいているし、他の版では行の途中に空白があり、明暦版は七字分、寛文版は三字、延宝版は一字分あいている。この意味不明の余白が全ての版に見られることから、慶安版の本文を他の版は加筆せずに受け継いだと推測される。よって以下の考察では、慶安版のみを取り上げることにする。また本稿では慶安版と同一版式で、慶安版より古い可能性がある無刊記本（注4参照）を翻刻した。

二、整版と写本の比較

伊井春樹氏は『小鏡』の写本を六十本余り調査された結果、六系統に分類され、第二系統（改訂本系）以下はそれぞれ第一系統（古本系）を元に作成されたこと、また版本に関しては古活字版は第一系統、整版は第二系統に属することを明らかにされた。ただし写本の第二系統は、さらに三種類に細分化されたが、整版がどの類に所属するかは述べておられないので、先ずこの問題を解決する。

三種の相違点について、伊井氏は次のように説かれた。

第二系統の諸本は、歌・本文などにおいて青表紙本で訂正された改訂本だが、（中略）同じ改訂本系であっても異文を一部有する諸本を第二類とし、これに対してさらに後人によって改訂作業の進められたのを第三類とする。これは一度大改訂がなされた後も、所持者や書写者によって訂正され続けたことを示している。

先にも述べたように、改訂本系になると「夫生死無常云々」の跋文が付されるのが普通なのだが、『源氏小鏡』（東京大学図書館蔵）と『源氏要文抄』（京都大学文学部蔵）［岩坪注、この二本は第一類］においてはそれを持たない。本文の方は第三類に近い改訂本系である。青表紙本によって改訂された当初は跋文を持たなかったものの、後になって別人が加えたとも考えられなくはない。しかし現存するのが右の二本だけであることや、本文が第三類に近いことからみて、むしろ跋文が削除された伝本と判断する方が自然であろう。系統図ではこれを第一類に位置づけた。(注9)

右記の説をまとめると、跋文があるのは第一類のみで、第二類を後人が改訂したのが第三類であり、第一類の本文は第三類に近いとなる。しかしながら、本文異同は例示されておらず、私が調査したところ、類別できるほどの相違は見出せなかった。伊井氏が提示された唯一の具体例は、和歌の総数である。

改訂本系のもう一つの特徴としては、古本系に比べ歌数の増補していることである。例えば基春本［岩坪注、古本系の一本］が一〇九首であるのに対し、改訂本系の神宮文庫本は一二九首、同じく書陵部本では一三二首と、古本系に比べて二〇首ばかり多くなっている。(注10)

引歌を含めず登場人物の詠歌のみ数えると、確かに第二類の書陵部本は一三二首あるが、第三類の神宮文庫本も私の計算では一三二首、そして慶安版も同数である。(注11) よって跋文の有無を除くと、第二系統の写本は歌数も本文も同じと見なせる。

その結論は、整版にも当てはまり、跋文は全ての版に同文のがある。ちなみに序文は寛延版・文政版にのみ掲載

され、文章は互いに異なる。次に梗概本文を見ると、第一節で取り上げた例のうち、数字分の空白（桐壷・蛍の巻）は一部の写本には無いものの、傍注の混入（少女）と長文の脱落（玉鬘・浮舟）はどの写本にも見られる。そのほか整版にある多くの誤脱が、たとえば本稿の翻刻で（ママ）と注を付けた文意不明の箇所が、第二系統の殆どの写本にも見られる。よって整版も写本も、同一系統といえよう。

三、版本『小鏡』の挿し絵　(1)他作品の流用

本節からは、版本『小鏡』の挿し絵を問題にする。絵入本の版本は整版の八件にあり、それを吉田氏は四種類に分類された（第一節、参照）。そのうち第二類は寛文版・寛延版・文政版と三種もあるが、図様はすべて同じである。そこで以下、第一類を明暦版、第二類を寛文版、第三類を延宝版、第四類を須原屋版と呼ぶことにし、本節では第三・四類から取り上げる。というのは両者とも、他の作品の挿し絵を転用しているからである。

まず須原屋版は、『小鏡』を梗概化した『源氏鬢鏡』（以下『鬢鏡』と称す）の図柄を流用していると、吉田氏は見抜かれた（注3の著書、上三六八頁）。『鬢鏡』の諸本は上方版と江戸版に分かれ（同書、上三九一頁）、両者の図柄は同じでも描き方は異なり、江戸版の須原屋版『小鏡』と一致するのは同じく江戸版『鬢鏡』で、その画風は「師宣風（師宣自身か、さもなければその門弟に描かせたか）」（同書、上三九〇頁）である。江戸版『鬢鏡』は大本であるのに対して、須原屋版は中本で大きさが異なるものの、大本の挿し絵は半葉（一頁分）の下部（全体の三分の二）にしかないため、それを被彫（かぶせぼり）して左右を少し省略すれば中本に収まる。逆に縦の寸法は中本の方が、大本の三分の二より長いので、須原屋版の図は上部が広く空いている。

次に延宝版『小鏡』は、それ以前に刊行された明暦版『小鏡』と比較すると、「同じ図様場面（描かれた図様の内容は同じ箇所だが、構図その他は必ずしも同じとは限らない）」は延宝版（全四四図）に三一図あり、そのうち

次の四図には問題があると、吉田氏は指摘された（同書、上三六一頁）。順に見ていくと、

第6図（末摘花）　末摘花が琴を弾いているところであるべきところ、碁を打っている。あるいは、この部分、明暦大本第三図（空蝉）空蝉と軒端荻とが碁を打つ図様の構図を剽窃したか。

において、この絵は明暦版よりも『おさな源氏』竹河の巻の方が似ている（挿図1）。『おさな源氏』にも上方版と江戸版があり、野々口立圃が挿し絵（全一三一図）を描き、承応四年（一六五五）に著した源氏物語の梗概書『十帖源氏』[注12]を作者自ら平易に通俗化し、絵も一二〇図に減らし、寛文元年（一六六一）に出版したのが上方版『おさな源氏』である。立圃が寛文九年に他界したのち、同十二年に江戸で出たのが江戸版であり、その絵は菱川師宣の手になり、全六四図と少なくなっている。図柄を比較すると、『十帖源氏』と上方版『おさな源氏』は被彫によるためか同一の画面が多いのに対して、

『おさな源氏』の上方版と江戸版の挿絵を比較すると、後者〈松会版〉は江戸の絵師による関係上、前者〈立圃画〉の挿絵を参照しながらも、比較的前者に忠実に描いたものと、画風の事物や人数を若干変更して改刻したものとに区別することができよう。

と、吉田氏は述べておられる（同書、上二七七・二七八頁）。問題の絵の場合、上方版と江戸版では女性の数や衣裳の模様が異なり、延宝版『小鏡』は江戸版『おさな源氏』を元に少年と貴人を追加したと考えられる。延宝版も江戸版であるので、同じ所で三年前に出版された方を利用したのであろう。なお、竹河の巻の舞台は玉鬘の屋敷で、それを末摘花の巻に転用すると、末摘花の邸宅で源氏が頭中将と出会ったところになる。また、延宝版は男性の数が『おさな源氏』より二人も増えており、このうち貴人を加えたのは物語の内容に合うが、少年に関する記述は物語にはない。この件に関しては、第六節で問題にする。

第11図（須磨）　八月十五夜、源氏が須磨で故郷を憶う図だから、月夜である筈のところ、月が描かれていな

いなど。

この図は明らかに明暦版『小鏡』より、江戸版『おさな源氏』と一致する（挿図2）。この場面を吉田氏は八月十五夜とされたが、そうではなく、その日の夕方、源氏が海の見える廊に出て佇んでいる所と見れば、月が描かれていなくても構わない。

第29図（横笛）　上方版（岩坪注、明暦版のこと）は、源氏が立姿で薫の遊ぶのを傍観しているのに対して、座して薫を膝の上に抱いている。

本図も江戸版『おさな源氏』の柏木の巻、薫の五十日の祝いと一致する（挿図3）。吉田氏が作成された延宝版の「挿絵所在個所一覧表」（同書、上三六四頁）によると、他の巻に紛れ込んだ絵が二八図あり、この第29図（横笛）もその一つで、横笛の巻の挿絵が柏木の巻の本文中にあると見なされた。しかしながら本図を柏木の巻の絵と認めると、当巻の本文に収まることになる。

第30図（鈴虫）　八月十五夜に源氏、女三の宮の方に赴き、仏前で虫の音を賞する条であるが、上方版（岩坪注、明暦版）において既に十五夜の月を描かず、鶴屋版（岩坪注、延宝版）はさらに、仏前までも描いていない。従って構図もかなり変っている。

本図も江戸版『おさな源氏』の梅枝の巻にあり（挿図4）、本来は明石の姫君の入内に備えて、源氏が草子を書いている件である。それを延宝版は別の巻に置いたため、解りにくくなってしまった。一つ前の第29図は柏木の巻、第31図は夕霧の巻であるので、この第30図はその間の巻（横笛か鈴虫）になる。延宝版以前に刊行された明暦版と寛文版の挿し絵を見ると、横笛の巻（挿図3－2）は朱雀院から贈られた竹の子を幼い薫が噛る図、鈴虫の巻（挿図4－2）は女三の宮の傍らで、源氏が和歌を扇に書き付ける場面である。二人の前には硯箱が置かれており、筆で書くという点では延宝版の絵（挿図4－1）と共通する。

以上は延宝版の挿し絵（全四四図）で明暦版と図様場面が重なる三一図のうち、吉田氏が問題点を提議された四図である。今度は残りの一三図、すなわち明暦版に見えない図様場面で、延宝版が新たに加えたと吉田氏が推定された箇所を取り上げる。それらについて氏は、次のように整理された（同書、上三六三頁）。

1.「絵入源氏物語」挿絵の利用、一図。
2.「絵入源氏物語」の他巻の挿絵の流用、一図。
3.『十帖源氏』挿絵の流用、一〇図となって、立圃の画作によるものが、圧倒的に多いことを知ることができる。

「絵入源氏物語」（以下、『絵入源氏』と称す）とは、山本春正が慶安三年（一六五〇）に跋を付けて出版した絵入本源氏物語で、挿し絵は全部で二二六図ある。[注13] 吉田氏は『絵入源氏』と『十帖源氏』の影響を説かれたが、先の四例がすべて江戸版『おさな源氏』の転用であったように、この一三例も全てそれによる。たとえば紅梅の巻に関して吉田氏は、

明暦大本第四四図に寄りつつ、「絵入源氏」第一六一図（紅梅）を併せ摂取か。但し、按察大納言の姿を省いている。（同書、上三六三頁）

と推測されたが、これは江戸版『おさな源氏』御法の巻と一致する（挿図5）。もう一例だけ示すと、夢浮橋の巻を吉田氏は、「『十帖源氏』第二一図（花宴）の流用か。但し、構図の左右が逆。」（同書、上三六三頁）とされたが、江戸版『おさな源氏』夕霧の巻は構図の左右のみならず、月の有無をはじめ庭や建物など細部の描写に至るまで延宝版と合致する（挿図6）。[注14]

そこで改めて延宝版（全四四図）と江戸版『おさな源氏』（全六四図）を比較すると、前者の絵はすべて後者の絵によることが判明した。そのうち二人を追加した末摘花の巻（前掲）以外は、被彫かと思われるほど同じである。

ちなみに両本の表紙の寸法は、ほぼ同じである。

延宝版の挿し絵で、江戸版『おさな源氏』と同じ巻の絵を用いたのが二七図、他の巻から利用したのが一七図あり、その一七図の巻名をすべて列挙する。たとえば「末摘花↑竹河」とは、『おさな源氏』竹河の巻の絵を延宝版は末摘花の巻に転用したことを示す。

末摘花↑竹河。花散里↑浮舟。明石↑夕顔。玉鬘↑椎本。蛍↑東屋。野分↑鈴虫。梅枝↑東屋。鈴虫↑梅枝。御法↑蜻蛉。匂宮↑夢浮橋。竹河↑須磨。紅梅↑御法。橋姫↑浮舟。早蕨↑野分。東屋↑宿木。蜻蛉↑花散里。夢浮橋↑夕霧。

このうち他の巻の流用であっても、不自然ではない例もある。たとえば「御法↑蜻蛉」は、いずれも法事の場面（紫の上主催の法華経千部供養↑浮舟の四十九日）であるし、「蜻蛉↑花散里」では共に時鳥が鳴いている。それに対して明らかに無理な図の方が多く、たとえば延宝版の末摘花（挿図1）・鈴虫（挿図4）の巻は吉田氏が指摘されたし、「花散里↑浮舟」では花散里の屋敷から宇治橋と舟が見えている。同じ巻の絵を引けば問題が起きないのに、わざわざ他の巻のを使った結果、物語の内容に合わなくなり解りにくくなってしまったのである。

四、版本『小鏡』の挿し絵　(2)他作品の改変

本節では絵入版『小鏡』では最古の明暦版（大本）と、次いで古い寛文版（小本）とを取り上げる。吉田氏は両者を比較されて、

本文と挿絵の板下が小本に見合うように新たに書き直されているが、内容はほとんど変らない（但し、第二十四図胡蝶のみ例外で、図様個所が異なる）。

と説かれた（注3の著書、三五九頁）。たしかに胡蝶の巻は舟楽（明暦版）と、その翌日の童舞（わらわまい）（寛文版）で異

なる。寛文版以前に刊行された挿し絵を見ると、『絵入源氏』は両方とも取り上げるが、『十帖源氏』『おさな源氏』（上方版）と『鬢鏡』は童舞しか掲載しない。[注15] また絵巻物や色紙絵なども、舟楽より童舞を採る方が多いので、[注16] 寛文版は明暦版よりも有名な図柄を選択したと言えよう。

このほか両版で、挿し絵の場面が違う巻は、他に二つある。一つは澪標の巻で、明暦版は源氏の一行が住吉詣でをした所、寛文版はその翌日、住吉神社を出立した源氏が難波で明石の君へ手紙を書いて送る所である（挿図7）。『絵入源氏』『十帖源氏』『おさな源氏』『鬢鏡』いずれも、翌日の方しかない。もう一つは初音の巻で、寛文版は元日に源氏が明石の姫君を訪れると、明石の君から祝儀物が届けられ、女童たちが庭の小松を引いている所、明暦版は同じ日の夕方、源氏が明石の君を訪問した所である（挿図8）。『絵入源氏』と『鬢鏡』は寛文版と同じ構図、『十帖源氏』と『おさな源氏』も小松引きを略してはいるが同じ光景であり、四件とも明暦版の情景を採用していない。

以上の三巻（胡蝶・澪標・初音）において、いずれも寛文版が明暦版の絵を選択しなかったのは、版本の世界では寛文版の図様の方が、その巻を代表する有名な場面であったからと考えられる。

そのほか明暦版（大本）と寛文版（小本）の相違点について、吉田氏は次の二点を指摘された（前掲書、三五九頁）。

その一は、形態である。既述のように、大本挿絵は一図一頁大ではなく、横三行分が詰った縦長な特異な形態だったが（岩坪注、本稿の次節参照）、小本では、一図一頁大に改めている。

その二は、図様の構図はほぼ大本に拠りながら、登場人物の数、背景、車馬の位置など異なっており、機械的な縮小図ではない。

右記の二点は、相関連する。というのは大本（縦二七×横一九センチ）の挿し絵を、そのまま小本（一六×一一セ

ンチ）に移すのは無理であり、そこで寛文版は車争いの人数を減らしたり（葵の巻）、明暦版の眠っている家来三人（箒木）や屋内の女性三人（夕顔）を削ったりしたのであろう。

そのほか両版の相違を挙げると、明暦版の絵で物語に合わない部分を、寛文版は描き直している。たとえば月の形を見ると、花宴の巻で源氏が初めて朧月夜に出会ったのは「二月の二十日あまり」と物語に記されているのに、明暦版は半月であり、寛文版は有明けの月に直している。ちなみに『十帖源氏』も『おさな源氏』も満月に近く、正確ではない。また寛文版が海を描き加えたり（須磨の巻）、逆に明暦版の舟を消したりしたのも（関屋の巻）、物語の内容に合わせたからと考えられる。このように手を加えたのは二四図あり、残りの三〇図は明暦版とほぼ同じである。延宝版が『おさな源氏』を、また須原屋版が『鬢鏡』をそれぞれ流用したのに対して（第三節、参照）、寛文版は明暦版を元にしながら改作している。その類例としては、『絵入源氏』の誤りを正しく描き直した一華堂切臨の『源氏綱目』が挙げられる。(注17)

五、版本『源氏小鏡』の挿し絵　(3)物語本文との関係

明暦版の挿し絵の入れ方には特異な点があると、吉田氏は指摘された（注3の書、三五四頁）。

挿絵五十四図について注目すべきは、挿絵の大きさが半葉一頁大ではなく、本文半葉十三行の内、三行分を残して十行分に図様をあてていることである。中には三行分の他に、上部五、六字分をも本文にあてた（第三二図梅枝・第三五図若菜下・第四〇図御法）変形のものもある。

「変形のもの」を全て列挙すると、挿し絵の右上の隅を四角に切り取り、そこに本文を二行（篝火の巻）、四行（玉鬘）、五行（早蕨）、六行（若菜下）、七行（梅枝）記したり、絵の上部を約六字分すべて空けて本文に当てたりしている（御法）。

挿し絵に入り込んだ本文中、最も短いのは「調させ給ふ」（篝火の巻）で、丁度そこで文章が終っている。その他の例も、すべて文末か、文中の区切りのよい所である。従って、わざわざ本文を絵の一部に入れたのは、一文の途中に絵がこないようにしたためと推測される。その工夫は他の巻にも見られ、たとえば箒木の巻は絵が丁の裏にあり、右側に三行分あいているのに、本文は「をそいひける」（「をぞ言ひける」）しかないし、逆に夕霧の巻は丁の表に絵があり、左側に本文が三行あり、前の丁の裏は末尾が七行分も空いている。これらは皆、絵の前で文章が終るようにしたからと解せる。

ちなみに明暦版以後の版本『小鏡』を調べると、いずれも半丁すべてを絵のスペースに当て、そこに本文を置くことはないものの、寛文版は絵の前葉に空白を設け、明暦版と同じ配慮をしている。それに対して他作品の挿し絵を流用した延宝版と須原屋版は、絵の前後に余白はなく、そのため文章の途中に絵がくることもある。

さて明暦版の挿し絵は、すべて上部に広い空間があり、その個所には一面に横線が引かれているだけなので、そこに本文を入れても支障はない。ただし先に絵を版木に彫ると、その横線部分を削り、埋め木をしないと本文を彫れない。それは面倒なので、先に本文を彫り、あらかじめ一巻につき挿し絵用に半丁（厳密には十行分）ずつ空け、絵の前で文章が終るようにしたが、止むを得ない場合は絵を置くスペースの上部に本文を入れたと推定できる。

一般に挿し絵は本文の内容を絵画にしたものであり、両者は密接に関係しているはずである。ところが明暦版の図版の中には『小鏡』に記されていない場面が含まれていて、それは行幸・若菜下・椎本の巻であると吉田氏は指摘された（注3の著書、三五七頁）。それは朝顔の巻にも当てはまり、当巻の図は有名な雪転（ゆきまろば）しで、すでに十六世紀初期頃の源氏絵扇面散屏風（浄土寺蔵）にも描かれ、版本の挿し絵では『絵入源氏』をはじめ『十帖源氏』『おさな源氏』や明暦版・寛文版・延宝版・須原屋版『小鏡』にも見られる。にもかかわらず『小鏡』には、その情景の記述は一切ない。ということは挿し絵の場面は、『小鏡』本文とは別に選ばれたことになる。

明暦版の挿し絵が依拠した資料に関しては、清水婦久子氏が、

土佐派の絵と構図や細部が一致することが多い。若菜上巻の蹴鞠の場面は、土佐光吉筆『源氏物語画帖』（京都国立博物館蔵）の、建物の内部から描く大胆な構図と全く同じで、初音巻で源氏が明石を訪れる場面の図は、伝光則筆『源氏物語図色紙』（堺市博物館蔵）の構図を逆にした他は細部まで一致する。

と述べておられる[注18]。確かに明暦版の絵の中には、それ以前の版画（『絵入源氏』『十帖源氏』）と異なり、土佐派などの絵と合致するものが多い。

六、源氏物語と源氏絵の相違

源氏絵は源氏物語を絵画にしたものであるのに、物語の内容に合わないものがある。その一例として、若紫の巻における垣間見の場面を取り上げる。まず、その個所の物語本文を引用する。

人なくて、つれづれなれば、夕暮のいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のほどに立ち出でたまふ。人々は帰したまひて、惟光朝臣とのぞきたまへば、ただこの西面にしも、持仏すゑたてまつりて行ふ、尼なりけり。

（本文は、小学館・日本古典文学全集による。以下、同じ）

このあと物語は二人の女房、女の子たち、そして若紫の登場と続く。源氏がこの北山に出かけたのはお忍びであり、「御供に睦ましき四五人ばかり」しか連れず、そのうち垣間見に同伴したのは惟光だけと、物語では読み取れる。すると当場面を描いた絵も、源氏と惟光だけかというと、そうとは限らない。そこで男性の数（光源氏も含む）に注目して分類すると、次のようになる。

A　大人、一人。

1源氏物語図扇面散屏風、室町時代、浄土寺。

2 源氏物語図扇面貼交屏風、室町時代、永青文庫。
3 源氏物語扇面画帖、室町時代、個人蔵。(注19)
4 「源氏絵詞」土佐光成（生没一六四六～一七一〇年）、静嘉堂文庫。(注20)
5 『源氏物語五十四帖絵尽』渓斎英泉画、文化九年（一八一二）刊。

B　大人、二人。

1 源氏物語絵巻、南北朝時代成立、天理図書館・メトロポリタン美術館。
2 源氏物語画帖、土佐光信グループ、一五世紀後半～一六世紀前半、ハーヴァード大学美術館。(注21)
3 源氏物語画帖、土佐光吉（生没一五三九～一六一三年）、京都国立博物館。
4 源氏物語画帖、住吉如慶（生没一五九九～一六七〇年）、大英図書館。(注22)
5 『絵入源氏』山本春正、慶安三年（一六五〇）。
6 『十帖源氏』野々口立圃、承応四年（一六五五）成立。
7 『源氏綱目』一華堂切臨、万治三年（一六六〇）刊。
8 『おさな源氏』野々口立圃、寛文元年（一六六一）刊。
9 『源氏大概抄』野々口立圃、刊年未詳。
10 源氏物語画帖、土佐光芳（生没一七〇〇～七二年）、高松・松平文庫。(注23)
11 源氏物語画帖、フランス・パリ国立図書館。(注24)

C　大人一人、少年一人。

1 明暦版『小鏡』、明暦三年（一六五七）刊。
2 寛文版『小鏡』、寛文六年（一六六六）刊。

3『源氏大和絵鏡』菱河師宣画、貞享二年（一六八五）刊。
4『源氏絵物語』歌川豊国（三世）画、弘化年間（一八四四～四七）刊。

D　大人二人、少年一人。
1源氏物語色紙画、オーストラリア・メルボルン・ヴィクトリア州立美術館。[注25]

E　大人四人、少年一人。
1源氏物語絵屏風、伝狩野永徳筆、宮内庁。[注26]

右記のA～Eのうち、物語本文と一致して問題がないのはBだけで、それ以外を順に見ていく。まずAで、惟光が描かれなかった理由は三通り考えられる。

①紙面の都合による。たとえば『源氏物語五十四帖絵尽』（右記の分類Aの5）は袖珍本（縦九×横六センチ）で、そこに登場人物すべてを描くのは無理である。

②彩色画ならば、源氏の衣裳を惟光より華麗に描いたりして区別できる。しかしながら静嘉堂文庫（A4）のような白描では、色彩による描き分けはできない。ちなみに版本の挿し絵も墨一色のため、『十帖源氏』（B5）と『おさな源氏』（B7）の源氏と惟光は姿などが同じで見分けがつかず、前に立つ方が源氏かと判断される程度である。

③絵師のテキストには、二人と明記されていなかった。たとえば『源氏絵詞』（京都大学蔵）[注27]には、「人（柴垣ノ外）烏帽子」とあるだけで、人数は指定されていない。

次にCの大人一人、少年一人についても三種類の推測が成り立つ。まずAの理由②と同じで、二人のうち何れが源氏であるか明確にするため、従者を少年に描いた。ただしBの大人二人で、小道具を使うことにより主従を区別した例がある。たとえば刀（B3）や長柄傘（ながえがさ）（B11）を持つ方が惟光であるし、二人の烏帽子の違い（B2～5）

や、冠と烏帽子の被り分け（B7）でも見分けられる。もっとも光源氏はお忍びのため、冠は不適切ではあるが。

Cの二つめの理由は、物語には書かれていない少年が梗概書には登場するのである。それは室町時代に成立した『源氏最要抄』で、源氏が少年の姿に変装して出かけたとある。

北山の大覚の僧都をめせ共、「年のたけて室の台へだにも出がたふ侍る」とてまいらず、「更ば殿上の子供の姿に、御形をやつし奉て、北山へ入奉れ」と御宣旨あり、殿上人車を十四五りやう計にて御供申侍り。(注28)

この記述によると、一つめの理由（家来を少年に描いた）とは逆になり、少年が源氏になる。しかしながら明暦版『小鏡』の少年は大人の後ろに座っているし、寛文版『小鏡』の少年はうつむいていて、これでは惟光だけが垣間見たことになる（挿図9）。

そこで今から述べる三つめの推測が、最も有力かと思われる。それは当時、貴人が少年をお供に連れる習慣があり、それを描くのが絵画の世界でも習わしになっていたのである。まず物語から例を捜すと、源氏が夕顔の元へ通う際、身元を知られないようにするため家来は惟光のほか、「かの夕顔のしるべせし随身ばかり、さては顔むげに知るまじき童（わらは）ひとりばかりぞ、率ておはしける。」とある（夕顔の巻、一二六頁）。源氏が下級者を装い、お供を最小限にした中に「童ひとり」がいることから、普段の外出には少年が二人以上いたと推理できる。また源氏が夕霧を伴い住吉参詣をした折には、源融の先例をまねて「童随身」を十人いただき、「馬副童（むまぞひわらは）」も付き添ったとある（澪標の巻、一九四頁）。

絵画においても、古くは平安末期に成立した『年中行事絵巻』に例が見出せる。たとえば関白賀茂詣の場面では、束帯姿の前駆（さきがけ）の公卿たちの中に、あるいは夜、宮中に向かう束帯姿の後ろなどに、少年の姿が散見される。そのほか松明や弓矢を持った少年や牛飼童、あるいは僧侶に付き添う稚児もいる。他の作品に目を移すと、承久本『北野天神縁起』（十三世紀成立）で道真が弓を引く場面には、太刀と扇を持って座る少年がおり、その解

説に、

子供が身分の高い大人の従者をつとめている例はきわめて多く、中には稚児である者も少なくない。多くは美少年で一種の愛玩のためであったとも言える。『北野天神縁起』にはそうした稚児がたくさん描かれている。とある。(注29)

その観点により源氏絵を見直すと、垣間見の場面で大人と子供は、源氏とお供の少年と解せる。そこで前出の『源氏絵詞』(京都大学蔵)の一節、「人(柴垣ノ外)烏帽子」を見た絵師が、源氏を烏帽子姿に描き、テキストにない少年を慣習に則り付け足したと考えられる。ちなみに、この垣間見の数時間前の光景を住吉具慶が描いた『源氏物語絵巻』(注30)を見ると、源氏の前に二人の男性(惟光と良清か)が立って周りの景色を説明し、少し離れて男と少年が一人ずつ座っている。物語には少年の記述はなく、果たして源氏が連れていたかどうかは分からないが、絵師の判断で加えられたのであろう。前掲の分類D(大人二人、少年一人)の少年も、同様に解釈できる。またE(大人四人、少年一人)では、垣間見ているのは源氏のみで、家来(大人三人、少年一人)は離れた所にいる。この従者四人は源氏が帰した者たちと見なすと、小柴垣の外にいるのは源氏のみで、分類A(大人一人)に当てはまることになる。

さて、版本『小鏡』の挿し絵には、他にも物語に記されていない少年が散見され、ここでは明石の巻を取り上げる。源氏が須磨へ退く際に少年を同行させた記述は、物語にはない。しかしながら源氏の一行が須磨から明石へ移る舟の中に、須原屋版『小鏡』は少年をひとり描いている(挿図10)。ちなみに『絵入源氏』にも同じ場面があり、都から須磨へ舟で行く図も載せるが、いずれも大人ばかりである。一方、源氏が明石の君の元へ馬で通う情景には、『絵入源氏』をはじめ『十帖源氏』『おさな源氏』や明暦版・寛文版『小鏡』に、刀を肩に掛けた一人の少年がいる(挿図11)。これらの少年は絵師が勝手に付け加えたのではなく、嵯峨本『伊勢物語』の挿し絵を模倣したと推測される。すなわち舟の絵は第九段・隅田川、馬の絵は第八段・浅間山の図様によると思われる(挿図12)。たとえば

馬に乗った源氏に従う家来の一人が、片手を挙げている仕草も一致する。慶長十三年（一六〇八）に刊行された嵯峨本の図柄は、それ以後の絵に踏襲され、

まことに数多い江戸時代の『伊勢物語』版本が嵯峨本の絵の影響から逃れ出たのは、きわめて末期、延享・宝暦の月岡丹下・西川祐信の頃、つまり絵本流行の時代になってからのことである。[注31]

という程であるから、それが源氏絵にも流用されたのであろう。

ちなみに嵯峨本の図柄は、室町時代後期に制作された小野家本『伊勢物語絵巻』と同じであるし、業平が少年を伴う例は、鎌倉時代の遺品『伊勢物語絵巻』（和泉市久保惣記念美術館蔵）にも見出せる。それは東下りの途中、富士山に向かう一行で、三頭の馬に一人ずつ乗り、歩く従者が十人いるうち、二人が少年で、うち一人は刀を肩に掛けている。伊勢物語には、「友とする人、ひとりふたりして行きけり。」とあり、「ひとりふたり」とは馬に乗れる身分の友人を指し、徒歩の者は含まないと解釈すれば、絵巻物に合う。歩く家来については物語に書かれていないので、絵師が自由に描け、大人ばかりでも、あるいは数人でも構わないはずである。しかしながら、貴人の外出には少年を含むお供が大勢いる、という平安朝以来の伝統が、物語[注32]にも大和絵の世界にも受け継がれているのである。

終わりに

従来の源氏絵の研究では、別の物語絵も取り上げて比べることは稀であった。しかしながら当時の絵師は、様々な文学作品を描いており、従って、源氏絵と他の物語絵との比較検討も必要である。

たとえば数人が乗った舟の中に少年が一人だけ混じる構図は、元禄五年（一六九二）刊『竹取物語』の挿し絵にも使われている。そのほか承応年間（一六五二～五四）頃に刊行されたか[注33]と思われる『栄花物語』にも挿し絵があ

り、関白師実たちが布引の滝を見に出かけた場面の絵は、嵯峨本『伊勢物語』第八七段（布引の滝）の図様に類似する（挿図13）。また春日祭の上卿を勤仕した忠実中納言の行列を、宇治橋が眺められる桟敷で四条宮（寛子）が見物した折の挿し絵は、『絵入源氏』宿木の巻で、宇治橋を渡る浮舟の一行を薫が見る図柄に似通う（挿図14）。従って今後は、源氏絵どうしの比較に留まらず、他の絵画との影響も考慮しなければならない。

注

1、川瀬一馬氏『古活字版之研究』（増補版、昭和四二年）。

2、小稿「古活字版『源氏小鏡』（国会図書館蔵　解題・翻刻）」（「親和国文」第三五号、平成一二年一二月）。なお本稿に引用する古活字版『源氏小鏡』は、国会図書館本による。

3、吉田幸一氏『絵入本源氏物語考』上（『日本書誌学大系』五三）三二四頁、青裳堂、昭和六二年。以下、小稿に引用した同氏の説は、すべて本書による。また、26頁以下に掲載した挿図1～11も、同書による。

4、ただし〔い〕より〔ろ〕の方が古いかもしれないが（注3の著書、三二七・三四〇頁）、本稿では便宜上、刊記が明らかな〔い〕を選んだ。また〔は〕は挿し絵を置く個所が空白で、〔ハ〕の校正本だとすると〔は〕の方が古くなる。しかしながら空白のまま公刊されたとは考えられないので（同書、三二八頁）、〔ハ〕を選択した。

5、伊井春樹氏『源氏物語注釈史の研究』八五四頁、桜楓社、昭和五五年。

6、稲賀敬二氏『源氏物語の研究　成立と伝流』二三五頁、笠間書院、昭和四二年。

7、岡見正雄氏『良基連歌論集』三（『古典文庫』九二、昭和三〇年）所収。

8、両版の前後関係については、版本の状態や画風に基づき、須原屋版は「延宝三年刊鶴屋版の向うを張って、新

たに改刻したもので、天和・貞享（一六八一～一六八七）頃刊か。」と推定されている（注3の著書、上三六七頁、下五〇六頁）。

9、注5の著書、八五三頁。

10、注5の著書、八四二頁。

11、本稿の翻刻では引歌五首も数えたので、最終歌は一三七番である。なお引歌は38・45・55・70・76番である。

12、跋文の一節「老て二たひ児に成たるといふにや」が、著者の還暦を指すとすれば、立圃が還暦を迎えた承応三年（一六五四）に本書が成立したと、渡辺守邦氏は述べられ（『日本古典文学大辞典』「十帖源氏」の項）、吉田氏も同意された（注3の著書、上四・二一二頁）。しかしながら還暦とは満六〇歳、数えで六一歳であり、一五九五年生れの立圃の還暦は承応四年になる。なお『十帖源氏』の初版は、万治四年（一六六一）刊本より古いと、吉田氏は判断された（同書、二一八頁）。

13、承応三年（一六五四）本を初版とする吉田幸一氏の説に対して、初版は無刊記で慶安三年（一六五〇）冬から翌年秋の間に刊行されたと、清水婦久子氏は唱えられた（清水氏「版本『絵入源氏物語』の諸本（上）」、「青須我波良」三八、平成元年一二月）。

14、同じ図柄が、弘化年間（一八四四～四七）に刊行された歌川豊国（三世）画『源氏絵物語』柏木の巻にも見られる。

15、ただし童舞の日、楽人たちは舟ではなく廊下で演奏したのに、『十帖源氏』と『おさな源氏』（上方版）は舟の中に楽人がいる。これは間違えたのではなければ、二つの異なる場面を描く異時同図法かもしれない。たとえば「土佐光吉（生没一五三九～一六一三年）が主宰した工房作と目される」屏風で、「光吉が色紙に描いた場面を、屏風の大画面に拡大したもので、前日の船楽と翌日の仏事の光景を重ね合わせたような図様」があり

（注16の著書、一二三頁）、それが源氏絵の伝統的手法かもしれない。岡山美術館蔵の貝合（かいあわせ）にも、両日の行事が一緒に描かれている（注26の著書の函裏に写真あり）。

16、田口栄一氏が作成された「源氏絵帖別場面一覧」によると、絵巻・色紙などで船楽の場面のみ取り上げたのは五件しかないのに対して、童舞のみ選んだのは十件にも及ぶ（同氏『豪華「源氏絵」の世界　源氏物語』、学習研究社、昭和六三年）。

17、清水婦久子氏の論（注13の論文）。

18、注17に同じ。

19、以上の三点は、『源氏物語の絵画』（堺市博物館、昭和六一年）所収。このほか、「伝土佐光吉の『源氏物語画帖』や狩野永徳の『源氏物語図屏風』、それに扇面などには光源氏一人しか描かれなかったり」と、伊井春樹氏が指摘されている（注20の著書、四七五頁）。

20、伊井春樹氏『源氏綱目　付源氏絵詞』（源氏物語古注集成10、桜楓社、昭和五九年）に、影印と翻刻を掲載。

21、「国華」第一二三二号（平成九年八月）に掲載。

22、『江戸名作画帖全集』Ⅴ（駸々堂、平成五年）に掲載。

23、国文学研究資料館にマイクロフィルムがあり、当館の目録には「源氏物語絵」とある。

24、国文学研究資料館にマイクロフィルムがあり、当館の目録には「けむしものかたり」とある。彩色画。全十冊。第三冊のみ一六面、他は各二〇面。『絵入源氏』と構図が一致する絵が少なくない。

25、伊井春樹氏「『源氏綱目』の挿絵」（『講座平安文学論究』8、風間書房、平成四年）に、写真と解説がある。

26、『源氏物語』（『日本の古典』5、世界文化社、昭和四九年）に掲載。

27、注20の著書に、全文翻刻されている。

28、注5の著書、九二二・九三一頁に引かれている。なお中野幸一氏編『源氏物語古註釈叢刊』5所収の『源氏最要抄』は系統が異なり、当該本文はない。

29、渋沢敬三氏編『日本常民生活絵引』1、一九八頁、平凡社、昭和五九年。

30、茶道文化研究所蔵。榊原悟氏「住吉派『源氏絵』解題」（「サントリー美術館論集」三号、平成元年十二月）に、写真と解説がある。

31、片桐洋一氏『伊勢物語　慶長十三年刊嵯峨本第一種』二五一頁、和泉書院、昭和五六年。なお千野香織氏『絵巻　伊勢物語絵』（「日本の美術」第三〇一号、至文堂、平成三年六月）には、嵯峨本の挿し絵のみを全て掲載している。

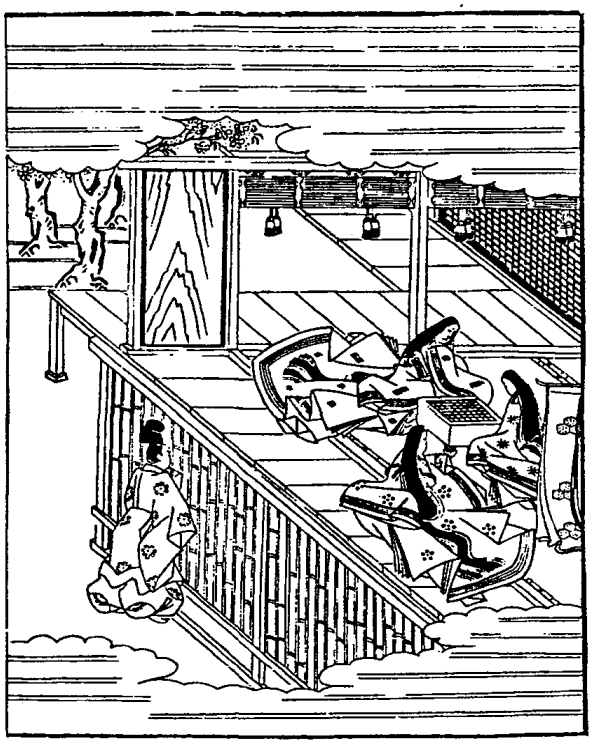
32、たとえば光源氏が北山へ行ったとき、物語では「御供に睦ましき四五人ばかり」と少数であるのに、前掲の『源氏最要抄』には、「殿上人車を十四五りやう計にて御供申侍り。」と大勢である。

33、『栄花物語』上（日本古典文学大系）の解説、一二頁。

［付記］脱稿後、本稿の第六節で問題にした垣間見の場面（若紫の巻）を描いた資料が、大阪青山歴史文学博物館に二件あることに気づいた。一件は「文禄三年（一五九四）五月日　龍女筆」と記された源氏物語絵巻（『大阪青山短期大学所蔵品図録』第一輯）、もう一件は「州信」印のある桃山時代後期狩野派の源氏物語図屏風（同シリーズ第二輯）で、いずれも垣間見ているのは光源氏のみで、家来はいない。

（挿図１－２）明暦版『小鏡』空蝉の巻

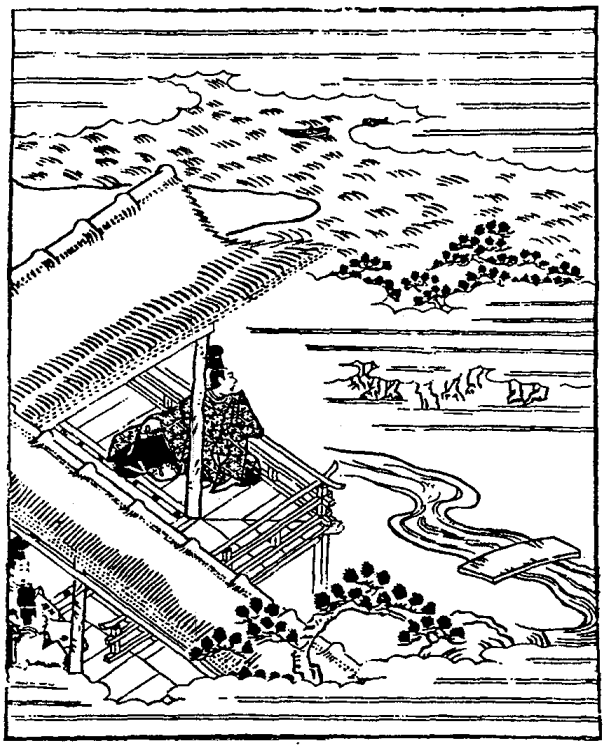
（挿図１－１）延宝版『小鏡』末摘花の巻



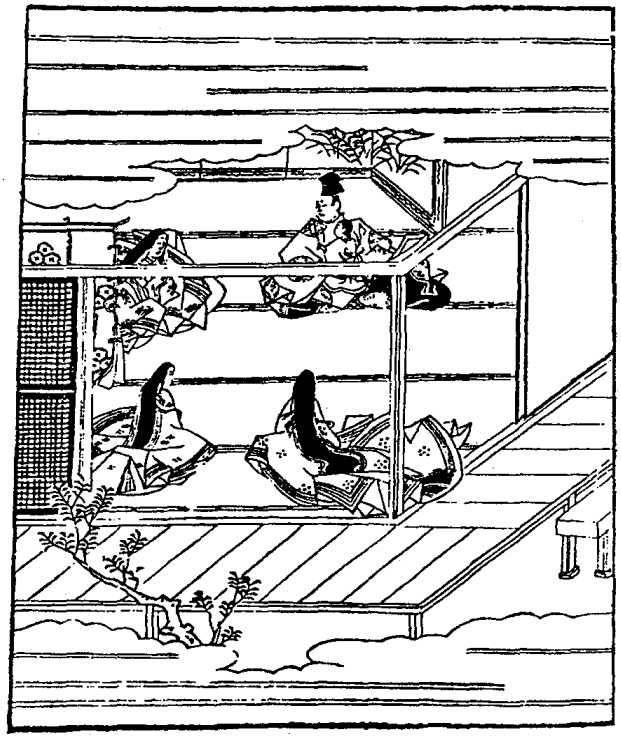
（挿図１－４）江戸版『おさな源氏』竹河の巻

（挿図１－３）上方版『おさな源氏』竹河の巻

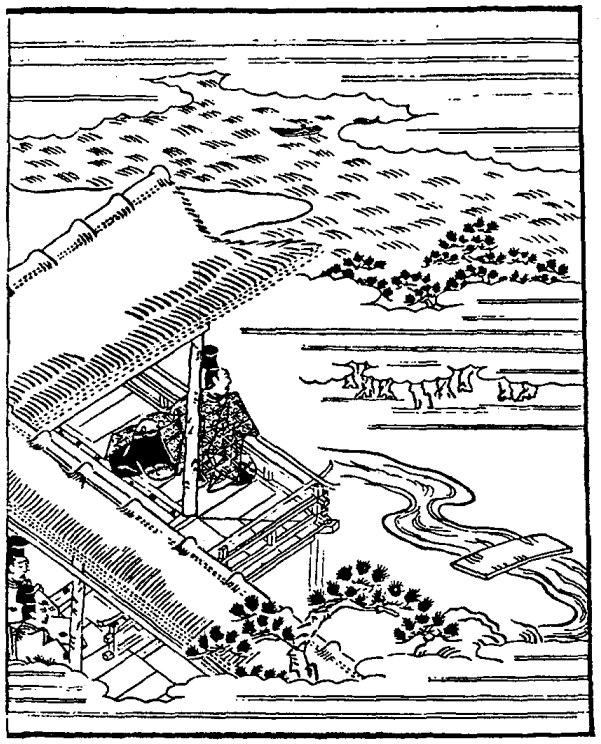
（挿図２－２）明暦版『小鏡』須磨の巻



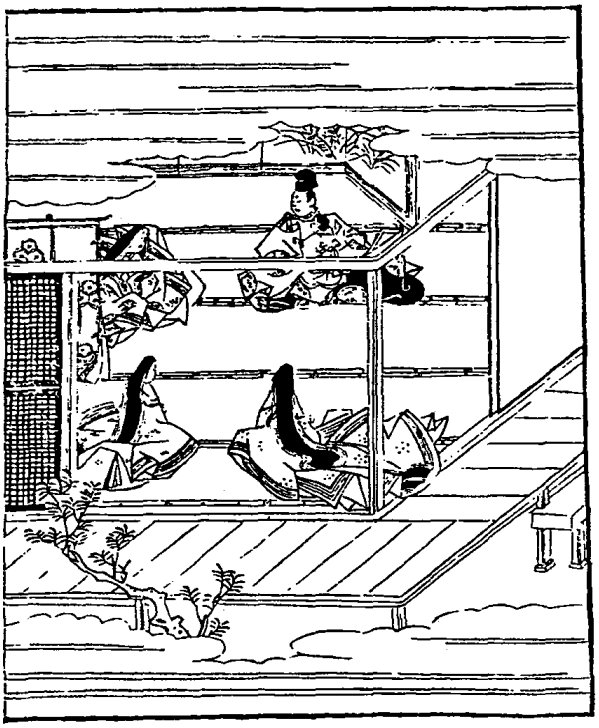
（挿図２－１）延宝版『小鏡』須磨の巻



（挿図３－１）延宝版『小鏡』柏木の巻

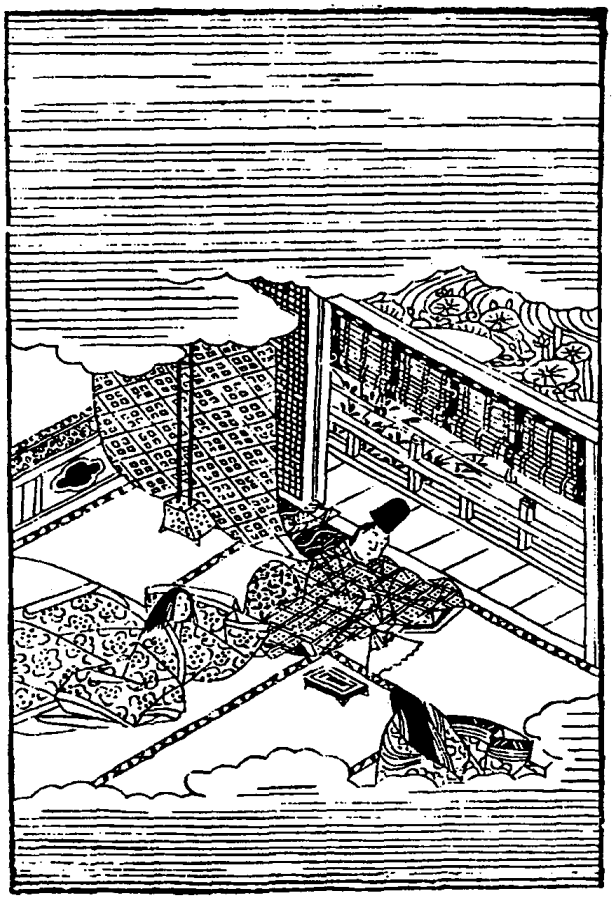


（挿図２－３）江戸版『おさな源氏』須磨の巻

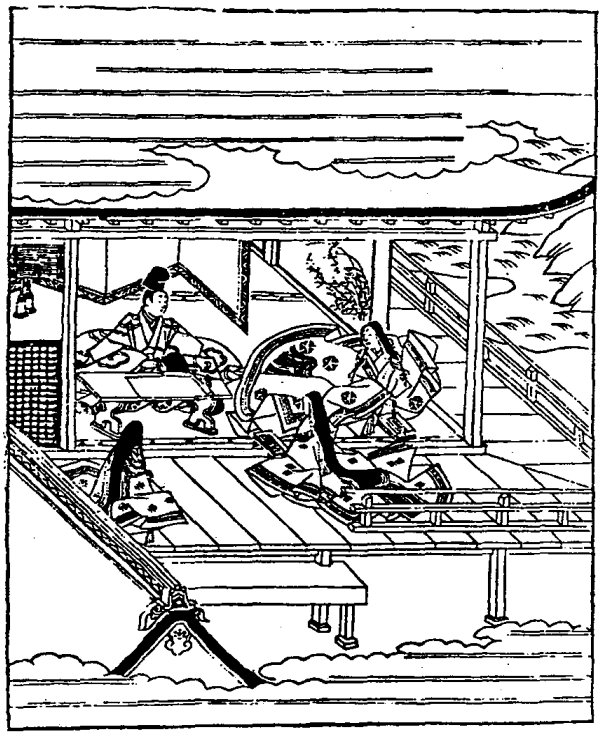


（挿図３－３）江戸版『おさな源氏』柏木の巻

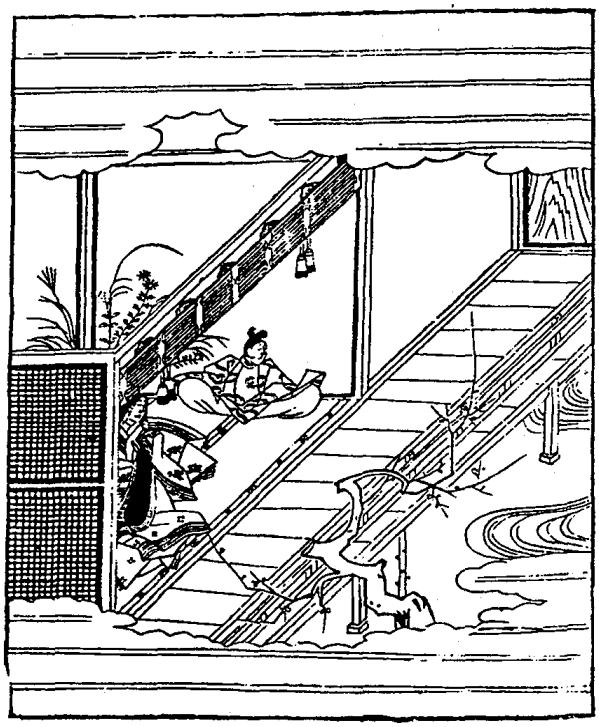
（挿図３－２）明暦版『小鏡』横笛の巻



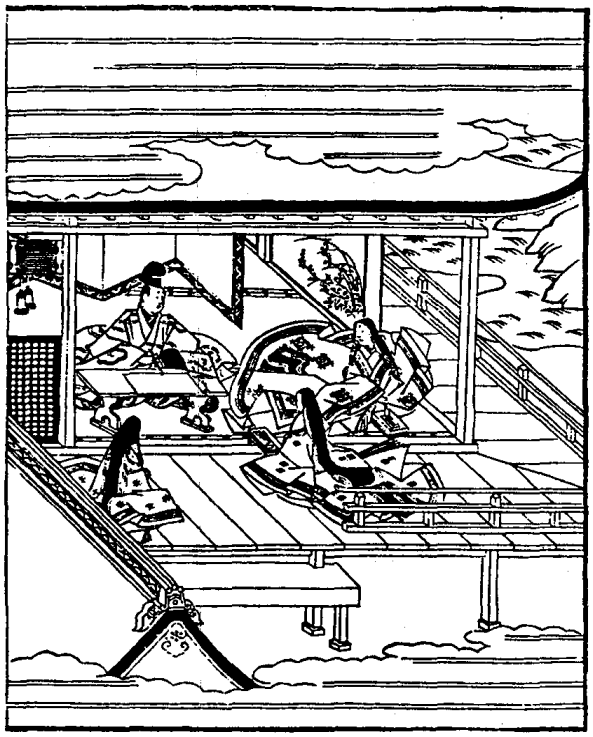
（挿図４－２）明暦版『小鏡』鈴虫の巻



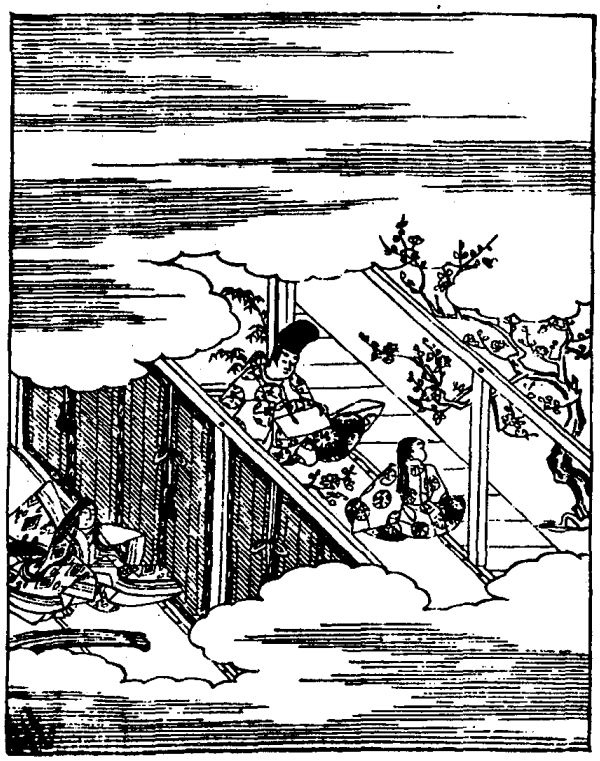
（挿図４－１）延宝版『小鏡』鈴虫の巻



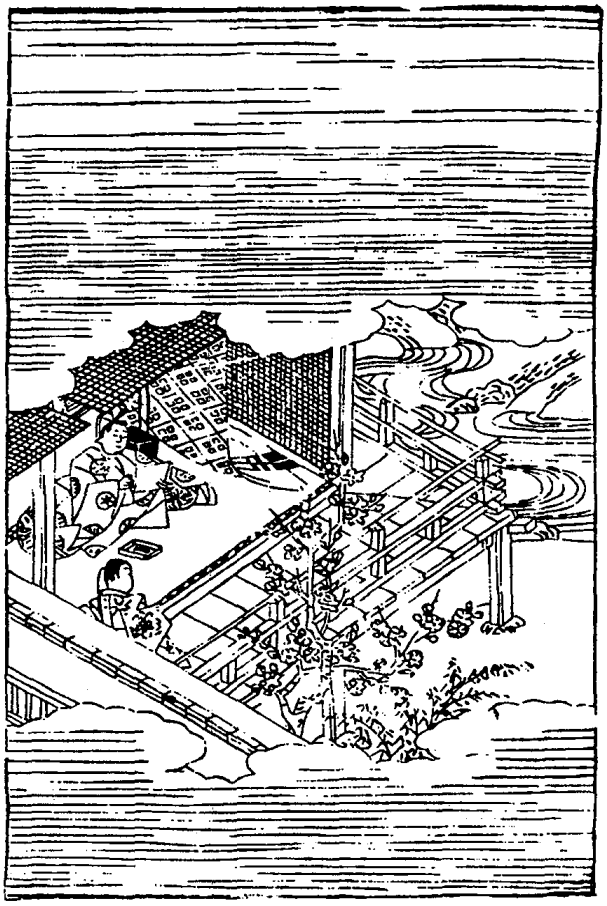
（挿図５－１）延宝版『小鏡』紅梅の巻



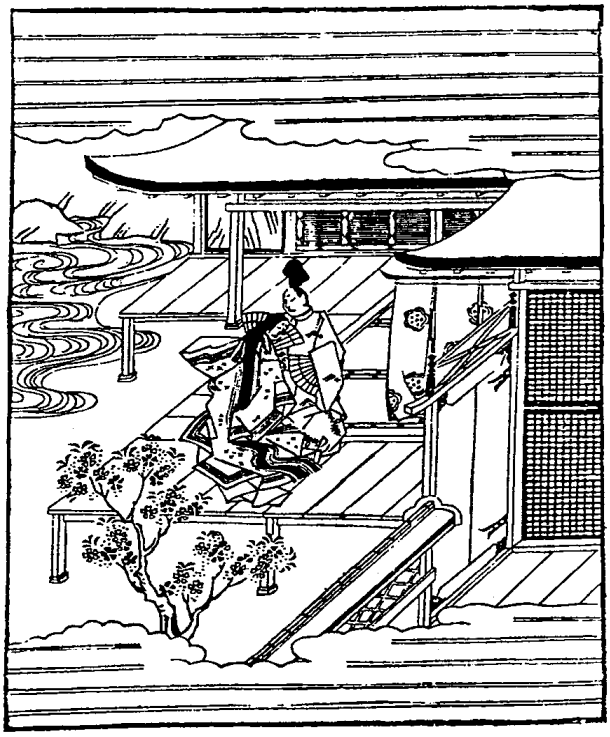
（挿図４－３）江戸版『おさな源氏』梅枝の巻



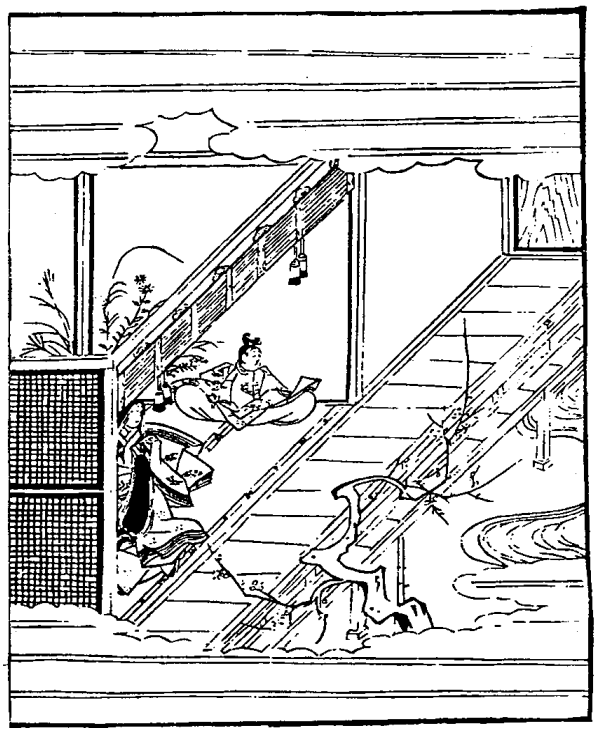
（挿図５－３）『絵入源氏』紅梅の巻



（挿図５－２）明暦版『小鏡』紅梅の巻



（挿図６－１）延宝版『小鏡』夢浮橋の巻

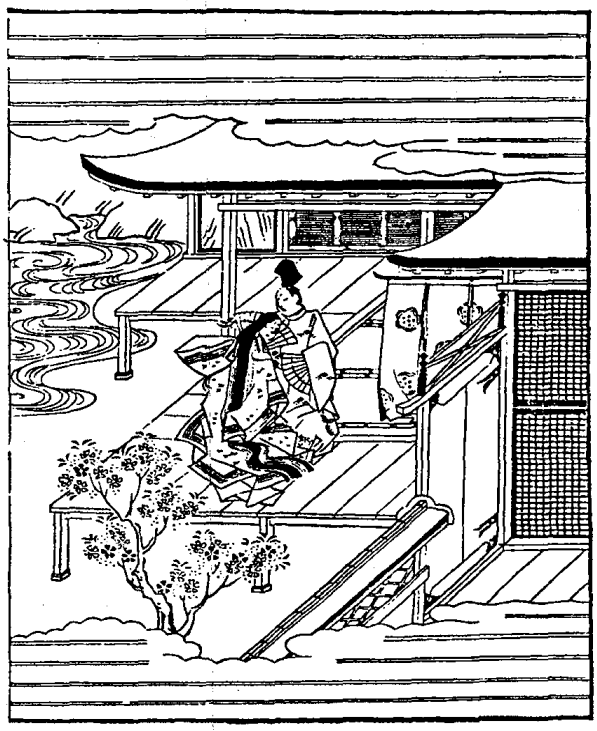


（挿図５－４）江戸版『おさな源氏』御法の巻

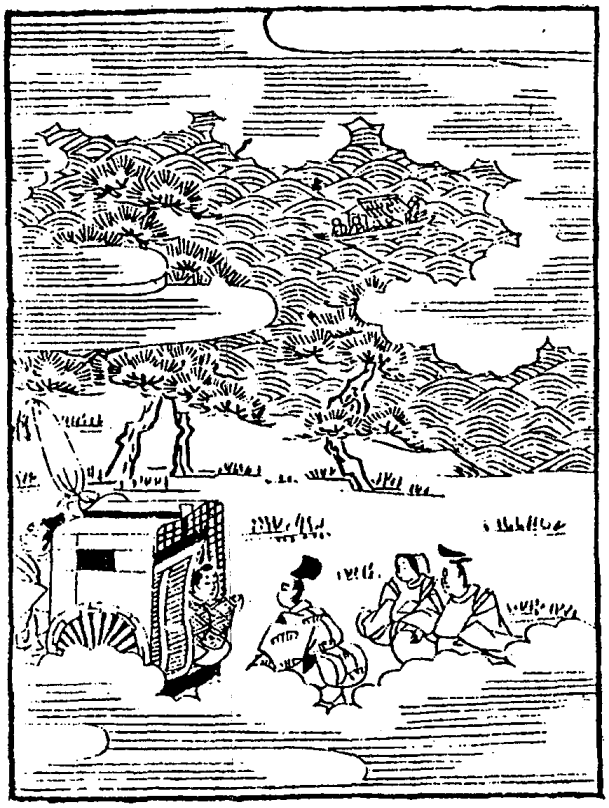
（挿図６－３）上方版『おさな源氏』夕霧の巻

（挿図６－２）『十帖源氏』花宴の巻

（挿図７－１）明暦版『小鏡』澪標の巻

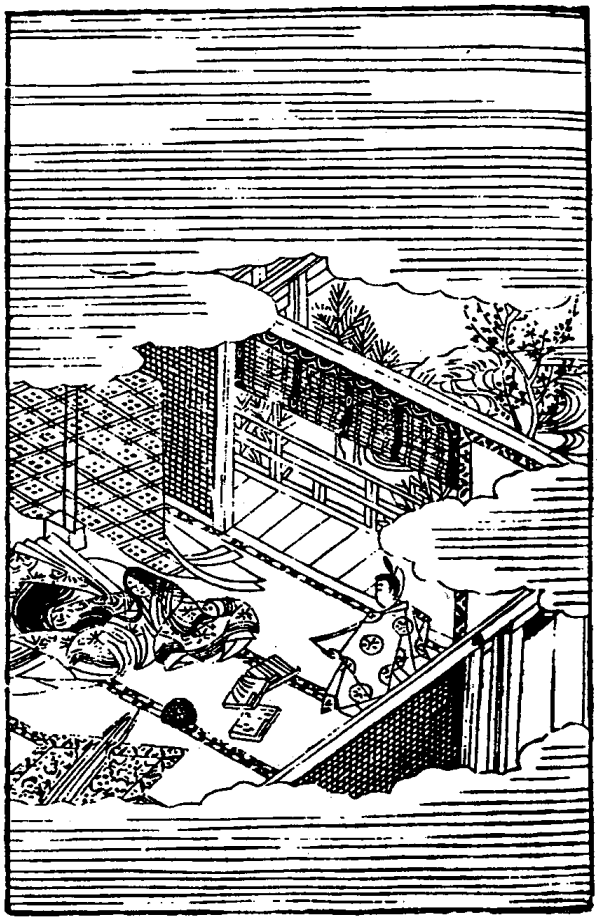


（挿図６－４）江戸版『おさな源氏』夕霧の巻



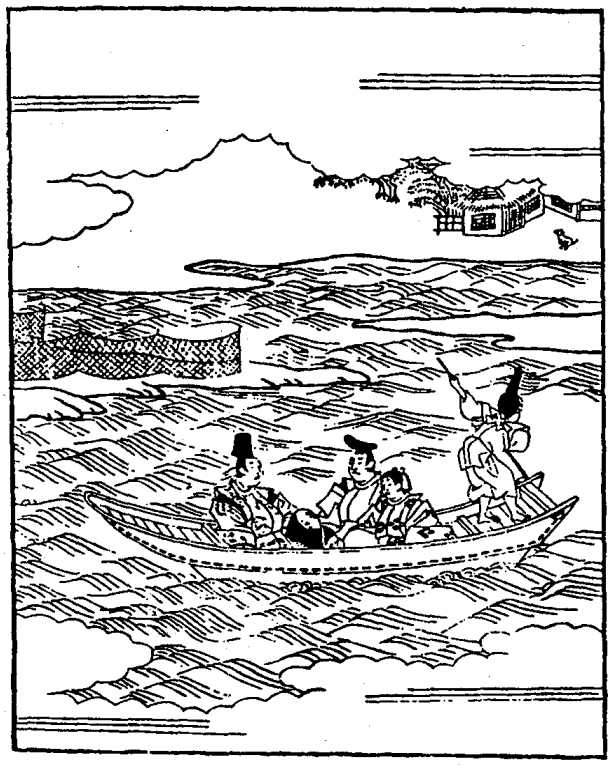
（挿図７－２）寛文版『小鏡』澪標の巻

（挿図８－２）寛文版『小鏡』初音の巻



（挿図８－１）明暦版『小鏡』初音の巻

（挿図９－２）寛文版『小鏡』若紫の巻



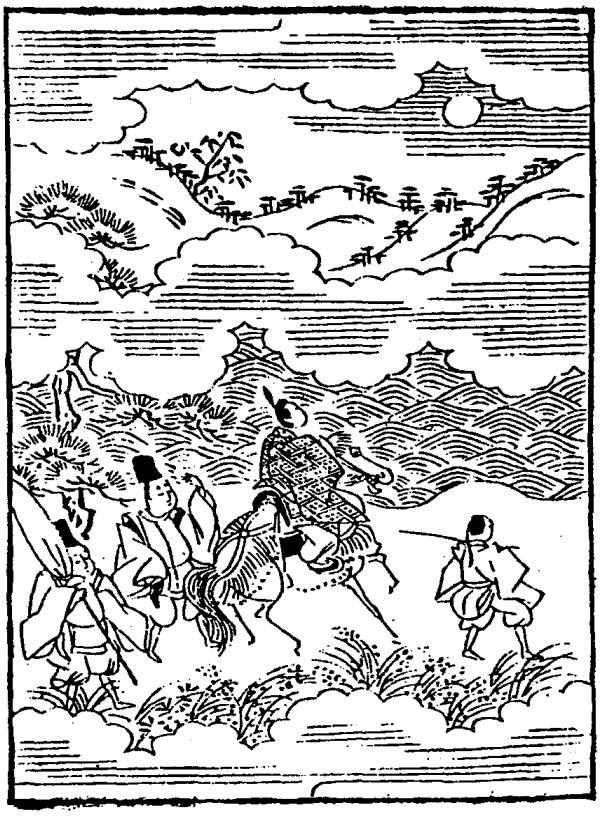
（挿図10）須原屋版『小鏡』明石の巻

（挿図９－１）明暦版『小鏡』若紫の巻

（挿図11－２）『十帖源氏』明石の巻

（挿図11－１）『絵入源氏』明石の巻

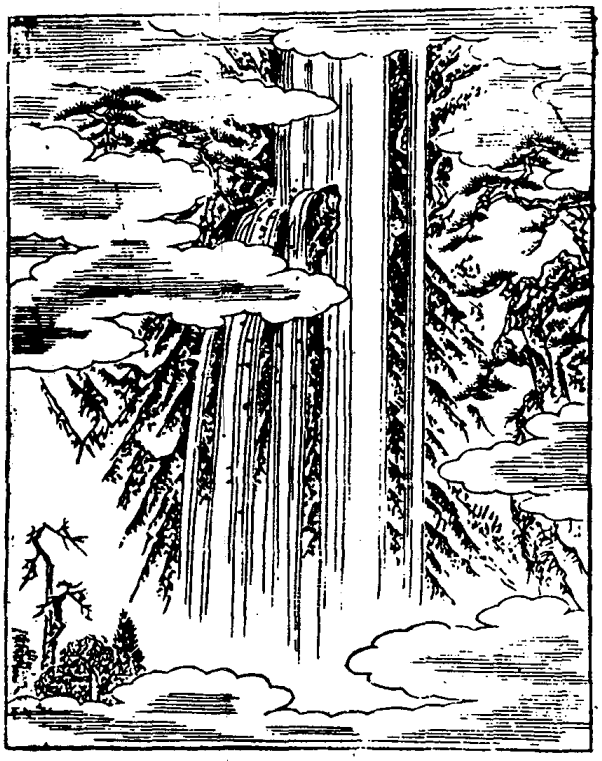
（挿図12－１）嵯峨本『伊勢物語』第八段



（挿図11－３）寛文版『小鏡』明石の巻

（挿図13－２）嵯峨本『伊勢物語』第八七段

（挿図12－２）嵯峨本『伊勢物語』第九段



（挿図13－１）版本『栄花物語』巻三九

（挿図14－２）『絵入源氏』宿木の巻

（挿図14－１）版本『栄花物語』巻四〇

［付記］末筆ながら、貴重書の閲覧・掲載を許可していただいた諸機関に、厚く御礼申し上げる。また本学所蔵本の翻刻は、岩坪ゼミの石井弘佐代・石川知花・清香織・好田喜美子氏にお願いした。なお本稿は、平成十三年度科学研究費（基盤研究C）、および平成十三年度神戸親和女子大学特別個人研究費助成による。

凡例

一、翻刻は原文のままを原則とし、誤字・脱字・濁点・当て字・仮名遣い等も底本の通りにしたが、読解や印刷の便宜を考慮して次の操作を行った。

(1)底本の旧漢字・異体字・略体は、通常の字体に改めた。

(2)句読点を付け、会話・心内語・手紙文・寄合の言葉などは「　」で括った。また適宜、段落に分けた。

(3)明らかに誤写と思われる箇所には、右側行間に（ママ）と記すか、あるいは推定した文字を（　カ）の中に入れた。私に付けた振り漢字も（　）内に記した。

(4)底本にある読み仮名は［　］内に、また傍注や割注は＜　＞内に入れた。たとえば「桐壷（きりつほ）」は「桐壷［きりつほ］」、「わかみや（ひかるけんし也）」は「わかみや＜ひかるけんし也＞」、「あつしくなやまし事」は「あつしく＜なやまし事＞」と翻刻した。

(5)和歌には、頭に通し番号を付けた。なお引歌は、番号を（　）で括った。

(6)底本には固有名詞・寄合・段落替えなどを示す合点記号が、それぞれ当該箇所の右肩に付いているが、翻刻では省略した。

源氏目録

一、桐つほ、せんさい共いふへし
二、はゝき木。并うつせみ。并夕かほ
三、若むらさき。并すゑつむ花
四、もみちの賀
五、花のえん
六、あふひ
七、さかき
八、花ちるさと
九、すま
十、あかし
十一、みをつくし。并せき屋。并よもきふ
十二、ゑあはせ
十三、松かせ
十四、うす雲

一、桐壺［きりつほ］

桐［きり］つほといふ巻［まき］の事、大内［おほうち］のうちに有、御殿［ごてん］の名［な］なり。（淑景舎）しけい

しやと申は、桐［きり］つほの事なり。此桐［きり］つほに、光［ひかる］けんしの御母［はゝ］さふらはせ給ふ。扨こそ、きりつほのかうゐと申けれ。此かうゐ、一の人なんとの御むすめにてはなし。父［ちゝ］は大納言［なこん］にて失［うせ］にし人の子［こ］なり。御かたち名［な］たかき聞えありて、御宮［みや］つかへに内［うち］へ参り給ひしそかし。御門［みかと］ことの外［ほか］にときめかせ給へは、かたへの女御、かうゐ、みやすところ、そねみ給ふ。さる程［ほと］に、此かうゐの御腹［はら］に、わかみや＜ひかるけんし也＞、ひとゝころ、いてきさせ給ふ。おなし程［ほと］それより下［げ］らうのかうゐたちまて、やすからす、あさ夕［ゆふ］みやつかへに付［つけ］ても、人の心をのみうこかし恨［うらみ］をおふつもりにや有けん。

此宮［みや］、三［みつ］になり給ふ夏［なつ］のころ、御母［はゝ］かうゐ、かくれ給ふ。やまひかきりなれは、大内［おほうち］のうちにて、人のかくれ給ふ事、なきなれは、御いとま申て、さとへ出させ給ふ。せめての御心さしのせつなれは、てくるまのせんし（宣旨）を給はりて、出給ふ。此車［くるま］いみしきくはし（華飾）よくの事なれは、おほろけの人にはゆるされさりしを、あまりなる御心さしなり。その折のことは（言葉）、

あつしく＜なやまし事＞。いきもたえつゝ＜苦［くる］しき事＞。おたきのさほう＜これはおたきにて、かうゐのたひ（茶毘）なり＞。かきりのつかひ＜三位［さんみ］のかうゐ（更衣）のちよく（勅使）し、御心さしなり＞。

さて、大内を出給ひしおり、御門［みかと］、御なこりおしませ給ひて、さま〳〵のこと、のたまへとも、たえ〳〵にして、物も申やらさりしか、歌［うた］に、

1かきりとてわかるゝみちのかなしきにいかまほしきはいのちなりけり

是［これ］は、かうゐのかきりの歌［うた］そかし。御心のまゝならは、ささきのくらゐにもなさましとおほしめしたりしかと、かたへのそねみとも、又よのそしりをおほして、うせてのちさう（葬）の所［ところ］へちよく（勅使）しをたてゝ、三位［さんみ］のくらゐを、をくらせ給ふ。「かきりの御つかひ」、これなり。

かくて秋［あき］にもなりぬ。かのうせにしかうゐの母［はゝ］も、おなしく内［うち］にさふらはせ給しか、若宮［わかみや］御いみのほとなれは、つれたてまつりて、さとにすみ給ふ。風のわきたちて物あはれなる夕くれに、内［うち］より、かの御さとへゆけいのみ（靭負命婦）やうふといふ女房［ねうはう］を、御つかひにつかはせ給ふ。なき人のあとなれは、「ふるさと」にもつくへし。そのほとのことはに、

やへむくら。虫［むし］のねしけき。すゝむし。雲［くも］の上人〈大内に宮つかへ人〉。みやきのゝ小萩［こはき］。浅［あさ］ちふのやと。露［つゆ］をきそふる。

これらは、かうゐのさとにての事なれは、「なき人のやと」なといふ事あらは、つけさせ給ふへし。御門［みかと］よりの御ふみに、かうゐの母のもとへ若宮の御ことをよみ給ひ候御歌［うた］、

2みやきのゝ露ふきむすふ風のをとにこはきかもとをおもひこそやれ

と、よみ給ひしなり。扨［さて］、この御つかひ帰［かへ］りけるに、をくり物に、かうゐの残［のこ］しをかれたるてうとみく（調度めくカ）物を取［とり］いたし、つかひたりしなり。かうゐの母［はゝ］、

3あらき風ふせきしかけのかれしよりこはきかうへそしつ心なき

「をくり物」といふ事もあらは、「なき人」なとつくへし。かのかうゐの、人にそねまれてうせし人なれは、そのこゝろねも有へし。

源氏［けんし］、七の御としより、御文はしめあり。かくもんし給ふに、こと（琴）、ふゑ（笛）のねにも、雲井［くもゐ］をひゝかす。なに事にも人には、ことなり。そのころかうらい（高麗）より、はかせわたりたるに、此宮［みや］をさう（相）せらる。かのはかせ、此宮の御かたちの光［ひかり］かゝやき、うつくしくおはしけるにめてゝ、ひかるきみとつけたてまつりしより、此けんしを光源氏［ひかるけんし］といふなり。そのほとのことは、

文つくる人〈たうしん（唐人）、ふみつくる〉。四つか（塚）。七年［のとし］〈けんし、その年、七〉。

かのはかせ、あひしところ、こうろく(鴻臚館)はんなり。いまの四つかなり。

けんし、うゐ(初冠)かうふりといふこと。

初［はつ］もとゆひ。こきむらさき。盃［さかつき］のついて＜あふひのうへより、おりを出さるゝ事＞。あけまさり＜けんしのしやう(姓)を給はる＞。さの(座)末［すゑ］＜たゝ人になり給へは、宮たち、しん(臣)なとの御さのしたに、けんし付給ふ＞。

けんしのきみ十二にてけんふく(元服)、其［その］日、みなもとの氏［うち］を給はりて、たゝ人となり給ひ、いはゆるひかる(光源氏)けんし是［これ］なり。かのけんふくの日、ひきいれの大臣［たいしん］のむすめに、みかと、はからひにて、あはせたてまつり、やかてその夜［よ］、かの大臣［しん］のもとへおはします。これを、あふひの上［うへ］と。(ママ)

「はつ(初元結)もとゆいのこきむらさき(濃紫)」といふ事は、宮［みや］なとの御けんふくのおり、こむらさきといふ糸［いと］のひらく(平組)みにて、もとゆいをとる事、それによせたる事なり。又あふひの上の父［ちゝ］の大臣、ひきいれに参り給ふ。ふけ(武家)なんとにゐほし(烏帽子親)おやなといふ事、侍る。その心にやとおほえたる。これらは、「かうふり」「はつもとゆい」なといふ事につくへし。

又、此巻［まき］に、かゝやく日の宮と申人は、藤［ふち］つほのきさきの事なり。けんしのまゝ母［はゝ］なり。この后［きさき］は、けんしの御はゝかうゐ、かくれてのち、御門［みかと］おほしめしなけかせ給ひて、御心なくさます。年月［としつき］ふれとも、わすれかたくおほしめし、あしたにおきさせ給ひても、あくるをしらすとおほしめし、くるれはむなしき御床［ゆか］も、さひしく思［おほし］めして、かたへの女房［ねうはう］たちの御つほねもすさましく、御とのゐもなし。雲［くも］の上もなみたにくれてなと、なけかせ給ふ程に、みかとの御ために、めい(姪)にておはします四の宮［みや］、御かたちすくれて聞え名［な］たかくおはします姫宮［ひめみ

や］をかしつき、御母［はゝ］きさきなとのいみしく聞えさせたまふを、ない(内侍)しのすけとの(殿)といひし女房、きこえ出し参らせ給ふ。やう〳〵に御心もなくさませ給ひて、御心むかしのかうゐになすらへ給ふ。けんしをひかる君と申せは、此姫宮［ひめみや］かゝやくやうにおはしませは、かゝやく日の宮［みや］と、よの人申けり。御つほねは、藤［ふち］つほなり。

この宮を、けんし、おさなくよりおほけなく御心にしめたてまつりて、つゐにしのひ〳〵に参り給ひて、御子［こ］一人、出き給ふ。れいせい(冷泉院)ゐんと申せしは、此御事なり。又、桐［きり］つほの御門と、けんしの父［ちゝ］御門を申事、此巻より見え給ふ。主上［しゆしやう］にてましませは、桐［きり］つほの御門［みかと］と申なり。たとへたてまつるみかとは、ゑん(延喜)きの御事と見えたり。よく〳〵心ゑへし。

二、箒木［はゝきき］

此巻［このまき］に、あま夜の物かたりといふ事は、けんしの君［きみ］、御物いみにて御かたたかへに、大内のとのゐところにおはします。御つれ〳〵のなくさめにや、其ころとう(頭)の中将と聞えしは、源氏［けんし］の御こ(小)しうと(舅)、あふひの上の御あになり。かの君とむまのかみ、とう式部［しきふ］といひし天上［てんしやう］人参りて、くまなきすき物ともなれは、物かたり申つゐてに、人のしなをわかち、よしあしをさためき。これを、「あまよのしなさため」といふ。その時のことは、

二のまち（二重めカ）＜つし(厨子)のこちうめなり＞。文はかせのむすめ＜とうしきふ物かたり＞。ひるま、すくせ。なてしこ＜とうの中将の物かたり＞。

これらは物かたりと、こゝろえへし。みな〳〵物かたりに付へし。

てをおりて。きくのやと＜むまのかみ物かたり＞。

此巻［まき］に、とうの中将［ちうしやう］の物かたりに、玉かつらの内侍［ないし］のかみの事を、「なてしこ」とかたり出したり。母［はゝ］は、夕かほの上そかし。物かたりに「なてしこ」といふ事あらは（すイ）、玉かつらと心得へし。扨、このかたたかへは、四月也。節分［せつふん］ならては、かたゝかへはせぬ事とは、おもふへからす。むかしの上らうは（臈）四季［き］に、かたゝかへといふ事、有しなり。

扨、御ものいみあきしかは、さとへ出させ給はんとするに、ふたかる方［はう］にてわろし。御いゑ人（御家人）のいよの（伊予）介［すけ］といひしかもとへおはして、かたゝかへあり。かの家［いゑ］のあるし、よろこひかしこまる。此かたゝかへには（ママ）へ付へし。

やりみつ。しはかき。すゝしきかけ。

なと付へし。いよのすけか家のやり水［みつ］、せんすいなと（泉水）、おもしろかりしゆへに、心得おはして、かたゝかへありき。

扨、あるしのいよのすけは、君［きみ］のおはします御かたに、御とのゐしたるに、けんししのひて、女とものねたる所へおはして、立［たち］きゝしたまへは、ねたるところ、いとちかくて、わか御うへをそいひける。しつまる程に、しのひ入て、とかくの給ふに、をんな、おもひかけすおもひて、

4かすならぬふせやにおふるなのうさにあるにもあらすきゆるはゝきゝ

とよみしゆへにこそ、此巻を、はゝきゝとはいひけれ。此人はわかしなとも（品）、おもひあかりたる人にて、いよのすけなとかつまとなるへき人にはあらねとも（妻）、おやもなくて見あつかふ人もなけれは、おもひのほかに、かくてゐたるこゝろねをひけして（卑下）、よみしなり。

さて、とかくいひて、ほのかにあふ。そのまゝにて、しは〳〵立［たち］よりたまひしかとも、つゐに又もあひたてまつらす、いよ〳〵けんしは御心つくしにおもひ給ひけるとかや。すゑのよまても、わすれさせ給はて、いよ

のすけしゝてのち、あまになりたりしをむかへ給ひて、二条院［てうのゐん］のひかしのたいにすませられき。いよのすけか家は、なか（中川）かはわたりなり。今［いま］の京極［きやうこく］川なり。「かたゝかへ」につくへし。

此物かたりに「なてしこ」と「玉かつら」をかたり出す事、とうの中将［ちうしやう］の物かたりなり。むまのかみか物かたりには、わかかよふ女房［ねうはう］のもとへ、わか（我友）ともたちのやうなる人、かよひけるをもしらす、大内［うち］より出けるに、此うへ人、車［くるま］にのりてゆくといふを、いつくそとおもふに、我ゆく所なり。浅［あさ］ましとおもふに、このおとこ、笛［ふゑ］をふきてそゝのかせは、内よりわこん（和琴）をひく。このやとに、きくもみちなと（菊）、ありけるに、

5ことのねも月もえならぬやとなからつれなき人をひきやとめける

とよみたり。それより此女のもとへゆかす。されは、「すきたはめらんをんなに、心をゝかせ給へ」と、このきん（公達）たちに申たりしなり。

又、とうの中将［ちうしやう］の、「なてしこ」とかたり給ひし、母［はゝ］夕［ゆふ］かほのうへに、しのひ〳〵にかよひ給ひて、いとあさからさりしに、おさあき人さへ出きて、このよ一ともおもはさりしに、うるはしき北［きた］の方［かた］のかたより、をそろしきことをいふときて、かすかなる家［いえ］にかくれてゐたり。ある時、とうの君［きみ］おはしたるに、さかしく恨［うら］みなんともせす打なみたくみて、姫［ひめ］きみの御ことを、

6山かつのかきほあるともおり〳〵にあはれはかけよなてしこの露

とよみて、そのゝち程なく、ゆきかくれたりと、かたり出しても、なみたくみたり。此人そかし。夕かほの巻［まき］に、けんしにあひて、なにかしのゐんにて、しにき。なてしこは、玉かつらなり。十七の巻［まき］に見えたり。

又、とうしき(藤式部)ふか物かたりは、はかせのむすめのもとへかよひしに、ある時ゆきたれは、物こしにいひかはしてあはす。いかにとゝへは、「こくねつ(極熱)のさうやく(草薬)ふく(服)して、くさきによりてあはす」といへり。六月のからひる(辛蒜)といふ物にや、此か(香)、あさましくくさし。おにとこそ、むかひゐたらめとおもひて、かへりしなり。しきふか歌［うた］に、

7さゝかにのふるまひしるき夕くれにひるますくせといふかあやなさ

とよめり。女［をんな］の返しに、

8あふことのよをしへたてぬ中ならはひるまもなにかまはゆからまし

とよめり。そのまゝゆかす。まめ〳〵しき人は、かくはた、こは〳〵しくむつかしく、世中［よのなか］のおもふやうならぬところを、うちみたれてかたりしより、いとゝけんしは、くまなき御心いてきさせ給ふとかや。「ひるますくせ」とは、これなり。くはしくは、はゝきゝに有。かんよう(肝要)なり。

空蝉［うつせみ］　はゝき木のならひ

此巻［まき］をうつせみといふこと。はゝき木の巻［まき］のかたゝかへの時、いよのすけか女を御らんして、あかすわすれぬことにおほしめして、かの家のやりみつ、おもしろしとて、にはかに又、かれかもとへおはします。あるしは、やり水［みつ］のめいほく(面目)とよろこふ。されとも、その夜も女［をんな］は、あひたてまつらす、むなしくかへり給ふ。猶、御心にかゝりて、いかにしていひよらましとおほしめして、かの女のおとゝ(弟)、いまた十二三はかりのわらはにて、あねのもとにありしをめし出して、やかて天上［てんしやう］させて我［わか］御いゑ人(御家人)になして、いとをしみふかくし給ふ。人、その御心をしらす。此わらはに、くはしくいひしらせ給ひて、このこきみ(小君)を御つかひにて、御ふみあり。

そのゝち、いよのすけ、ゐなかへ下［くた］りて、人すくなくなるおり、このこきみをつれさせ給て、一車［くるま］にめして、かのなか（中川）ゝはへわたりたまふ。みな人は、此おさなき人はかりきたるとおもひたれは、けんしは御車［くるま］の内にかくれて、人しつまりて、かのこきみをしるへにて、のそき給ふ。かしこには、まゝむすめのにしの御かたといふそ、こうちてゐたり（碁）。そのほとのことは、

碁。かひまみ。ゆふやみ。道［みち］たと〳〵しき程。一くるま。ともしひ〈火ほのかなるに、うつ〉。こきみ。十〈とを〉。廿〈はた〉。三十〈みそ〉。四十〈よそ〉。こう（劫）。

これは、このおりのことはにつくへし。にしのきみ碁［ご］うちはてゝ、かそへたる心なり。

さて、碁［ご］うちはて、もろともにふすを御覧［らん］して、しつまる程に、しのひいらせ給ふに、かの女はとけてねられねは、いととくきゝしりて、すへりかくれぬ。これは、おなしところにねつるむすめのかくるゝとおほしめしたれは、これをはのこしをきてかくれぬ。せみのもぬけのことく、きぬはかり残したり。心ならす、このむすめにあひ給ひて、おこかましかるへけれは、あまたゝひのかたゝかへなとも、これゆへそと、人のおもはんとおほして、かたらはせ給ひしかとも、もとより御心さしあらされは、又ともあひ給はす。その後［のち］、一よの情［なさけ］に、「軒［のき］はのおきとむすはすは」の御歌［うた］あり。

9ほのかにものきはのおきとむすはすは露のかことをなにゝかけまし

御返し、

10ほのめかす風につけてもしたおきのなかはは露にうへもれにけり（ママ）

御返事に「したおき」とよみたりし程に、この人をは、したおきとも軒［のき］はのおきともつくへし。心ならぬ事にも、たゝ一夜のことにも、つけへし。おなし事なるへし。扨、御心さしの人、ぬきをきたりしきぬを、とりてかへり給ふ。このことは、

とりて帰［かへ］るきぬ＜此巻の名なり＞。人にしむ。

扨、そのあしたの御ふみあり。

11うつせみの身をかへてけり木（ママ）のもとになを人からのなつかしきかな

さてこそ空蝉［うつせみ］とは名［な］つけけれ。これらは、みな夏［なつ］の事なり。「うつせみ」には、いかにも「人たかへ」「一夜のちきり」なと、ひきあはせてつくへし。

ゆふかほ　はゝきゝのならひ

此巻［まき］夕かほといふ事は、六条［てう］のみやすところと聞えしは、せん（先坊）はうとて、とうくう（東宮）にてかくれ給ひしみやすところ、六条［てう］あたりに、いとやん事なくておはしましき。これは、桐［きり］つほの御門［みかと］の御弟にておはしましき。とうくうにてかくれ給ひしかは、いとあへなくおほしめして、姫宮［ひめみや］のおはしますをも、うちのみこ（御子）のことくおほしめしけり。此みやす所へ、けんし忍［しの］ひつゝ参り給ふ。おほけなきことゝ、よの人もおもひたてまつる。

しは〳〵かよひ給ふ道［みち］、五条［てう］なる所に、ゆふかほのさきかゝりたる、こいゑあり。内に女房［ねうはう］とも、あまたよしありてすめる、すきかけ見えてけり。これそ、はゝきゝの巻［まき］に、とうの中将［ちうしやう］のかたりし、此姫君［ひめきみ］のはゝのかくれてゐたるところなり。あるゆふくれに、れいの六条あたりのしのひありきに、御車［くるま］をたてゝ、夕かほのはなの白［しろ］く咲［さき］てあるを、なにの花そと尋させ給ふに、内よりかの中将そと（ママ）、「是［これ］にをきて参らせよ」とて、はなを折て、白きあふきのいたくかうはしきをたてまつる。そのほとのことは、

白［しろ］きあふき＜「こかしたる」といふは、かうはしき事＞。そらめ＜中将と、みあやまりたるこゝろ＞。

たそかれ時。ひかき。小いゑ。きりかけたつ物〈夕かほに、てをとらせたるもの〉。やりとくち。うちまねく。すきかけ〈これらは、夕かほにつくへし〉。

扨、けんしの御歌［うた］、

12よりてこそそれかとも見めたそかれにほの〳〵見つる花のゆふかほ

いかにも「夕かほ」に「人たかへ」、わろくはあるまし。さてこそ、夕かほの巻［まき］とはいふ。女房［ねうはう］をは、ゆふかほのうへといふ。かくて、けんしのめ（ママ）のとのこれみつ（惟光）におほせつけて、よく〳〵案内［あんない］させて、とき〳〵おはしましぬる。これ、とうの中将［ちうしやう］のかたりし、なてしこの母［はゝ］にやと、あやしくおもひなから、あさからすかよひ給ふ程に、秋［あき］にもなりぬ。

八月十五日あかつきに、なにかしのゐんへ、いさなひ給ふ。其［その］夜は、かの小家にとゝまり給ふに、となりのいゑに、めさまして、きゝしらす、かたはらいたき物かたりなとする。そのほとのことは、

みたけさうし（御嶽精進）〈たうらいたうし（当来導師）〉。しひらたつ物〈女房のきるもの〉。からうすのをと〈となり〉。ぬかつく。これら、夕かほの小家に、つけさせ給ふへし。さても、みたけさうしに、みろくしそん（弥勒慈尊）とおかむを、きかせ給ひて、ちやうせい（長生）殿のはねをかはし、えゝ（えたカ）をならへしちきりもひきかへて、みろくの世［よ］をねかひて、五十六をく七千万歳［せんまんさい］とおほしめしけるにや。

13うはそくかをこなふみちをしるへにてこんよもふかきちきりたかふな

おきなか（息長）川なと、ちきらせ給ひしに、十六日のよなかに、しに給ひしそ、まことにあはれなる。

扨、十五日のあかつき、ひとつ車［くるま］にて、なにかしのゐんへ、いさなはせ給ふ。しのゝめのほのかなるに、「露［つゆ］のひかりやいかゝ」との給へは、

14ゆふ露にひもとく花は玉ほこのたよりに見えしえにこそ有けれ

御返し、

15ひかりありとみし夕かほのうは露はたそかれ時のそらめなりけり

なとゝいひかはして、十六日一日は、かのなにかしの院［ゐん］のあれたるに、おきふしかたらひてくらし給ふ。そのことは、

しのゝめ〳〵いさなひしあかつき〳〵。しりめ。つゆのひかり。おなしくるま。あれたるやと。水くさにむもるゝ池［いけ］。つるうち〳〵とのゐのすいしん（随身）、つるうち。なにかしのゐんのふせい（風情）〳〵。とりのからこゑ〳〵なへの（鵺カ）事かたかへ（ママ）になきて、をそろし〳〵。

たえいりぬれは、いひやるかたなし。けんし御太刀［たち］をぬきて持［もち］給ふ。物のあしをと、ひしひしとなりしなり。これらも心えて、つけさせ給ふへし。

扨いかにせんとて、これみつをめして、おほせあはせて、きよみつに、これみつかしる人の有かたへ、むなしきからをとりいたしてやる。なきからを、うはむしろに、をしつゝみて出せは、かみこほれ（髪）出て、めもあやなり。この車［くるま］に、かのつかへしうこん（右近）といひし女房［ねうはう］、のりそひてゆく。心のうち、おもひやるもかなし。されは、「きよみつ」なといふことも、人つけたりとも、難［なん］すへからす。

さて、けんし、あまりあへなく、あさましくおほして、これみつをめしくして、清水［きよみつ］までおはして、なきからを御覧［らん］して、いとゝおもひまさり給ひしか、うちかはし給ひしまゝ、とりいたしたれは、わかくれなゐの御そ（衣）のまゝ、きたりし面影［おもかけ］、いかならんよにか、わするへきと、しつみ入せ給ひて、かへらせ給ひて、やかて御心れいならす、さま〳〵におはしまして、よのえけ（穢気カ）にて、秋［あき］のすゑにそ、をこたり給ひし。まことに、ことはりなり。かの右近［うこん］をは、いみ（忌）のすくるまゝにめしよせて、つほねなとして、いとねんころに、はこくませ給ひて、つかはせ給ふ。「ふくらかに色［いろ］くろき女」といふ、これなり。後［の

ち］に玉［たま］かつらの君［きみ］に、はつせにてゆきあひて、六条のゐんへわたしたてまつりて、此御かたにさふらひしなり。けんしも、はか〳〵しき物におほして、めしつかひし人なり。

三、若紫［わかむらさき］

この巻わかむらさきといふ事、むらさきのうへのおさなかりしを、よみ給ひし歌［うた］、けんし、

16手につみていつしかもみんむらさきのねにかよひける野［の］へのわかくさ

とよみ給ひしゆへなり。「わかむらさき」とは、「わか」はおさなき心なり。これはけんし、まゝはゝの藤［ふち］つほの宮［みや］を、おさなくより心にかけて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御覧［らん］するも、我此御心やなくさむと、おもふひしゆ（秘事カ）へなり。なすらひたにあらぬ世中も、うらめしくおほしめすに、此紫［むらさき］の上は、此藤つほには御めいにておはしませは、さうなくにさせ給ひしゆへに、物のゆかりをは、むらさきの草のゆかりなといふ事なれは、よそへてよみ給ひしゆへ、此巻［まき］をは、わかむらさきとかけり。ことさら此巻［まき］、おもしろく作［つく］りたりとてこそ、式部［しきふ］の君［きみ］は、むらさきしきふとは付させ給へり。

さても、この君［きみ］を御覧［らん］し初［そめ］て、なかき世のともとなる。この人ゆへ雲［くも］かくれ給ひしことは、けんし十七の御とし、わらはやみ〈おこりの事〉をして、北［きた］山にたうときひしり（聖）有とて、めしけれとも、京［きやう］へは出ぬ事にて参らす。さらはとて北［きた］山へおはします。かのひしり、かちし（加持）たてまつりたれは、おこらせ給はす。なを、のこりおそろしとて、其［その］日とまり給ひて、御かちに参り給ふ。つれ〳〵なれは立出［たちいて］て、爰［こゝ］かしこをのそき御覧すれは、女房［ねうはう］のすめるところ有。なに事にかとおほして、のそかせ給へは、かのひめ君［きみ］のうはは（祖母）、此おこりおとしたるひしりの御てし、

そう(僧都)つのあねなり。このうは君［きみ］、心なやみ給ふ程に、祈［いの］りなとせんとて、この山におはしましけるに、姫［ひめ］きみをも、つれておはしましたるを、のそきて御覧しはしめさせ給ふ。そのことは、

こしはかき。夕くれのかすみ。わらはやみ＜おこり＞。心のやみ＜しるへの山ともいふ＞。かいまみ。うしろの山。すゝめのこ。いぬき＜人のな＞。山のはな、またさかり。まつのとほそ。わかくさ＜むらさきのうへの事＞。たひねのそて。たきのをと。みやまおろし。たつの一こゑ。藤さくらにつくるつほ(壷)。くさむしろ。やりみつ。たにのそこまて、ほりもとむる＜御もてなしのさかなな＞。やまのとり、おとろく＜けんし北山にてきん(琴)をひき給ひし。とりもおとろくとなり＞。はなちかき＜おさなき人のてすさひ＞。

是は、北山にての事はかりなり。

此むらさきのうへは、せん(先帝)てひの御この兵部卿［ひやうふきやう］のみやの御むすめ、藤［ふち］つほのきさきには御めいなり。此北方［きたのかた］は、北山［きたやま］におはします、むらさきのうへのうはの御むすめなり。おさなきより御はゝにはをくれて、かのうはきみにそ、そたてられておはしましけるなり。扨［さて］、この姫［ひめ］きみのうつくしき御かたちをのそきて、いかにしてか、これを取［とり］たてまつりて、わか御まゝにかしつきたてゝ、かの御かたみにも見たてまつらんとおほしめして、かのそう(僧都)つにとひたてまつり給ふ。うは君［きみ］とも、いひよりなとして、つゐに、その年の九月の頃［ころ］、うは君にをくれて、京［きやう］の殿［との］にかすかなるすまゐにておはしますを、とりたてまつらせ給ひて、二条［てう］のゐんのにしのたいにわたしたてまつり、もてなしかしつき給ふ。姫［ひめ］きみ、十の御としなり。かのわらはやみして、北山へおはしませしころは、三月廿(サイ)日なり。さてこそ、京［きやう］の花はさかりすきて、山のさくらはまたさかり、とはいひたれ。

又、北［きた］山に、「すゝめ(雀)」といふこと、つく(付)ること。これは、むらさきのうへ、すゝめの子［こ］をかひ給ひしを、いぬきといひしわらは、にかしたりしを、むらさきの上、いたくおしみて、なき給ひし御すかたの、い

とうつくしかりしを、源氏［けんじ］の君［きみ］御覧しそめてけり。「からす」といふ事もありと人いふとも、あらかふへからす。「かのにけつるすゝめの子［こ］を、からすなとや取［とり］つらん」と、少納言のめのと、いひしなり。「たつ（鶴）の一こゑ」といふは、又、紫上、源氏いらせ給ふを、「うは君、見給へ」との給ふ声を、源氏聞給ふて、かく云也。

此巻［まき］に、「くさのむしろ」「やり水」「いもゐ（斎）」なとゝいふ事。是［これ］は、そうつのはう（坊）へ、源氏をよひたてまつりたまふ時、「くさのみむしろ（御筵）も、こなたにこそ、まうけ侍らめ」と申されたるなり。「いもゐ」とは、御しやうしん（精進）の事なり。これならす、いもゐとは、しやうしんの事なり。

又、きたやまに「物かたり」といふ事ありといふとも、あらかふへからす。御心まきらはしに、人〳〵立出て、ところ〳〵御覧［らん］するにも、いとおもしろけれは、御ともの人々、ふしの山、なにかしのたけ（嶽）、すまあかしの物かたりを、めいしよ（名所）なれは申いたしたり。其時［そのとき］、あかしの上の御ことをも、きゝそめ給ひしそかし。

又、むらさきの上、二条［てう］のゐんへ、むかへたまひしあした、日いろ（火色）のきぬを、きたまへりといふ事のあり。これは、九月に御うは君［きみ］にをくれて、十月にけんしのとりたてまつり給へは、いまた御うはの御ふく（服）の中なれとも、わさと其［その］あしたはかり、日いろのきぬを、きせたてまつりたるかとおほゆ。これをは、ひ（秘）しなりといふなり。かくて御心さし、なからふかたなくて、けんし五十三、むらさきのうへ四十五にて、かくれ給ふ。源氏、雲［くも］かくれ給ひしも、このなけきゆへなり。雲かくれとは御とんせい（遁世）の事なり。廿五の巻［まき］に見えたり。

末摘花［すゑつむはな］　わかむらさきのならひ

此巻すゑつむ花といふ事。ひたちの君［きみ］と申ふるき宮［みや］おはしましき。うせ給ひし御あとに、姫君［ひめきみ］一人のこりておはしき。いとかすかなる御すまゐにて、なかめすこし給ひけり。けんし聞つたへさせ給ふて、ゆかしくおほしめして、尋［たつね］たてまつり給ひけるに、けんしの御めのと少将のみやうふ（命婦）とて、内［うち］にさふらひけるか、此宮にしたしく参りかよふ人なれは、みちしるへして見せたてまつり給へり。いとおもひのほかに、おかしけにおはしけり。この御かたち、色［いろ］しろく、はなたか（ママ）く、さきあかく、ざうのことくにおはしけり。見そめたてまつり、けんし、くやしくおほしけれとも、此御すかたをは、我ならては、たれか見たてまつらんと、あはれにおほさるゝ。人の御ほと、いひすてかたく、いたはしくおほして、後［のち］には、かた〳〵のかすにいれて、二条［てう］のゐん、ひかしのたいにすませ聞え給ふ。けんし、

17なつかしき色ともなしになにゝこのすゑつむはなをそてにふれけん

とよみ給ひしなり。くれなゐは、花のすゑ、あかき物なり。すゑをつみて、とるなり。此ゆへに、すゑつむといふ。此きみ、さむきおりには、御かほに、あかきこのみをつけたることし。ことにふれて、おかしきかはきぬ（皮衣）、きたる人、是［これ］なり。

此君［きみ］を、心にくゝおもひて、あふひの上のあにのとうの中将［ちうしやう］も心かけて、源氏のおはしますを見あらはさんとて、あとにつきてゆきて、つゐに見あらはして、そのかたに源氏［けんし］の御そてをひかへて、とうの中将、

18もろともに大内山はいてつれといるかた見せぬいさよひの月

二月十六日の事なり。此姫君、きんのことをひき給ひしなり。「あれたるやとのちきり」「わひ人」「春［はる］のいさよひ」「もろともに出し大内山［おほうちやま］」は、つくへし。「かはきぬ」、「すゑつむ花」につくへし。とうの中将［ちうしやう］には、まことなし。「すゑつむ」には見をとりして、くやしきやうをつくへし。

四、紅葉賀［もみちのか］

此巻［まき］、もみちのかといふこと。桐［きり］つほの御門［みかと］、そのころのゐむ(院)の御かを(賀)つとめ給ふに、ころは十月なれは、紅葉［もみち］をもてなしにて御かあり。さて、もみちのかといふ。もみちのしたにて、れい(伶人)しんあり。てんしやう人、宮たちも、そのきりやう(器量)たるは、まひ給ふ。そのすかた、けんしのせいかい(青海波)はをまひ給ふに、しくはなし。うつくしき事、たとへんかたなし。かたてには、御こしう(小鼓)と、とうの中将まひ給ふ。けんしには、けおとされて、はなのかたはらの深山木［みやまき］とそ見えし〈此ことは、めいく也〉。かさしのもみち、いたくちりすきて、御かほのにほひに、けをさるれは、左大将［さたいしやう］たちて、御まへのきく折［おり］て、かさしかへ給ふ。ゆふはへのすかた、かゝやきて、そゝろさむきほとなり。そのことは、

さしかゆるきく。ゆふはへ。あしふみ。かほのにほひ。木［こ］たかきもみち。

楽［かく］は、せいかいはなり。あをうみのなみと、かけり。

「立［たち］ゐにつけて」といふ歌［うた］あらは、これらを引［ひき］あはせ、つけ給ふへし。その夜、藤つほの宮［みや］へ、けんしより、我［わか］まひのすかたをも御覧［らん］しつらんとおほして、しのひて御ふみあり。

19物おもふにたちまふへくもあらぬ身の袖［そて］うちふりしこゝろしりきや

とよみて、たてまつり給ふ。御返事に、

20から人の袖ふることはとをけれとたちゐにつけてあはれとはみき

とありしなり。「から人の袖ふること」は、たう(唐)、やうきひ(楊貴妃)のけいしやう(霓裳羽衣)うゐのまひを、よそへけるにや。

扨、此巻［まき］に、藤［ふち］つほの御はらに御子［こ］うまれ給ふ。これは、まことは、けんしの御子［こ］

にておはしけれ共、御門［みかと］これとはしろしめさす、たくひなき御おほえにて、五にてとうくう(東宮)に立［たち］給ふ。十一にて御位［くらゐ］に即［つか］せ給ふ。御治世［ぢせい］十八年なり。これそ冷泉院［れいせんゐん］と聞ゆ。このことは、

なてしこ。つゆけさ、まさる。この世の中。むかし、むすへる契［ちき］り。

是［これ］は、此巻に候へはとて、「紅葉」なとには付へからす。此巻［まき］に有ことはなれは、しるす。

又、此巻に、けんし、うちの女房［ねうはう］けんない(源内侍)しのすけといひて、其ころ年、五十七八の人なり。けんしは十九になり給ふ。かの女房［ねうはう］に、たはふれ給ふ。其ことは、

おやのおや。あふき。ひはのね(琵琶)〈此ないし、ひわひく〉。雨［あめ］のなこり。あつまや、うたふ。うんめい(温明殿)てん〈是等は(ママ)〉。ひは。ゆふ立。

すこし、はれたるなこりに、内侍［ないし］ところのおはします御（殿）とのゝかたさまを、けんしたゝすみて、あつまやうたひて、うそふき給ふに、此けん内侍のすけ、ひは上手［しやうず］にて、かひしらへて居［ゐ］たりし所［ところ］へ、立［たち］より給ひて、物いひかはし給ふ。扨［さて］、うちのかた、御けつりくしはてゝ、これを御覧してわらはせ給ふ。内侍［ないし］のもとに、よる、おはしたる時、とうの中将［ちうしやう］きあひて、けんしの君［きみ］をそらおとしして、のちまてのわらひくさと、したりしなり。此巻にある事なれは、しるす。「紅葉［もみち］」には、付［つく］へからす。

五、花宴［はなのえん］

此巻［まき］はなのゑんといふ事は、かの紅葉［もみち］の賀［か］のつきのとしの春［はる］、大内［おほうち］に花見あり。南殿［なんてん］の桜［さくら］さかりに、花のもとにて御あそひあり。題［だい］を給はりて、

宮［みや］たち、公卿［くきやう］、殿上人［てんしやうひと］、ちけ（地下）にいたるまて、詩［し］を作［つく］り給ふ。中にも、けんしの御こし（小舅）うとのとうの中将［ちうしやう］は、「春［はる］のうくひす、さへつる」といふ題［だい］を給はりしなり。其後［そのゝち］、去年のもみちのか（賀）のまひを、おほしめし出させ給ひて、そのころとうく（東宮）うは朱雀院［しゆしやくゐん］なり。けんしには御あに、せちにせめさせ給へは、けんしもたちて、まひ給ふ。とうの中将たちて、りうくわゑん（柳花苑）をまひしか、おもしろさに御そ（衣）、かつけ給ふ。是［これ］、後代［こうたい］のれいとなりぬへしと、いひあへり。されは、「後［のち］のよのためし」なとゝいふ事あるへし。花にもまひ（舞）は、くるしかるまし。

さてその夜、けんし、さりぬへき隙［ひま］もやと、れいの藤［ふち］つほのあたりを、しのひうかゝひ、たゝすみありき給ふ程に、こうき（弘徽）殿の三のくちに立［たち］給ふ。内より、わかき女房［ねうはう］のこゑの、なへてのこゑにはあらて、「おほろ月夜に、しくものそなき」となかめし程に、けんし、いとおもしろくおほして、いひよりて、此人ゆへそかし、すまのわかれのうかりしは。此女房［ねうはう］は、とうくうの御母［はゝ］こうきてんの女御［ねうこ］の御いもうと、六の君［きみ］とて、とうくうに参り給はんとて、もてなされしか、此花のゑんの舞［まひ］、御覧［らん］の為［ため］に、内へ参り給ひて、とゝまり給ひたるへし。あかつき、御さとよりの御むかひの人々にて、心得給ひし。その程のこと葉。

三のくち。あふき〈かたみの事〉。くさのはら。露のやとり（ゆかイ）。をさゝはら。おほろ月夜。

ないしのかみ、

21うき身よにやかてきえなはたつねてもくさのはらをはとはしとやおもふ

けんし、

22いつれそと露のやとりをわかむまにこさゝかはらに風もこそふけ

とよめり。これらは、こゝにてよみし歌の言［こと］葉。あふきをは、しるしにとて、とりかへしなり。内侍［ないし］のかみのあふきは、さくらの三えかさねに、かすめる空［そら］の月を水［みつ］にうつしたり。心えて、つくへし。「立［たち］よりし三のくち」「なを、あらし」なといふことは、よかるへし。此花のえんのまきには、かのあふきの事、名句［めいく］にてあるへし。頃は二月廿日。

さて、しのひ〳〵にあひしこと聞［きこ］えて、御門［みかと］かくれさせ給ひて、とうくうの御よになり給ふ。まゝはゝ、こうきてんのあしきさき（悪后）、心のまゝに御世［みよ］をとりをこなひて、もとより、にくしとのことなれは、九の巻［まき］に、けんしをすまへなかす。扨［さて］こそ六の君［きみ］も、つゐに女御［ねうこ］とたにいはれす、ないしのかみにておはしましけれ。

六、葵［あふひ］

此巻［まき］、あふひといふ事。一の巻［まき］に、けんし十二まて元服（にてカ）［けんふく］のその夜より、やかて、ひき入の大臣［しん］のむこになりておはします。北［きた］のかたをは、あふひの上といふ。此巻［まき］に、源氏の御あに朱雀院［しゆしやくゐん］の一御はらの姫宮［ひめみや］、かものいつき（賀茂斎）に、そなはり給ふ。御もとに源氏は、その頃［ころ］、大将［たいしやう］にて、つかうまつり給ふ。そのきしき（儀式）、いみしき御ことにて、人々目［め］をおとろかす。此北［きた］のかた、その頃［ころ］、夕きりの大将［たいしやう］をはらみにてあり。たゝならぬ御心にて、わつらはしくおはしませは、御心なくさみにもとて、出て御覧［らん］するに、又、けんし、かよひ給ふ六条［てう］のみやす所も、しのひて出給ふに、御車［くるま］のたてところを、御とものの人々あらそひて、みやすところの御車［くるま］を、うちそんしなとせしなり。「車［くるま］あらそひ」といふ事、これなり。かものまつりの事なれは、あふひの巻［まき］といふ。此恨［うら］みふかくして、ものゝけとなりて、この

巻［まき］に八月に、あふひ上をとりころす。此みやす所へ、けんし、しのひまいり給ふこと、御門［みかと］、ゐんのうへも、しらせ給ひて、よにかくれなきに、枯枯［かれかれ］なる御心さしのおもはすさを、恨［うらみ］給ふ折［おり］ふし、かゝるはちかましき事さへあれは、おもひに沈［しつ］みて物の気となる。それよりけんし、いよ〳〵御心さし、かれ〳〵に成［なり］ゆく程に、人をも世［よ］をもうらみはてゝ、御むすめの姫宮［ひめみや］、いせの斎宮［さいくう］に下向［けかう］ありしにひきつれて、いせの斎宮にくたりたまふ。伊勢［いせ］のみやすところとも、いふへし。其ことは、

あらそひのくるま。ねたむ。はれぬ。かすならぬ。

なといふは、此みやす所の事なり。句［く］にしたかふて、つくへし。

又、かもの祭［まつり］に、「かみそき（髪削ぎ）」といふ事あり。是［これ］は、祭［まつり］の日、むらさきの上と、一車［くるま］にて御覧［らん］しに出給ふか、御くしの打たえ、なかく見えさせたまへは、こよみのはかせに、ときとはせ（しらイ）給ひて、むらさきの上の御くしを源氏そかせ給ふ。かものまつりに、「かみそき」といふことをは、これと心えへし。御くしそきはてゝ、千尋［ちひろ］といはひて、御歌［うた］けんし、よみ給ふ。

23はかりなき千尋［ちひろ］のそこのみるふさのおひゆくすゑはわれのみそ見ん

とよみ給ふ。此返事、むらさき、

24千ひろともいかてかしらんさためなくみちひるしほののとけからぬに

とよみ給ひしなり。これらのき（季。儀）四月、かもの祭［まつり］をはみあれ（御阿礼）ともいひし。かやうの御うたなとをひきあはせて、ことはにそへてつくへし。

さるほとに、かのあふひのうへ、月日かさなりて、御産［さん］ちかくなる。みやすところのふかき御うらみなれは、なにゝをろかならんや。御なやみ大事［じ］にて、かきりのさまなれは、さま〳〵のいのり、かち（加持）、おもひ

やるへし。そのおり、みやすところ、なのりいつる也。このあふひのうへの御かたにも、こまをたきけるに、けしの香［か］、みやす所の御そに、ふかくしみしこそ、おそろしかりけれ。

さて、とかくして、わかきみ〈ゆふきり也〉生［むま］れたまふ。このほとの御こゝろつくしに、いふかきりなく、よろこひのゝしり、みな人〳〵も、うちやすみ、すこしこゝろゆきて、わかきみの御もてなしに、日をゝくるほとに、御うふやに廿日はかりありて、御はゝあふひのうへ、つゐにかくれたまふ。おりふし秋［あき］のちもく なれは、けんしのきみも、ちゝのおとゝも、内［うち］へまいりたまふ。これそ、かきりなりける。まかり申に、けんしおはしまして、こま〳〵とうちかたらひ出たまふに、つねよりも御めとまりて、御らんしをくりけるとかや。あはれなりしことゝもなり。

すてに、たえ入たまふ。内へつけきこえぬれは、そのよの除目［ちもく］も、やふれぬ。あしをそらにて、かへりたまひぬれとも、かゝるひまを、はからひたるもののけなれは、かひあらんや。おとゝ、はゝ宮〈此宮けんしの御をは、きりつほのいもと〉、けんしのきみの御心のうち、おもひやるへし。八月十五日の事なるを、もしや生［いき］かへり給ふとて、さなから廿日まて、をきたてまつりけれとも、かはりゆく事のみあれは、そのかひなくして、つゐにとりへのへをくり給ふ。そのほとのことは、

ひとりね。かたみのこ〈ゆふきりの事〉。しのふくさ〈かたみの事〉。にはめる御そ〈けんし、ふくをぬき給ふ〉。

これは、わかれの義［き］にて候へは、秋［あき］のわかれの句［く］なとに付給ふへし。

四十九日すきて、わか御との二てうのゐんへかへり給ふ。御年十二より、いまた、いとけなかりし御程よりそかし。すみなれ給ひしに、北のかた、かくれ給へは、なにゆへに、かの大臣［しん］の御もとに、すみ給ふへきなれは、わか君をは、此とのにとゝめたてまつりて、わかとのへかへり給ふ。折［おり］ふしのあはれさ、いはんかた

そなき。十月の事なれは、時雨［しくれ］ふりあれて、いまさら御なみたをもよほす。おほい殿をはしめたてまつりて、日ころ宮［みや］つかへなれし女房［ねうはう］なと、心おさめやらす、袖をしほる。源氏［けんし］の君［きみ］も、たちさりかたく、御なこりかなしくおほしめしなから、なく〳〵かへり給ひて、むらさきの上の御かたへわたり給ふ。

しはしの程に、いみしくさかりに、ねひとゝのひて、うつくしく見すてかたし。此むらさきの上、十のとしより、もてそたて給ひしかとも、いまたおさなくおはします上、この姫君［ひめきみ］も、けんしのわか物とおほしたるとは、ゆめ〳〵おほしもよらて、すくるほとに、その御としは十五、ある夜、むらさきの上に新枕［にゐまくら］ありて、つきの夜、けんしの御心しりのこれ（惟光）みつをめして、の給ふ事あり。「こよひは、ゐのこのいはひなり。あすの夜、かやうのもちい、かす〳〵にありて（らイ）、したゝめて参らせよ」とおほせつゝ、これみつうけ給はりて、「ねのこは、いくつか、つかうまつるへく候らん」と、ゝひ申しかは、けんし、「三か一にてあらんかし」との給へは、心えて立［たち］ぬ。君［きみ］、ものなれのものやと、これみつを心まさりしておほしめしぬ。

是等［これら］は、けしからぬひじ（秘事）と申とも、しるす。此心は、にゐ枕［まくら］、いぬの日、つきのよ、ゐの日にて、三日のよか（夜）、ねの日にあたれり。大かた男女［なんによ］のあひそめて、三日の夜はふん（分々）〳〵にいはふなれは、御いはひ有へきに、あふひの上かくれ給ひて、帰［かへ］り給ひたる折ふしなれは、（ことごとしくカ）こと〳〵く人のおもふへきをはゝかりて、殊更［ことさら］はかりの義［き］にて、これみつに忍［しの］ひやかにの給へり。それを心えて、なにと、とひたてまつるへきならねは、「ねのこ」と、とひたてまつる。「三か一」とは、三はい（杯）を一せん（膳）にすへて、つかの（つるカ）くちには（箸）しをくはへさせて、いたす物なれは、けしきはかりに、「三か一にてあらんかし」との給へり。おもしろかりし御心のうちそかし。

扨つきの夜、したてゝもちてまいり、小納言（ママ）［せうなこん］のめのとゝ聞えしは、むらさきの上の御めのとなり。

それはおとなしくて、はつかしくやおほしめすへきとおもひて、むすめの弁の君［きみ］といふをよひて参らせたり。つきのあした、とりいたす折［おり］ふし、御めのとなとしりて、御心さしの色を、あはれにも、めてたくもこそおもひけれ。そのほとのことは、

三か一。みかのよのもちゐ。ねのこ。にゐまくら。

これらは、「ちきりそめし」なとゝいふ句［く］に、つくへし。むらさきの上、御とし十五のころ、十月、けんし廿二の御としなり。よく〳〵心えへし。

七、榊［さかき］

此巻さかきといふ事は、歌に六条［てう］の宮［みや］す所、

25神かきはしるしのすきもなきものをいかにまかへておれるさかきそ

心は、あふひの上の巻（ママ）［まき］に聞えたる六条［てう］の宮す所の御むすめの、さいくう（斎宮）にいせへ下［くた］り給ふに、まつ、きよまりして（ママ）、のゝ宮にすみ給ふ所［ところ］へ、さすかにわすれもはてす、うきなから、いせまて下［くた］り給ふなこりも、おしくおほして、ころは九月七日八日の夕月夜［ゆふつくよ］、はなやかにさし出て、よろつ物あはれにて、おほしめし出て、あしろ（網代）のくるまのしのひやかなるに、うちやつれたるさまして、かの野［の］の宮へ、けんし参り給ひて、御覧しけれは、ゐ中［なか］めきたるしはかき（柴垣）を大かきにして、くろ木のとりゐ、かみさひて、あさちか原［はら］もかれ〳〵に、吹［ふき］しほれたる松［まつ］風、身にしみて、むしのこゑも、まかひたるものゝをと、たえ〳〵聞えて、ひたきやはかりかすかにて、人すみたるけしきもせす。こゝに、ものおもはしき人のすみて、さそおもひのこす事なく、おはすらんと、よそまて思ひやりしより、あはれにて、この程のとたえを、われなから、うらめしくおほして、御まへの榊［さかき］を、いさゝかおらせ給ひて、みすのう

ちへ、さしいれて、物かたりなとし給ふおりの歌［うた］そかし。そのゆへに、さかきの巻といふ。

さて、さま〳〵の物かたり、あかつき近［ちか］くなりしかは、かへり給ふ。其言葉［ことは］、

秋の草かれ〳〵。むしのこゑ。ゆふつくよ。しはかき。くろ木の鳥居［とりゐ］。野［の］の宮［みや］。松［まつ］むし。あさちかはら。あかつきのわかれ。やそせのなみ。いせまて。すゝか川。八十瀬［やそせ］の波［なみ］。

是等［これら］は、「のゝ宮［みや］」「いせ」なとに付［つく］へし。いかにも旅［たひ］のそら、物うき事、あかぬわかれの心ねを、いせによそへて付［つく］へし。

扨、院［ゐん］の御なやみ、神無［かみな］月に成［なり］ては、いとをもく、此巻［まき］に御門［みかと］、十一月にかくれさせ給ふ。其頃［そのころ］より源氏［けんじ］は、事にふれて物うくおほしめして、常［つね］にわか殿〈御かた〉の内にても、むつましく成ゆきて、内侍のかみのことを、此巻にあらはれて、終［つゐ］にすまへ、なかされ給ふ。此事、此巻［まき］にあれはとて、「いせ」なとに付［つく］へからす。「桐［きり］」つほの御門［みかと］、いつれの巻［まき］に崩御［ほうぎよ］なりけるやらん」なと、人のたつねんに、しらさらんは、むけなれは、書［かき］しなり。

八、花散里［はなちるさと］

此巻［まき］、はなちるさとゝいふ事、

26たちはなのかをなつかしみほとゝきすはなちるさとをたつねてそとふ

といふ歌［うた］のゆへになり。けんし、中川［なかかは］のあたりへ、しのひておはしましゝに、道［みち］にて御覧［らん］ししりたるところありける。扨この歌［うた］をよみて、入給ひしなり。そのことは、

五月雨［さみたれ］の空［そら］に、かたらふこゑ。たちはな。やとのかきね。
これらはみな〳〵、さみたれのころなれは、「ほとゝきす」にも「たちはな」にもつくへし。

九、須磨［すま］

これはけんしの御あに朱雀院［しゆしやくゐん］、御くらゐの時、はなのえんにあひそめし、おほろ月よの内侍［ないし］のかみのこと、御門［みかと］の、さしも時めかせ給ふないしのかみを、けんしをかし（犯し）給ふと聞えて、うちの御はゝ、大に御腹［はら］たち給ひて、あしきさまにいひ、すまへなかし給ふにより、すまとはいふなり。頃［ころ］は三月廿余日なり。そのことは、

かたみのかゝみ。おもやせたる。はしらかくれの面影［おもかけ］。さらぬかゝみ。あかつきかけて出る月。

これらは、須磨［すま］へおもむき給ふ折なり。むらさきの上に御名残［なこり］おしみ給ひしおりのことはなり。まことにこのなこり、さこそおはしけめ。おさなくよりおほしたてゝ、父［ちゝ］はゝになりてもてなし、そこはくのなかに心さしならふかたなくおほしめして、近きころは、かりそめのよもと（ママ）のくれたにも、なかりしに、いつの月日をかきるへき御わかれならねは、せんかたなくおほしめし、しつみ給ふに、御鏡台［きやうたい］によりゐてひん（鬢）かき給ふとて、此ころのおもひにおもやせ給へは、われなから、なのめならす、うつくしくおほして、「このかけのやうにや、やせて侍る。あはれなるわさかな」とのたまへは、をんなきみ、なみたをひとめうけて、見をこせ給へる、いとしのひかたし。

27身はかくてさすらへぬとも君かあたりさらぬかゝみのかけははなれし

とよみ給ひし返事、むらさきの上、

28わかれてもかけたにとまる物ならはかゝみをみてもなくさめてまし

と、よみかはし給ひしことはなり。「かたみのかゝみ」「すまのわかれ」なとに付［つけ］させ給ふへし。

須磨［すま］の巻［まき］に、「はかまいり」といふ事を、人尋［たつぬ］る事あらは、あらかふへからす。なかされ給ふ御いとまこひに、こゐん（故院）の御はかへ、きたやまへまいり給ふ。ちゝのみかとの御はかなり。

扨、すまへうつろひて、みやこにひきかへ、かすかなる御すまゐ、をしはかるへし。ところは行平［ゆきひら］の中納言［ちうなこん］の此うらになかされて、「もしほたれつゝ」とよみけんところ、近［ちか］き程なれは、なみこゝもとにたちくる心ちして、せんかたなくあはれなり。かりそめのいゑゐまても、いやしかりしかとも、あたりおかしくとりつくろひて、まつのはしら、たけのかき、いしのはしらなと（ママ）、やうかはりて、中〳〵おもしろし。庭［には］の草［くさ］、たていし、さくらなと、ほりうへて、時のほと、みところありて、しなさせ給ふ。そのほとのことは、

庭［には］の遣［やり］水。わか木のさくら。いしのはし（階）。たけのかき。松のはしら。

これらは、すまのいゑゐのしき（仕儀）なり。

又、すまに、「しは（柴）」といふことは、おはしますうしろの山に、たつけふりを、なにそとたつね給へは、しはといふ物、折くふるけふりなりと、御覧しなれす、めつらかにおほしめして、

29山かつのいほりにたけるしは〳〵もことゝひこなんこふるさと人

とよませ給ふ。「もしほやく、けふりにまかふ」なとゝ、つけさせ給ふへし。

やう〳〵、なか雨［あめ］のころになる。これそ、「すまになか雨［あめ］」といふことはなり。心うへし。かやうにとりしつめて、京［きやう］へ御つかひをしたてゝのほせ給ふ。ところ〳〵の返事、見給ふにも、いかはかりかは御なみた、もよほし給ふ。これらは、ことはにつくしかたし。

扨、秋［あき］にもなりぬ。さらてたに秋［あき］は、ものうき夕くれに、心をすますたひねのとこ、おもひや

らんかたなし。露［つゆ］ならて、たれにとはれぬひとりねの、よものあらしをきゝしにも、波［なみ］こゝもとに立［たち］くるこゝちす。行平［ゆきひら］の中納言［ちうなこん］の、「せきふきこゆる」とよみけんも、おほしめしあはせて、なみたおつとはおほえねとも、枕［まくら］うくはかり也。宮古［みやこ］より持［もち］給ひしきん（琴）をひきよせて、御心のまゝにひきすまし給ふ。われなから、すこくおもしろくおほして、そのほとのことは、

ともちとり。月のかほ。ねさめのとこ。よものあらし。うらなみ。たちくるなみ。なみたにうく枕。

これらはみな、すまのうきすまゐのしき（仕儀）なり。いかにも、すまには、都をこひしのふふせ（風情）ひ、「うきな、たちし」なとゝいふことを、つくへし。

扨も、さかきの巻に、いせへくたり給ひし宮すところより、かくて、けんしのおはします御とふらひに、御つかひあり。これそ、いせよりの御つかひ。

30いせしまやしほひのかたにあさりてもいふかひなきはわか身なりけり

31うきめかるいせおのあまをおもひやれもしほたるてふすまのうらにて

文なととて、すまの事に、なへて人のいふ事なり。其ことは、

まきかねたる文〈宮す所、すまへ文。歌にて見えたり〉。いせしま。おもひやれ〈五六枚にかく事。みちのくかみ〉。しほひのかた。ゆふかひなきわか身。うきめかる。いせおのあま。

これは、宮す所の文ありし歌［うた］のことはなり。

かくて、その年もくれぬ。つきのとしの春［はる］のころ、かくれ給ひしあふひの上のあにの、とうの中将［ちうしやう］の、けんし、すまへうつされ給ひしよりは、あさゆふ恋［こひ］かなしみて、かゝるよのそしりをもしらす、ふかきつみにあたるとても、いかゝせんとおもひて、しのひておはして、一よとまりて、詩［し］、れんく（連句）、

歌［うた］よみ給ふ。夜明［あけ］ぬれは、なく〳〵かへり給ふ。けんし、なつかしくめつらかにて、御かたみとて、くろこま（黒駒）、ふゑ（高麗笛カ）なと、たてまつり給ふ。その程のことは、

おなしなみた。雲ゐにひとり。くろこま（ママ）ふゑ。なみた、そゝく。はなのさかつき。

これらは、とうの中将［ちうしやう］のおはしたるときの事なり。なつかしくあかぬ名残［なこり］、めつらしきに、とゝめかねたるなみたのふせ（風情）ひ、つくへし。あはれに、ありかたき心さしには、これを申なり。

かくて其年、三月一日、みの日（巳）の御はらへし給はんとて、けんし海［うみ］つらへ出たまふ。にはかに雨風［あめかせ］ふひて、うみの面は、ふすまをはりたることし。その程のことは、

ひちかさ雨。人かた（人形）。みの日のはらへ。大海原。

さて、やう〳〵として、たひの御所［こしよ］へかへり給ひたれは、なをも雨風［あめかせ］やます、かみなり、ひらめきわたり、をそろしき事かきりなし。日数［かす］をへてふれは、みやこよりしよ（所々）〳〵の御つかひも参［まい］りけり。「ぬれそほちて、くたるつかひ」なとゝいふ事、有へし。此つかひ、あかしの巻［まき］に見えたり。歌［うた］も、おなし巻にあり。其時むらさきの上の文の御うた、

32うら風やいかにふくらんおもひやる袖うちぬらしなみまなきころ

と、よみ給ひしなり。しよ〳〵より、ありし文の事、なか〳〵しくてかゝす。つゐたちより十三日までは雨、をやみもなくふりて、十三日のあかつき、おはしますらう（廊）に、かみなりおちかゝる。あさましなといふは、かきりなし。その時、すみよしの神［かみ］を深くきねん（祈念）して、御心のうちにくはん（願）ともありしやらん。雨風［あめかせ］しつまりて、空［そら］もみとりの色［いろ］になりしかは、すこしまとろみ給ひたるに、御夢［ゆめ］のつけあり。ちゝこゐん（父故院）、御てをとりて、「このうら、さり給へ」とのたまふなり。されは、「ゆめ」といふ事もつくへし。

十、明石［あかし］

此巻［まき］に源氏［けんし］、須磨［すま］よりあかしのうらへ、うらつたひ給へは、あかしの巻［まき］といふへし。かの十三日のあかつき、おきのかたへむかひ、夢［ゆめ］さめて御覧しやりたれは、ちいさき舟［ふね］にのりて、はりまのさきのこくし(国司)しほち(新発意)、これをあかしの入道［にうたう］といふなり。かの人のもとより案内［あんない］申て、けんしをよひたてまつりて、御むかひに舟［ふね］をたてまつる。此君［きみ］ゆめうつゝおほしめしあはせて、さうなく(左右)、このうらへうつろひ給ふ。入道［にうたう］よろこひ、かしこまりて、かきりなく、いつきたてまつる。そのことは、

むかひのふね。をひかせ。はいわたるほと。ふなて。うらつたひ。うらよりをち。

これらは、あかしへわたり給ひし事。

かくて都［みやこ］の御すまゐにも、ことならす、まはゆきすち(筋)はまさりて、かゝやくほとなり。せんすい(泉水)、たて(立石)いし、いけのやり水［みつ］、めもおとろくはかりなり。「ふる里［さと］の池水［いけみつ］」「おもかけ見ゆる」なといふことはあり。事によりて、つくへし。これは三月なり。

程なく四月になれは、ころもかへの御しやうそく(装束)、御丁(御帳)のかたひら、かへしろ(壁代)まてあらためて、まはゆきほと、もてなしかしつきたてまつる。此入道［にうたう］、いみしくかしつくむすめ一人もちたり。これそ、わかむらさきの巻［まき］に、わらはやみのおり、北［きた］山にて人々かたりいたし候むすめなる。つねに「おもひこ(子)」「ひとりこ(子)」なとゝつくる(付)は此事なり。心えさせ給ふへし。なへてならす、おもひかしつきて、なへてならんむこをは、とらしとおもふに、かのひかるけんし、すまにしつみ給ふを聞て、いかにしてかは、こゝもとへうつし参らせて、むこにとりたてまつらんとおもふ心を、すみよしの神のあはれとやおもひ給ひけん。とし月すみよしに祈［いの］り聞えき。すまにて、けんしの御覧しけんゆめとおなしやうに、かの入道［にうたう］も夢［ゆめ］を見

て、とりあへす御むかひを参らせけり。されとも、いかにしてか、いひ出すへきと、つゐてを待［まち］けるそ、いとはるけき心ちせし。

ある夜、けんし都［みやこ］の事、二条院［てうのゐん］のむらさきの上の事よりはしめ、かす〳〵おほしめし出て、物あはれなれは、琴［きん］をひき給ふ。入道［にうたう］たへかねて、みつからしやう（箏）のことを持［もち］て参りて、すゝめたてまつるに、すこしひきすさひ給ひて、「これは女房［ねうはう］のひきたるこそ、につかはしけれ」と、の給ひしことはを、たよりにして、いひよる。たとへは此むすめ、ひは（琵琶）、しやう（箏）のことなと、たくひなくひきけれは、此ひは、ことを、ひかせたてまつらはやと、申いたしたりしより、けんしもゆかしくおほしめして、つゐに文なとかよふ。そのことは、

くるみいろ。こすみ（濃墨）。うすゝみ。かすめしやと。をちこち。をか（岡辺）へのやと。

なとゝいふ事とも、「あかし」といふことにつくへし。このをかへのやと、入道［にうたう］のむすめ、すませし所なり。おやのもとより、ちとひきへたてゝ、をきたり。

さて、とかくいひよりて、かよはせ給ふ。馬［むま］にて、かよはせ給ふに、ある夜［よ］、都［みやこ］もこひしくおほしめして、けんし、

33秋［あき］のよのつきけのこまよわかこふる雲井［くもゐ］をかけれ時のまもみん

と、よみ給ひしなり。さてこそ、「月毛［つきけ］のこま」なとゝいふことは、あかしによし。又、あかしに「くるま」といふ事ありといふとも、あらかふへからす。ゐなかなれは、あらしなとゝ、おもふへからす。入道［にうたう］くるまつくりて、持［もち］たるとあり。

扨［さて］このむすめ、六月のころより、たゝならすなりたりしを御覧しをきて、八月に都［みやこ］へめしかへされ給ふ。此うらには、三月より次［つき］の年の八月まて、おはします。すま、あかしの二うらに、二（ママ）とせな

り。「三とせのわかれ」といふは、是［これ］なり。「三とせのたひ」ともいふへし。

扨かへりのほり給ふに、みやこのわかれにも、をとらすおほして、

34みやこいてし春［はる］のなけきにをとらめやとしふるうらをわかれぬるあき

とよみ給ひて、なく〳〵都［みやこ］へのほり給ふ。かの娘［むすめ］の心のうち、おもひやるへし。入道［にうたう］も御なこりおしみたてまつり、さかひまて御をくりに参る。けんしも、かた〳〵あはれに見すてかたく、都［みやこ］のわかれにもをとらす、なとや心から物思ふらんと、身をうらめしくおほしけり。

扨、あかしの上の御はらに姫君［ひめきみ］、いてきさせ給ふ。松風［まつかせ］の巻［まき］に、京［きやう］へむかへ参らせて、むらさきの上の御子にして、とうくう（東宮）の女御［ねうこ］に参り給ふ。あかしの中宮［ちうくう］とは、此御事なり。

又、あかしに、「とはすかたり」といふ事、これはあかしの上を、うきたひ（旅）のすまゐに、もち給へる事を、いかに都［みやこ］におもはす聞［きゝ］給ふらんとおほして、人の口［くち］よりもれぬさきにとおほしめして、むらさきの上の御もとへ、「おもひよらぬゆめをこそ、見て侍りつれ。うらなきは、とはすかたりと思ひ、ゆるし給へ」とのたまひて、御歌［うた］に、

35しほ〳〵とまつそなかるゝかりそめの見るめはあまのすさひなれとも

とよみて、をくり給ひしなり。これを、「とはすかたり」といふなり。むらさきのうへ、

36うらなくもおもひけるかな契［ちき］りしをまつよりなみはこえし物そと

此歌［うた］なとを取［とり］あはせて、つけさせ給ふへし。

十一、漂澪［みをつくし］

此巻［まき］を、みをつくしといふ事は、

37かすならてなにはのこともかひなきになにみをつくしおもひそめけん

此歌［うた］ゆへなり。けんし都へめしかへされて、程［ほと］なく、もとの御くらゐにあらたまり、かすより外［ほか］の権［こん］大納言［なこん］になり、内大臣［ないたいしん］かけ給ふ。いみしくさかへ給ふ程［ほと］に、すまにて、かみなりおちかゝりたる夜の御ゆめのさとしも、さま〳〵、すみよしの神の御ちかひとおほして、秋［あき］のころ、すみ吉［よし］へ参り給ふ折ふし、かのあかしの御かたも、はる秋［あき］ことに、おさなくより御おや、いたし立［たて］て、すみよしへ参らするに、都［みやこ］よりも、よそほひ、いみしき躰［てい］にて参給ふをも、しらすして、あかしよりもまいりたれは、松原［まつはら］のあたりに、御車［くるま］たてつゝけて、いみしきさまなれは、たれか参り給ふそと、なにはに御舟［ふね］さしとめ、やすらひ、とはせ給へは、「内のおとゝ参り給ふ」といへは、こと人よりもはつかしく、数［かす］ならぬ身［み］をおもひて、なにはのは(祓)らへはかりて(ママ)、かへらんとするに、しのひやかに、人しらせけれは、れいの御心しりのこれみつ、御車［くるま］ちかく参りて、かくと申けれは、「わひぬれは」と、くちすさひ給ふ。此御心は、本歌［ほんか］に、

(38)わひぬれはいまはたおなしなにはなるみをつくしてもあはんとそおもふ

といふ歌の心を、の給ひしかは、もし御よう(用)もやとて、つねによういしてもちたる、つか(柄)みしかき筆［ふて］、御すゝり出して、御車［くるま］の内［うち］へたてまつる。たゝうかみに、けんし、

39みをつくしこふるしるしにこゝまてもめくりあひぬるえにはふかしな

とよみて、かの御舟［ふね］につかはす。されは、「みをつくし」といふ事は、

すみよし。めくりあふ。なにはの舟［ふね］、

なといふことを付へし。

さて此巻に、あかしのうへは姫君、三月十六日にうみたてまつり給へは、京［きやう］より御めのと、くたさるゝ。そのことは、

いはの(岩)をひさき。いか〈五月五日、五十日、御いみ(ママ)あり〉。ときそ(時)もなきかけ(蔭)。

これらは、かの姫君［ひめきみ］のうまれ給ひし時分［しふん］の事と、心得へし。

関屋［せきや］　みをつくしのならひ

此巻［まき］、せきやといふ事。けんし石山［いしやま］へ参り給ふに、せき山にて、むかし、うつせみと聞えし人のおとこのいよの介、ひたちの国司［こくし］になりて、下［くた］りしか、かはりて後［のち］、京へのほるに、せき山にて、あひ給ひしかは、人しれす、むかしの事をおほしめし出て、石山［いしやま］より出給ふ。御むかへに、こきみ(小君)参れり。しのひて、むかしの御心しりのこきみをめして、御文あり。其ことは、

せきや。し水。ゆきあふみち。しほならぬうみ。せきとめかたきなみた。

そのおりのことはなり。これをとりあはせ、「いし山」「せき山」なとに付へし。

40わくらはにゆきあふみちをたのみしもなをかひなしやしほならぬうみ

41ゆくとくとせきとめかたきなみたをやたえぬしみつと人はみるらん

けんし参り給ふ。うつせみは、都［みやこ］へ入ぬれは、ゆくとくるとの心なり。「わくらは」とは、たま〳〵の心也。これは、「あふさか山」なとにつくへし。

蓬生［よもきふ］　みをつくしのならひ

此巻［まき］よもきふといふ事は、わかむらさきの巻のならひ、すゑつむ花の巻に見えたり。見めわろく、はな

あかき女房［ねうはう］、ためしなかりしは、ひたちの宮の御むすめそかし。けんしあはれみて、しはし立よらせ給へとも、すまのたかひめなとには、おほしめしも、かすへさせ給はす。されとも、ちゝみやの御あとのかれはてしと、御心をたえて（たてカ）、いふかきりなくかすかなる御すまゐにて、すみ給ひしを、すまよりかへり給ひて、花ちるさとの御かたへ、五月はかりのころ、わたり給ふに、さみたれの露ふかく、よもきむくらしけり、ふるき家あり。「これそ、ひたちの宮」と、御ともの人申す。さる事とおほしめしいてゝ、わけ入給ふに、しきりに露［つゆ］しけゝれは、御かさをさしかけて、御ともの人のむまのむちにて、露［つゆ］打［うち］はらひて入たまふ。それより、あはれみ給ふ。にはの草［くさ］をもひきのけ、ところ〳〵つくろはせなとして、二三年ありて、二条［てう］のゐん、ひかしのたいにうつして、ふちし（扶持）たてまつり給ひしなり。すへて御心かたくなに、くちはさしいてはみ、かたはらいたき事おほかりし人なり。其時の御歌そかし。けんし、

42たつねてもわれこそとはめみちもなくふかきよもきのもとのこゝろを

「よもきふ」には、

むま。むち。かさ。ふくろふ。あれたるやと。きつねのすみか。

なといふ事もあり、つくへし。「こたまも（木魂）、すみぬへし」なとゝいふ事もあり。

又、「よもきふ」「すゑつむ」なとに「かつら（鬘）」といふ事、人いひいたしたらは、心うへし。此すゑつむの女房のめのとなりしか、侍従［ししう］とて、すゑつむにはまさりて、けんしなとの文の返事とも申す、人かましくありしを、すゑつむの御ためには、したしかりし人、つくし（筑紫）大貳［たいに］になりて下りしおり、こひたてまつりてし（請ひ）も、侍従［ししう］も、たとへなき御ありさまなれは、「さそふ水［みつ］あらは」とおもひし程［ほと］に、姫君［ひめきみ］をうちすてたてまつりてくたるに、御くしのおちにて、かつらをして持［もち］給へる。いとうつくしくて、九尺［くしやく］はかりなん有けるを、御かたみにとて、侍従にたひしなり。此事、心えへし。

十二、絵合［ゑあはせ］

此巻［まき］、ゑあはせといふ事。そのころのみかとは、けんし藤つほの宮の御はらに、しのひていてき給ひし宮にておはします。後には冷泉［れいせん］院と申。此宮、人めには桐［きり］つほのみかとの十にあたり給ふ宮にて、ことのほかに御いとをしみにておはしましゝかは、御くらゐにつかせ給ふ。かの朱雀院［しゆしやくゐん］には、おとなしき宮もおはしまさす。みをつくしの二月に、とうくうに立給ふ。とうくうはかりそ、いとおさなくおはしましける。

此御門のみよには、源氏よろつをはからひ奉り給ふ。むかしのあふひの上の御ちゝ左大臣［さたいしん］殿、せ（摂）政つしやうをもたせたまふ。なに事も御心のまゝにて、めてたし。御孫［まこ］の姫君［ひめきみ］、こうきてん（弘徽殿）にさふらひ給ふ。左大臣殿［さたいしんとの］の御まこなり。ちしのおとゝ（致仕）のむすめなり。みをつくしの八月に、おなしくゑあはせの君也。又、けんしのかよひ給ひし、いせの宮［みや］すところの御はらのさいくう（斎宮）に立給ひしも、おりさせ給ひて、けんし此さいくうを御子［こ］にしたてまつりて、内へ参らせ給へは、とり〳〵の御おほえにて、梅つほと申。後には、きさきに立給ふ。

みかと、よろつの御ことよりも、ゑにこのませ給へは、はう〳〵（方々）うちあつめ参らせ給ふ。ころは三月十日ころなれは、大かたのそらも、おもしろき頃、こうきてんと梅つほと、さう（左右）をわかち、御ゑあはせありて、みかと御覧あり。せいりやうてん（清涼殿）のひろひさし（広廂）に御座よそひて、内の御かた、わたらせ給ふ。女御たちの御たいく（代官）はんには、女房を三人つゝ出されたり。心ことにさうそき（装束）て、さふらはるゝ。兵部卿［ひやうふきやう］の宮、かんつけ（上野）の御こなとのはん（判）し給ふ。くち〳〵にいとみしに、ひたり梅つほなれは、けんしの御かたより、すま、あかしの二のゑを、とり出されたり。これにより、ひたり、かち給ふ。さて、ゑあはせといふ。

此すま、あかしの二のゑは、すまにおはしましし時、たとへなき御つれ〳〵のあまりに、色々のかみに、うらのけしき、山のたたすまゐを、御心のゆく〳〵かきすまし給ふ。それに、わか御有さまをかき給へは、いかてか、をろかならん。たとへんかたなし。これを心えて、付させ給へ。此御ゑをは、わか物なから、あまりにひ(秘)して、都へ持ちてのほり給ひても、むらさきの上にたにも、みせたてまつらす。此とき、けう(興)に出されたり。されは、むらさきの上の三のうらみといふ事の一に、此ことはりなりと心えへし。に(一にはカ)には、あかしの上のかたへの文の上つゝみを見せ給はぬ事。一には、きぬくはりに、あかしの上には、しろきゝぬを参らせられし事。以上、三なり。

十三、松風［まつかせ］

此巻［まき］、まつかせといふ事。けんしの、あかしにて御心さし浅［あさ］からす、入道［にうたう］のむすめをおほしめして、たゝならさりしを御覧［こらん］しすてゝ、のほり給ひしを、御ひめきみうみたてまつりて、とかく月日すきて、三になり給ふ。あまりにさかひ(境)へたゝりたれは、おほつかなく恋［こひ］しくおほして、「かのうらより京へ、のほり給へ」との給へは、大そら(おほぞうカ)のすまゐ、先しはしは、むつかしとて、かのあかしの上の母［はゝ］、入道［にうたう］の北のかたの、おほゐ(大堰川)かはのわたりに、しるところもちたれは、そのあたりの物とも、よひよせて、ふるき家なんとしゆり(修理)せさせて、のほりすみ給ふ。としころのおとこをは、此うらにすてゝ、むすめをつれてのほり給ふ。にうたう(入道)は、北［きた］のかた、むすめに打すてられ、又二三年［ねん］かほと、袖［そて］の上の玉のやうに、もてなしかしつき、なしみたてまつるひめ君［きみ］にも、はなれたてまつり、わか身としよりたれは、いつのよにか、あひ見たてまつるへきと、なこりのかなしさ、たとへもなし。されとも、都［みやこ］へのほり給へは、めてたくおもふ。

さて、おほ井にゆきつきたれは、そのあたりなれは、川［かは］なみすこく、松風［まつかせ］ふきはらひて、

ふるさととしもおほえす、さひしけれは、あかしをけんし、出給ひしおり、都［みやこ］よりもたせ給ひしこと(琴)を、あふまてのかたみとて、をき給ふを取［とり］いたして、ひき給ふ。

43身をかへてひとりかへれる古さとにきゝしににたる松かせそふく

と、よみしゆへなり。そのことは、

都［みやこ］にかへる。かたみのこと。まつ風。おほ井川。

なとゝいふ事を、つくへし。

扨その頃［ころ］、源氏［けんし］、かつら(桂)に御堂［みたう］をいかめしくたてゝ、月に二度［と］、念仏［ねんふつ］なとのために、おはしけるつゐてに、大井へも、わたらせ給へは、「月に二度［と］の御契［ちき］り」なとゝ也。あかしの上は、おほ井に住［すみ］しなり。かつらのつゐてに、源氏のわたらせ給ふを、みな人、かつらにすむと心えたり。能［よく］々、心え分［わけ］て付給へ。「月に二度［たひ］の契［ちき］り」は、「大井」「かつら」に付［つく］へし。姫君［ひめきみ］、三にて登［のほり］給へは、「ひるこ(蛭子)のとし」と「まつかせ」「大井」に付へし。

又、此巻［まき］に、「小たか(鷹狩)ゝり」といふ事あり。これは秋［あき］のころ、けんし、かつらへまうて給ひて、れいのことく、おほゐにおはしける時、わかき殿上［てんしやう］人、君［きん］たち、あまた、小たかかりのつゐてに参りたれは、みき(御酒)なとまいりて、月おもしろきあたりなれは、あそひ給ふ。小たかゝりして、こ鳥［とり］ともを、をきの枝［えた］につけたりとあるを、うるはしきをき(荻)と心得へからす。ちいさき木のえたと、心えへし。これは、「かつら」「おほゐ」に付へし。

十四、薄雲［うすくも］

此うす雲［くも］の女院［にようゐん］と申は、藤つほの事。かゝやく日の宮と申は、けんしのけいぼ（継母）、しのひて参りたまふる人（ママ）なり。此巻［まき］、うす雲［くも］といふ事。うす雲［くも］の女院［にようゐん］かくれさせ給ひて後［のち］、けんし、よみ給ふ歌［うた］、

44いり日さすみねにたなひくうす雲［くも］は物おもふ袖［そて］に色［いろ］やまかへる

此歌［うた］の心は、かゝやく日の宮［みや］と聞えし藤［ふち］つほのみや、そのころ主上［しゆしやう］は、けんしのしのひて、この御はらにまうけ給ひしみかとなれとも、故院、ゆめにもしり給はて、ことの外［ほか］、御いとおしみにて、御とし十一にて、みをつくしの巻に、御くらゐにつかせ給ふ〈れいせん（冷泉院）ゐんの事〉。御母［はゝ］、かゝやく日の宮［みや］も、中宮［ちうくう］より女院［にようゐん］のせんし（宣旨）かうふらせ給ひて、めてたし。御とし三十七にて、かくれ給ふ。ころは三月の事なり。天下諒闇［りやうあん］なり。御門［みかと］をはしめたてまつりて、御歎［なけき］のいろ、ふかし。とりわけ、けんしの御心のうち、おもひやるへし。大かた、よのはかなさをたにも、御心ふかく、おほしなけかせ給ふ御心なれは、まして、わすれぬむかしの御心つくしなれは、今［いま］は此よの名残［なこり］たにも、なき心ちして、人めには、大かたの事にて、御心のうちは、おもひやるへし。

(45)ふかくさの野へのさくらし心あらはことしのはるはすみそめにさけ

なとゝ、花にひとりかこち給ひて、なかめたまふ。夕くれのそら、そこはかとなく、かすみわたりて、ゆふつく日のさすにまかせて、峯［みね］の雲［くも］のうすゝみなるやうにて、わか御袖［そて］の色［いろ］に、まかひけれは、よみ給ひしなり。さてこそ、うす雲［くも］の巻［まき］とは申。此女院［ねうゐん］をも、うす雲［くも］の女院と申つけたり。されは、うす雲［くも］とあらは、

ゆふくれの袖の色。かゝやく。ひかり、かくるゝ。

なといふ事をつくへし。

又、此巻［まき］に、てんか（天下）にさとししけく、月日のけしき、雲［くも］のたゝすまゐまても、ふしきなる事とも有しほとに、大やけも、おほしめしなけかせ給ひて、御祈［いの］りとも、さま〳〵にありしに、此女院［ねうゐん］の御をちにておはしますそうつ（僧都）、大やけの御持僧［しそう］にて、夜居にまいり給ひしか、人のきかぬまに、「かのけんしの君［きみ］の御こにておはします。一切［さい］の事、おやのをん（恩）よりおこる事なれは、おやをしろしめさて、御覧［らん］しくたさせ給へは、そのゆへに、かやうに天下［てんか］、をたやかならす」と、申聞［きか］せ侍［はんへ］れは、みかと、大きにおとろきおほしめして、その色［いろ］を、けんしにも申されて、「たゝ、くらゐにつき給へ」とおほせられしかとも、「いかゝ、さる事侍らん」と申て、たかひに御心のうちには御心え給て、そのゝちそ御世［みよ］もしつまりける。その御心のとをりにて、此みよに、けんし三十九の御とし、藤のうらはの巻［まき］に、院号［ゐんかう］かうふらせ給ひて、六てうのゐんと扨こそ申けれ。

十五、槿［あさかほ］

此巻、あさかほといふ事。けんしの御歌［うた］に、あさかほのさいゐんとて、式部卿［しきふきやう］の宮［みや］の姫君［ひめきみ］、かもの（賀茂）いつき（斎）にておはしゝか、おりゐさせ給ひて、せんさい（前斎院）のゐんと申。かの御かたへの御歌［うた］、

46みしおりの露わすられぬあさかほのはなのさかりはすきやしぬらん

とよみて、たてまつりしゆへに、あさかほの巻［まき］といふなり。

さいゐん、かものいつきにておはしまし、かみ（神）のいかき（斎垣）のうちまても、御心にかけて、申かよはせ給へとも、折ふしの御情［なさけ］しき御返事なとも、にくからす聞［きこ］えさせ給へとも、つゐに御心つよくて、やみ給ふ。

おりゐになりては、御おはのもゝそのゝ宮（桃園）に、一ところにすみ給ふなり。そのことは、
　あさかほ。もゝその。
なとゝいふ事に、つけへし。御心つよきゆへに、あやにくにや、けんし事の外［ほか］に、おりたち申給ひしかとも、御心つよくて、のちに、つゐに、御くしおろし給ふ。心つよき事、やさしきためしをつくへし。

源氏目録　巻中

十六、乙女［をとめ］
十、（ママ）玉かつらのならひ　はつね
同　ほたる
同　かゝりひ
同　みゆき
同　まきはしら
十九、藤のうらは
廿一、かしはき
　よこ笛のならひ　すゝむし
廿四、みのり
廿六、雲かくれ

十七、玉鬘［たまかつら］
　玉かつらのならひ　こてふ
同　とこなつ
同　野わき
同　ふちはかま
十八、梅かえ
二十、わかな上下
廿二、よこ笛［ふえ］
廿三、夕きり
廿五、まほろし
廿七、にほふ宮　かほる中将とも

十六、乙女［をとめ］

此巻［まき］、乙女［をとめ］といふ事。賀茂［かも］の臨時［りんじ］のまつりといふ事を、大内［おほうち］にてつとめさせ給ふ。時分［じぶん］は十一月なり。二十［はたち］よりうちの女房［ねうはう］をそろへて、天人［てんにん］のすかたにいたしたてゝ、舞姫［まひひめ］とて大内殿へ下一人（天下カ）なとのかたより参らせらる。けんしつとめ給ふとし、御めのとのこれみつかむすめを出し立［たて］て参らせ給ふに、しのひてのそきて御覧［らん］すれは（してイ）、むかしけんしの若［わか］くおはせしおり、参りしをとめをしのひおほしめして、いまた忘［わす］れかたくおほしめす人あり。それをおほしめし出て、「それもいまは年［とし］ふりぬらん。我も年ふりぬ」とおほしめして、よみ給ふ歌［うた］、

47をとめこか神［かみ］さひぬらしあまつ袖ふるきよのともよはひへぬれは

とよみ給ひしゆへに、乙女［をとめ］といふなり。返事、

48かけていへはけふのことゝそおもほゆる日かけの霜［しも］の袖［そて］にとけしも

扨これみつかむすめは、其［その］まゝ大内［おほうち］に、とうの（藤）内侍［ないし］のすけとて、さふらはせらるゝ。是［これ］そ、けんしの御子［こ］、あふひの上の御腹［はら］のわか君［きみ］、のちには夕きりの大しやうと聞［きこ］えさせ給ふか、此巻［まき］より、とき〳〵見なれたまふ。あまたの御子［こ］とも、うみ奉［たてまつ］りし人なり。此ことは、乙女［をとめ］、神の神楽［かくら］の義［き］なれは、いかにも神祇［しんき］を付［つけ］へし。

又、此巻［まき］に夕［ゆふ］きりの大しやう、十二にて元服［けんふく］、そのころより、おちの内大臣［ないたいしん］の御むすめ十四はかりに成給ひし。うはの大宮［みや］のもとにおひたち給ふを、おさなき御心にふ

かく心にかけて、こひしのひ給ふ。ひめ君［きみ］、しつ心なきもろこひなり。御父［ちゝ］きゝつけ給ひて、あやなくひきのけて、姫君［ひめきみ］をは、わかもとへしのひやかによひとり給ふ。此姫君［ひめきみ］、御心くるしくおほして、ある夜［よ］のねさめに、「雲井［くもゐ］のかりの我ことや」と、しのひやかになかめしを、かの夕きり立［たち］きゝて、いとゝおもひのまさりしなり。つゐに藤［ふち］のうらはの巻［まき］に、おとゝ御心ゆきて、むこに取［とり］給ひて、めてたかりし。その御こと葉［は］、

雲井［くもゐ］のかり。ねさめ。もろこひ。

おさなき程［ほと］の御心つくし、「いとこ」なといふ事、つくへし。

又、此人々の事に、「六位［ゐ］すくせ」といふ事の侍りし。なに事そと、おもふへからす。此人々、ある時、いかなる隙［ひま］にか、一ところにて物かたりし給ふを、此雲井の雁［かり］のめのと腹［はら］たちて、夕［ゆふ］きりの其頃［そのころ］は、いまた六位［ゐ］におはしける程［ほと］に、此姫君［ひめきみ］をは、とうくうへ参り給はんと、かしつき給ふなれは、「なそや、またしきに六位［ゐ］すくせ」と、はらたちしなり。是［これ］は、ことによりて付へし。是等は、いかにも成あかりて見えたき心ねをすへし。返々、夕［ゆふ］きりの大しやうの北［きた］のかたをは、雲井［くもゐ］のかりと心えへし。夕［ゆふ］きりに付［つけ］んも、につかはしく有へし。其［その］ころは秋［あき］なり。

又此巻に、けんしのおとゝ、六条京極［てうきやうこく］あたりに四町［まち］をしめて、殿［との］つくりして、旁［かたく］の女房［ねうはう］たち、渡し聞え給ふ。此とのに心々のこのみ庭［には］をつくりしなり。まつ南のひかしには、むらさきの上の御かた、春［はる］のあけほのをしめ給ふ。春［はる］のくさ木とも、数［かす］をつくして植［うへ］らるゝ。さてこそ春［はる］の御かた共、申けれ。東［ひかし］の町［まち］には花ちる里［さと］と聞えしは、夏の御かたにて、うの花、さうひ（薔薇）、くたに、ふち、つゝしなと植［うへ］たまひた

り。是は南おもてなり。花ちる里「さと」によそへて、おもしろく。(ママ)梅「むめ」つほの女御「ねうこ」と申、六条「てう」の宮す所の御むすめ、けんしの御やしなひの御娘「むすめ」なれは、にし、ひつしさるの町「まち」にすみ給ふ。これは内より出給ふ御さとの為「ため」なり。此女御「ねうこ」の君「きみ」、秋「あき」の夕「ゆふ」しめ給へは、秋「あき」の野「の」をはるかにうつし植「うへ」て、木「こ」たかき紅葉「もみち」の色をましへ、ことにおもしろし。其頃「ころ」のおりに、(ママ)此きみ、秋「あき」をこのむ中宮「ちうくう」、冷泉院「れいせんゐん」のきさき共いふ。いときよらを、ましたり。北「きた」いぬいのかたには、明石「あかし」の御かた、大井におはしましゝか、うつろはせ給ふ。北「きた」、是は冬「ふゆ」のけしきをうつして、冬枯「ふゆかれ」の野「の」へのけしき、五葉「こえう」の松、雪のあしたはまことにすたれもあけぬへし。ことにすこく、おもしろし。か様の事、よく〳〵(了見)れうけんして付へし。

去程「さるほと」に、かた〳〵とのうつりめてたくして、秋「あき」このむ女御「ねうこ」の御かた、そのころ、おりにあひたれは、ことにおもしろきに、かの女御「ねうこ」の御かたより紅葉「もみち」を箱「はこ」のふたに入て、うへわらはのいともてつけ、きようなる(きよらカ)を御つかひにて、むらさきの上の御かたの春「はる」の御かたへ御歌「うた」有。

49 こゝろから春まつそのはわかやとのもみちを風のつてにたに見よ(秋このむ中くう)

とよみて、をくられたり。御返りは、此はこのふたに、こけしき(苔)、いはなとの心はへして、五葉「えう」の枝「えた」に、

50 風にちる紅葉(むらさきの上)「もみち」はかろし春「はる」の色「いろ」をいはねの松(岩)「まつ」にかけてこそ見め

と云「いふ」事も有へし。

其次「つき」の春、又むらさきの上の御かたより、かの女御「ねうこ」、秋「あき」の御かたへ、こその紅葉の

御返事に、これもはなをいはねの松［まつ］なとに取くして、去年［こそ］のことく、わらはして御つかひ有。

51花そのゝこてふをさへやした草［くさ］に秋［あき］まつむしはうとく見るらん

との給ひて送［をく］りたりしは、いとおもしろき御心ともなり。か様の事は、をとめ巻［まき］に見えたる事なれは、おなし所にかきし。「雲井のかり」、又は「乙女［をとめ］」なとには付［つく］まし。よく〳〵心えへし。此花もみち、殿［との］うつりの庭［には］のけしきなとは、四季［き］の心にてあらんつらんとおほえ候。

十七、玉鬘［たまかつら］

此巻［まき］、玉［たま］かつらといふ事。箒木［はゝきゝ］の巻に物語せし、なてしこの事なり。むらさきの上の御かたに、玉かつらの姫君［ひめきみ］の、つくしよりのほり給ひしを、右近［うこん］はせ（長谷）にて参りあひて、源氏［けんし］のおとゝに申たりしかは、むかへとりてもてなしかしつかせ給ふを、むらさきの上、「いかなるすちの御程にか」とうたかひて、よみ給ひしなり。

52こひわたる身はそれなれと玉かつらいかなるすちをたつねきつらん

とよみ給ひし故［ゆへ］なり。

扨［さて］、此玉［たま］かつらといふは、夕［ゆふ］かほの上に、はかなくをくれ給ひしこと、年［とし］はふれとも忘［わす］れ給はす、さま〳〵人を見給ふにも、あへなくきえはてし露［つゆ］のよすかの、心にかゝり給ふに、かたみにつかひ給ふ右近［うこん］はかりは、さう〳〵しくかなしくて、「いかにしてか、かの物かたりせしなてしこを、たつね出さまし」と、おもひわたり給ふか、かの姫君［ひめきみ］は御年［とし］四にて、めのとにつれられて、つくしへ下［くた］り給ふ。

やう〳〵おとなひ給ふまゝに、御かたちもかたしけなく、うつくしくおひたち給ふ程［ほと］に、めのと、あは

れに、いたはしく、もてなしかしつきたてまつり、かひなく、めのとのおとこ小貳［せうに］、命［いのち］つきぬ。いふかひなくかなしくて、めのと、はこくみたてまつる程に、ならひの国［くに］のしゆこ（守護）といひ（ママ）よりて、すてに日とりしてむこ入せんとする。是におち（佈ぢ）給ひて、かなしみ給ふ程に、めのとと二人して、とかくかまへて、京［きやう］へのほらせたてまつる。御とし二十三。これを、「つくしのほり」といふ。かの大夫のしやうけん（少監）、をひ（追手）ての舟をやたてんすらんと、おち（佈ぢ）て、はや舟（速舟）［ふね］にて上［のほ］せたてまつるなり。これを、「つくし上りのはや舟」といふ。其こと葉［は］、

廿年。はやふね。

「つくしのほり」なといふ事を付へし。

かくてのほり、はせにて右近［うこん］参りあひ、けんしのおとゝに申て、むかへ侍りて、をきたてまつりて、ひけくろの大将［しやう］の北［きた］の方［かた］になり、うちの内侍［ないし］のかみ、かけ（掛け）給へは、玉かつらの内侍［ないし］のかみとはかけ（書け）るなり。此人、はせへ参り給ふ事は、京［きやう］へ上りて、しるかたなく、父［ち］（ママ）おとゝにもいまた申さす。又、源氏［けんし］のおとゝも知［しり］給はす。水鳥［みつとり］のくかに（陸）あかり、巣［す］をはなれたる鳥［とり］のやうにそおほしめし、かなしみける。かなしさのまゝ神［かみ］仏［ほとけ］に御しるへたのみ給ひて、まつ、はせへかち（徒歩）にて参り、ほとけに祈［いの］り申せは、かの右近［うこん］はせにて参りあひ、たかひになのり給ふ。其時の歌［うた］、

53ふたもとのすきのたちとを尋すはふる河のへに君を見ましや

されは、「つくしのほり」に「はつせ参り」、苦しからす付［つけ］へし。此姫君［ひめきみ］のおさなき名［な］は、るりきみ（瑠璃君）といふ。

紅梅［こうはい］のいといたく、もん（紋）うきたるに、ゑひそめの御こうちき、いまやう色のすくれたるとはむらさ

きの上、此御れう。さくらのほそなかに、つやゝかなるかいねり取そへて、ひめ君〈あかしの中宮〉の御れう(料)なめり。あさはなたのかい(海賦)ふのもん、をりさまなまめきたれと、にほひやかならぬに、いとこきかいねりくしては、夏の御かた〈花ちるさと〉。くもりなく赤［あか］き山ふきの花のをりものも、ほそなかは、かの西［にし］のたいにたてまつりたまふ。うへ〈むらさきの上〉は見ぬやうにて、おほしあはす。「うちのおとゝのはなやかに、あな、きよけとは見えなから、なまめかしく見えたるかたのましらぬに、にたるなめり」と、けにをしはからるゝを、色には出し給はねと、との(殿)〈けんし〉見やり給へるに、たゝならす。「いて、此かたちのよそへは。(ママ)」

ゆるし色、いまやうなる事あり。是「これ」は、けしからぬ秘事［ひし］と申ならはしたり。かとりとは、みつ色［いろ］のすゝし(生絹)なり。かちやう(花鳥)のことくなれは、かとり(花鳥)と云［いふ］。今やう色［いろ］とは、紅梅［こうはい］をはる(春カ)云［いふ］なり。ゆるし色とは、いまのねりぬき(練貫)、こうはいの事なり。四季［き］にしたかひて、名［な］をかへたり。ねぬき(ねりぬきカ)、ゆるし色［いろ］とは、こうはいを、こきくれなゐよりすこしうすけれと、ゆるすと云［いへ］り。ねりぬき、いみしくくわしよく(華飾)あり。是、又秘事［ひじ］と云［いふ］。これは、こきくれなゐの事也。

初祢［はつね］　玉かつらのならひ

此巻［まき］、はつねといふ事は、明石［あかし］の上の歌に、姫君［ひめきみ］を、むらさきの上の御こになし給ひておはしませは、見たてまつる事もなくて、恋［こひ］しくおもふに、正月一日、かの御かたへ文参らせ給ふ時の歌に、明石［あかし］のうへ、

54とし月をまつにひかれてふる人にけふうくひすのはつねきかせよ

此歌、本歌［ほんか］に、

(55)まつのうへになくうくひすのこゑをこそはつねの日とはいふへかりけれ

「初音［はつね］きかせよ」と、よみてたてまつりしゆへ也。「五葉［えう］の枝［えた］」に、「ひけこ（鬚籠）」「わりこ（破子）」なとゝ云事、付［つけ］へし。

又、此巻［まき］に、はかためのいはひの餅［もち］、かゝみの事、有。紫［むらさき］の上には、源氏［けんし］見せたてまつらせ給ひしなり。そのおりの御歌［うた］に、けんし、〈但「うすこほり」の歌は、「とし月」の歌よりまへにあり。〉

56うす氷［こほり］とけぬるいけのかゝみにはよにたくひなきかけそならへる

と、よませ給ひしなり。此心なとを取あはせて、初春［はつはる］のいはひなれは、付させ給ふへし。

胡蝶［こてふ］　玉かつらのならひ

此巻［まき］、こてふと云事は、昔［むかし］は院［ゐん］の宮、一の人、きさきなとも、四季［き］に御読経［ときやう］とて、いかめしき大法会［ほうゑ］有［あり］。仁王経［にんわうきやう］、大般若経［たいはんにやきやう］とも云［いへ］り。秋［あき］このむ中宮［ちうくう］は、六条［てう］のゐんにて、をこなはせ給ふ。其つゐてに、むらさきの上も仏［ほとけ］に花たてまつり給ふとて、中宮［ちうくう］の御かたへ花たてまつらせ給ふ。とり、てふに、わらはを八人、かたちことに調［とゝのへ］させ給ひて、鳥［とり］にはしろかねの花、かめにさくらをさして、てふにはこかねのかめに山ふき、おなしき花の一ふさ、いかめしう、よになきにほひをつくせり。こてふ、花そのへ参りてゐるとあり。

乙女［をとめ］の巻［まき］に、「春［はる］まつその」ゝ御返事、「花そのゝこてふをさへや」と申をくり給ひしも、此巻［まき］なれは、こてふと云［いふ］。

扨［さて］、此巻［まき］に、舟［ふな］あそひ、二の舟［ふね］をうかへて、御かく（楽）有［あり］て、心ゆきはおもしろかりし事［こと］は、是［これ］は春［はる］成［なる］へし。

ほたる　玉かつらのならひ

此巻［まき］、ほたるといふこと、ほたる兵部卿［ひやうふきやう］、

57なくこゑも聞えぬむしのおもひたに人のけつにはきゆる物かは

玉かつら歌に、

58こゑはせて身をのみこかすほたるこそいふよりまさるおもひなるらめ

此心は、玉［たま］かつらの君［きみ］をむかへとりたてまつり、かしつき給ふ程［ほと］に、心とけ給ふきんたち、いとおほき中に、源氏［けんし］のおとゝ（弟）、兵部卿［ひやうふきやう］のみや、此君［きみ］を限［かきり］なく御心にかけ給ひて、五月四日の夜、しのひておはしたるに、けんしすきくしく、かの姫君［ひめきみ］の御かたちのすくれておはしますを宮［みや］に見せたてまつりて、いとゝ御心をつくさせ申さんとや。其［その］夕［ゆふ］つかた、ほたるをおほく取［とり］あつめて、きちやうのかたひら（几帳）につゝみて、光［ひかり］をさと見せて、ほのかに見せしなり。

かのかつらのしんわう（親王）に、こゝろをかけし女［をんな］こそ、月のひかりをまちかねて、ほたるを袖［そて］につゝみけるなとゝいふ、ふかきため（ふるきカ）しによそへたり。かのかつらの親王［しんわう］と聞［きこ］えし人は、清和天皇［せいわてんわう］の第［たい］五の御子、ひわの上手［しやうす］そかし。これを（これもカ）、きりつほのみかとに第五とかけり。ひわひきとあり。おもしろし。これは、

きちやうのすきかけの蛍［ほたる］。あやめのしつく。ほたるのかけ、ほのかに見し。

なと云［いふ］事を付［つけ］へし。五月四日の事也。

雙夏［とこなつ］　玉かつらのならひ

此巻［まき］、とこ夏［なつ］と云［いふ］事。玉かつらの君［きみ］のすませ給御かたをは、西［にし］のたいと云［いへ］り。此御かたの庭［には］には、なてしこの色を調［とゝのへ］たる。からの(唐)も、又やまとなてしこなとも、とゝのへ植［うへ］わたされたり。かのあまよのものかたりに、ちゝおとゝ、此姫君［ひめきみ］をなてしことも、かたり出しゝゆへにや、おもしろし。咲［さき］みたれて、えならすおもしろし。源氏［けんし］のおとゝ(大臣)をはしめたてまつりて、わかきん(若公達)たち、この御かたにすゝみ(涼み)て、鮎［あゆ］、いしふしを、かも川［かは］、かつら河よりたてまつりたるを、御前［まへ］にて、てう(調)し参らせ給ふ。此心も、「近［ちか］き川［かは］」「にし河」なとゝいふ事、有へし。季［き］は夏［なつ］なり。いかにも、すすしき所を付へし。そのゆへ、なてしこといふ。

篝火［かゝりひ］　玉かつらのならひ

此巻［まき］、かゝり火［ひ］と云事。けんし、玉［たま］かつらを御子［こ］にして、もてなし給ふといへとも、誠［まこと］の御子［こ］ならねは、御心のうちには、「むかしの御かたみにも見たてまつらはや」なとおほしめし入て、夏のよの月なきころ、すこしくもれるけしきに、篝火［かゝりひ］をともして、御琴［こと］なとを調［ととのへ］させ給ふ。其時の御歌に、けんし、

59かゝりひにたちそふこひのけふりこそよにはたえせぬほのをなりけれ

とよみし故［ゆへ］なり。御ことを枕［まくら］にして、もろともにそひふし給へり。此心に、かゝり火といふ。

琴［こと］をまくら。ゆふやみ。こひのけふり。おきの初風（荻）［はつかせ］。手枕［たまくら］。おもひかくる。

玉かつら。

なとゝ云［いふ］事あるへし。

野［の］わき　玉かつらのならひ

此巻［まき］、野分［のわき］と云［いふ］事。頃は八月に大風ふきて、物さはかしく所々［しよ〳〵］のつゐ（築地）ち、すいかき（透垣）、瓦［かわら］なとふきちらし、すさましく、おそろしかりし也。惣［そう］して、秋［あき］は風［かせ］ふく物也。源氏［けんし］のことはならねと、秋［あき］の風［かせ］そそめきてふくをは、野分［のわき］と云［いふ］なり。

さて、源氏［けんし］の御子［こ］、夕［ゆふ］きりの大将［しやう］の、いまた中将［ちうしやう］にておはしましししころなれは、かの雲井雁［くもゐのかり］とよみし御いとこの姫君［ひめきみ］を、ふかく心にかけて、風［かせ］のまきれに御いもうとのあかしのはらの姫君［ひめきみ］の御かたへ参り給ひて、硯［すゝり］、かみ（紙）こひて、かの雲井［くもゐ］のかりへ御文つかはす。かるかやにつく（付く）かみの色［いろ］、むらさきのうすやうなり。心えへし。其［その］歌に、

60風さはきむら雲まよふゆふへにもわするゝまなくわすられぬきみ

野分［のわき］と云［いふ］事あらは、此歌のことはをも、取そふへし。「かるかや」「むらさきのうすやう」「こひ（乞ひ）しすゝり」なといふ事あるへし。

扨、野［の］わきのあさ、けんし、所々［しよ〳〵］へ風のとふらひに参らせ給ひしなり。中にも、明石［あかし］の御かたへおはしまして、大かたの風のとふらひはかりにて、つれなく帰［かへ］り給ふを、御覧［らん］し

をくりて、さう〳〵しくおほして、御ことをほのかにかきならして、あかしの御歌に、

61おほかたにおきのはすくる風のをともわか身［み］ひとつにしむ心ちして

とよみ給ひし、おもしろき事共なり。その時のこと葉、

野分［のわき］のあした。風のとふらひ。荻［おき］の葉［は］すくる風。

なとゝ云事を付［つく］へし。野分［のわき］に村雨［むらさめ］ふりたる、心得へし。雨［あめ］と云事有とも、あしくはあるへからす。

御幸［みゆき］　玉かつらのならひ

此巻［まき］、みゆきと云事は、此行幸［きやうかう］は、大原野の行幸［きやうかう］の事なり。さて御幸［みゆき］といふ。主上［しゆしやう］は、かの源氏［けんし］の御しのひの御子［こ］、れいせんゐん、ましき。頃は十二月なり。大原野［はらの］へ、みゆきし給ひし。れいせんゐん、

62雪ふかきをしほの山にたつきしのふるきあとをもけふはたつねよ

源氏［けんし］、御返事、

63をしほ山みゆきつもれる松［まつ］はらもけふはかりなるあとやなからん

鷹［たか］かりなれは、そのことは、

みゆき。きし（雉）。をしほ山。ゆき。ふるきあと。

なといふ事、有へし。源氏［けんし］のおとゝは、みゆきの御供［とも］なり。

蘭［ふちはかま］　玉かつらのならひ

此巻［まき］、ふちはかまといふ事。夕霧［ゆふきり］の大将［しやう］の御歌［うた］に、玉かつらの内侍［ないし］のかみの、いまたひけくろの御もとへ移［うつ］り給はて、にしのたいにおはしましおり、よみ給ひし。

64おなし野［の］の露［つゆ］にやぬ（つ）るゝふちはかまあはれはかけよかことはかりも

と、よみ給ひし故［ゆへ］なり。ふちはかまと云り。

そのころ源氏［けんし］のむかしの御こし（小舅）うと、あふひの上の御あには摂政関白［せつしやうくはんはく］なり。かの夕［ゆふ］きりには、母［はゝ］かたのおち、こくはん（この関白カ）はくの御母宮［はゝみや］は、桐［きり］つほのみかとの御妹［いもうと］、源氏［けんし］にも御おは、夕きりの御ためには御うはなり（祖母）。此玉［たま］かつらの姫君［ひめきみ］にも、御うはそかし。此宮かくれさせ給へは、中将［ちうしやう］も、此姫君［ひめきみ］も、服［ふく］にて、くろきころもをき給ふ。其服［そのふく］すくしては、うちの内侍［ないし］のかみに参り給ふへきにて、うちより御つかひに、かの中将［ちうしやう］をたてまつり給ふに、した心には、ゆかしくおもはぬにもあらさりけれは、「内［うち］のおほせ事、ちきに（直に）けいし（啓し）侍［はへ］らん」といひなして、蘭［らん］の花のいとおもしろきを、みすの内へさし入て、此歌［うた］をよみて、御手［て］をいさゝか、ひきうこかしたり。この心をえて、「ふちはかま」といふ事あらは付給ふへし。

真木柱［まきはしら］　玉かつらのならひ

此巻［まき］をまきはしらと云［いふ］事は、此玉かつらのひめきみ、内［うち］の内侍［ないし］のかみかけて、ひけくろの大将［しやう］の北［きた］のかたになり給ふ。もとのうへ、いて給ひしに、其ころ十二三になり給ふ姫君［ひめきみ］おはしけるか、出給ふとて、此歌［うた］をかきて、はしらのすこしわれたるなかへ、かう（笄）

かひのさきにて、をし入たまふなり。

65いまはとてやとかれ(離れ)ぬともなれきつるまきのはしらよわれをわするな

と、よみ給ひしなり。かき給ひし紙［かみ］の色［いろ］、ひはた(檜皮色)色なり。心えへし。扨こそ、まきはしらとはいひけれ。「ひはた色のかみ」「まきはしら」なと、つくへし。

「ひとりのはひ(火取の灰)」といふ事、此巻［まき］の名句［めいく］なり。玉かつらへ此ひけくろ、かよひしに、もとの北のかたは、けんしのおとゝ(大臣)のなへてならすおもひたてまつり給ふむらさきの上には、別腹［へちはら］の御あね、式部卿［しきふきやう］の宮［みや］の大ひめ君にて、世のおほえおもりかに、あなとりにくき御事にて、御子［こ］ともも、あまたおはしけれは、大将［しやう］もなへてならすおもひなから、物のけにわつらひ給ひて、常［つね］は御心うつゝなくおはしける程に、なにとなく、さやうの御かたより、御中も、あかるるやうなるに、此玉かつらにかよひそめては、又おとこの御心いかならん、うつろひはてゝ、やすき御心もなし。北［きた］のかた、いとのとやかにて、わか御身のほと、心えはてさせ給ひて、諸共［もろとも］に出［いた］したてなんとして、やり給ひしか、れいの物のけのわさにや、大さなる(大きカ)ひとりに、ひをとりて、にほひして出なんとほのめき給ふなり。さらぬやうにて、おき出て、ひとりをなけさせ給ふ程に、はいもたち、御そ(御衣)もやけこかれなんとせしなり。それより、いとゝうとましくなりもてゆきて、つゐにかくも、はなれ給ふ。此ことは、

火［ひ］とりのはい。物のけ。うとむ。

なといふ事付［つく］へし。頃は冬［ふゆ］なり。

又、此大将［しやう］をひけくろといふは、異名［いみやう］なり。御ひけのくろくおはしまして、見さま、けんしなとのことくには、うつくしくはあらさりけめと、をしなへてはあらす、おたしく(穏しく)、よのしたかたにて(下形)、めやすきそかし。後には関白［くはんはく］にて、内侍［ないし］のかみ、北［きた］のまんところかけて、いみしく

さかへ給ひし御ことなり。

扨、かしはきのゑもんのかみ、いまた、とうの中将［ちうしやう］と聞えしころ、此玉かつらの内侍［ないし］を、わかいもうとゝもしらすして、心をかけ聞えて、御歌に、

66おもふとも君［きみ］はしらしなわきかへりいはもる水［みつ］のいろし見えねは

と、よみたてまつりしなり。此ゑもんのかみをは、扨［さて］こそ、いはもる中将ともいひしか。さやうのこと、人いふとも、あらかふへからす。かしは木と玉かつらは、おとゝ（弟兄）ひにておはしましゝを、しらていひわたりしなり。

十八、梅枝［むめかえ］

此巻［まき］、梅［むめ］かえと云［いふ］事。正月晦日［つこもり］のころ、源氏［けんし］のおとゝの六てうの院［ゐん］にて、たき物あはせありし。これはあかしの腹［はら］の御むすめ、とうくうに参り給ふ御いそきなり。香［かう］ともを御方々へくはりて、いとみあはせ給ふ。せんさいゐん（前斎院）と申は、かのあさかほのさいゐん、源氏［けんし］に心つよくてやみ給ひし人なり。此御かたより、ちりすきたる梅［むめ］かえに、ふみつけて（文）、こ（紺）んるりの（瑠璃）つほにたき物入て、五葉［えう］のえたに付［つけ］、白［しろ］きつほにもたきものいれて、梅［むめ］をおりて、むすひ付たるいとのさま、なよひかにえならす、おもしろくしなされたるに、その歌、

67花のかはちりにしえたにとまらねとうつらん袖［そて］にあさくしまめや

と、ありしなり。「たき物」と云事には、「五葉［えう］につけし文」なといふへし。「ちりすきたる梅［むめ］のえた」「なよひかなるいと」「るりのつほ」なとあるへし。

やかて其夜、かのほたる兵部卿［ひやうふきやう］の宮［みや］、「いと、くるしきはむさしありて侍［はんへ］るかな。いと、けふたしや」と、なやみ給ふ。おなしはうこそは、いつくにもちりつゝ（散り）ひろこる（広ごる）へかめるを、人の

御心〳〵にあはせ給へるに、いとけう(興)ある事おほかり。さらになにともなき中に、あさかほのさいゐん、くろはう(黒方)、さいへと心にくゝ しほやかなるに(静やかカ)、にほひことなり。侍従［ししう］は、おとゝ〈けんし〉の御すくれてなまめかしう、なつかしきかなりと、さため給ふ。たいのうへ〈むらさきの上也〉のは、みくさ有なかに、はい花はなや(梅花)かにいまめかしう、すこしはやき心しらひをそへて、めつらしきかほりくはゝれる。此ころのかせにたくへんには、さらにこれにまさるにほひあらしと、めて給ふ。なつの御かた〈花ちるさと〉には、人々のかう心〳〵に、いとみ給ふなる中に、かす〳〵にも立出［たちいて］すやと、けふりをさへおもひきえ給へる御心にて、たゝかえうを(荷葉)、ひとくさあはせ給へり。さまかはり、しめやかなるかして、あはれになつかし。冬の御かた〈あかしの上也〉にも、とき〳〵によれるにほひのさたまれるに、けたれんもあやなしとおほして、くろゐかう(薫衣香カ)のすくれたるは、さきの朱雀院［しゆしやくゐん］のうつさせ給ひて、きんたゝ(公忠)のあそんの、ことにえらひつかうまつれりし百ふ(百歩の方)のはうなとよそへて、よにすなまめかしきを(似ず)、取［とり］あつめたる心をきて、すくれたりと、いつれをも、むとくなら(無徳)すさため給ふを、〈けんしのことは〉「心きたなき、はんさなめり」と、聞え給ふ。ほたる兵部卿［ひやうふきやう］の宮［みや］をはんさにて(判者)、御かた〳〵のたき物を心みさせ給ふ。はい花は、むらさきのうへ、あはせ給ふ。くろはうを、あさかほの斎院［さいゐん］あはせたまふ。かえう、花ちるさと。あかしの上は、くろゐかう(ママ)のはう(方)。し(侍)ゝう(従)、源氏［けんし］あはせ給ふ。いつれも、とり〳〵におもしろし。なかにも、はいく(梅花)はは、其ころの折にあひおもしろしと、定［さた］められき。

御みきなと参りて、宮かへりたまふ。御をくり物に、たき物をたてまつり給へは、宮の御歌に、

68花のかをえならぬ袖にうつしもてことあやまりといもやとかめん

とあれは、「いと、くんしたるや(屈じ)」と、わらひ給ふ。御車［くるま］かくるゝ(繋く)程に(ママ)、をぬて(追ひてカ)、けんし、

69めつらしとふるさと人もまちそみん花のにしきをきてかへるきみ

とよめり。「梅ににほふ」と云事、此歌［うた］の心なとを取あはせ付へし。

又たき物に「もゝあゆみ（百歩）」と云事あらは、なにそとおもふへからす。是［これ］は、とをくまて匂［にほ］ふ心なり。たき物の名［な］にては、あらす。

又たき物をあはせては、夏［なつ］、冬［ふゆ］にかはりて、うつむ事あり。それも匂［にほ］ひにしたかひて、わかつ。わたりとの（渡殿カ）ゝしたより出る水に、うつむ。内裏［たいり］の御溝水［みつ］になそらへて、なと云事も有へし。くはしくは、むかえ（梅が枝カ）の巻［まき］に有へし。

十九、藤［ふち］の裏葉［うらは］

此巻、藤のうらはと云事。雲井［くもゐ］のかりの姫［ひめ］きみを、夕きりの大将［しやう］みとりの袖のむかしより、おもひ初［そめ］て、年［とし］をふるに、姫君［ひめきみ］のちゝおとゝ、ゆるし給はさりしか、さてしもあるへきならねは、ゆるし給はんの御心にて、おとゝの御庭［には］に、藤［ふち］の花のさかりに、中将をよひ聞え給ふ。御あそひなとはかりにて、さかつきのつゐてにおとゝ、「藤［ふち］のうらはの」と、うちすさひ給へるなり。此歌に本歌［ほんか］あり。

(70)はる日さす藤［ふち］のうらはのうちとけて君しおもはゝわれもたのまん

おもひ給はゝ、むこに取なん、といふ心なり。おとゝ、

71むらさきにかことはかけんふちの花まつよりすきてうれたけれとも

ゆふきり、

72いく返り露けきはるをすくしきて花のひもとくおりにあふらん

相違［さうい］なく、むこに取［とり］て、水［みつ］もるましくめてたかりし。後［のち］に、三条［てう］の

うへとは、此雲井［くもゐ］のかりの御事なり。あまたの御子［こ］たち、出き給ふ。頃［ころ］は四月也。

さて、やかておなし月に、あかしの御はらのひめ君［きみ］、とうくうに参り給ふ。御つほねは、むかしの桐［きり］つほなり。御とし十二、むかしのかうゐの御つほねなれは、源氏［けんし］の御さうそく（相続）なり。しけいし（淑景舎）やと申き。御おほえ、かかてか（いかてかカ）をろかならん。あまたの宮たちの御母［はゝ］、一のみやは、とうくうに立給ふ。あかしの中くうとは、此御事なり。

かくて其年［とし］、源氏［けんし］のおとゝ三十九にて太上天皇［たいしやうてんわう］のせん（宣旨）し、かうふりて、六条院［てうのゐん］と申き。位［くらゐ］をきはめ給ふ。とても有ましき御事ならねとも、たゝ人になり給ひて後［のち］なれは、さしあたりては、めつらかにめてたし。

やかて、其秋［そのあき］六条院［てうのゐん］へ、みゆきをなしたてまつり給ふ。御子［こ］の夕きり、そのころさいしやう（宰相）なりしを、中納言［ちうなこん］になさる。いつくまても、藤のうらはの巻は、源氏［けんし］の御心ゆき、よろこひし給ふ巻［まき］なり。心えへし。

又、行幸［きやうかう］のおり、おもしろかりしは、そのころのゐんと申は、御あにの朱雀院［しゆしやくゐん］にておはします。主上［しゆしやう］は、人こそしらね、六てうのゐんの御子［こ］、れいせんゐんにておはします。御さを（座）両［りやう］はん（院カ）にてあるへきを、六てうのゐん、なを卑下［ひけ］して、太政大臣［たいしやうたいしん］の御さにせられたり。朱雀院［しゆしやくゐん］御覧［らん］して、いかゝとて、あるしの御さをなをさせ給ひ、院［ゐん］の御さにひとしくさせられたるやうのことを、れう（了見）けんして付［つけ］させ給へ。

二十、若菜［わかな］上

是を若菜［わかな］の巻［まき］と云事は、玉かつらの内侍のかみは、ひけくろの大将［しやう］の北［きた］

のかたにて、いつしか、わかきみ二ところまうけ給へり。正月廿三日に、ねの日、源氏のゐんの御かたへ、ねのひのいはひに参り給ふ。御ゆう(遊)ふかく、さま〳〵にてめてたかりし。玉かつらの歌、

73わか葉さす野への小松をひきつれてもとのいはねをいのるけふかな

と、よみ給へり。六条［てう］の院［ゐん］の御うた、

74小松はらすゑのよはひにひかれてや野へのわかなもとしをつむへき

と、よみかはし給へり。此心は、源氏［けんし］の御賀［か］の心ねに、かくいはひ給へり。上らう(膳)は賀とて、四十の年［とし］より、十にみつるとし毎［こと］に、いみしき大ほゐ(ほうゐカ)をこなひ、はい(拝賀)かをとゝのへ、一門［もん］一家［か］の一大事［じ］にいのりをする事なり。これによりて、内侍のかみ〈玉かつらの事〉、御子［こ］にし給ふゆへなれは、ねの日によそへておはしたる。子［ね］の日とは、正月のはつねの日は、子日［ねのひ］とて、野へのあそひ、わかなそなふる事あり。これにも若菜［わかな］のあつものあり。心えへし。さて程へて内侍のかみ、おはしたてまつり給へは、いとねひまさりて、物々［もの〳〵］しく見るかひ有しを、源氏［けんし］のほめ給ひしなり。「わかな」に「見るかひあり」といふ事、くるしからす、玉かつらにあるへし。源氏［けんし］の御とし四十なれは、「よそちの春」なと云事有へし。御賀［か］といふ事は、人のいのちをのふる事にて、しうけん(祝言)なり。

扨、藤［ふち］のうらはに、あかしの中宮［ちうくう］、とうくうへ参り給ひて、めてたかりし事なり。又、中宮［ちうくう］、わかみやうませ給ふ事あり。これを、あかしのうらにとまりし入道［にうたう］きゝつたへて、いかはかりか、うれしかりけん。「此よのねかひも、いまみちぬる(満ち)」と、ふかき山にこもりて、みやこのむすめのもとへも、北［きた］のかたのうはきみ(祖母)のもとへも、こま〳〵と文かきてのほす。此人々のいのりを、すみよしにて、たてをきたる願書［くはんしよ］とも、文はこに入て、ふう(封)して、のほせたてまつる。これを源氏［けんし］

御覧［らん］してこそ、すみよし参りといふ事は侍［はん］れ。此あかし（ママ）のうへをまうけんとて、見たりし夢［ゆめ］をも、かきたり。入道のうたに、

75ひかりいてんあかつき近［ちか］くなりにけり今そ見しよの夢かたりする

と、夢［ゆめ］物かたりの文かきそへたれは、いかにも此心には、「夢［ゆめ］かたり」「あかしのいはや」なと云事あるへし。

其頃、女三［によさん］の宮［みや］と聞えしは、朱雀院［しゆしやくゐん］の姫［ひめ］宮にておはします。あまたの御中に、院［ゐん］の上かきりなく、いとおしみおほしめして、六条院［てうのゐん］に、此宮［みや］をあつけたてまつり給ふ。六てうのゐん、御年［とし］四十の二月なり。これそ、この巻［まき］の下に、かしは木のゑもんのかみに名［な］たちて、かほる大将［しやう］をうみ給ひし人なり。「いつより源氏は、かよひ給ひけるそ」と、とふ事あらは、わかなの上、よき日をえらひ、六てうの院［ゐん］へうつらせ給ひ、新殿［しんてん］しつらひて、大臣［しん］の御うへにさたまりすませ給ふに、御とし十五にてむかへられ給ひし。心えへし。

若菜［わかな］下

是は上に、わかなのいはれあれは、おなし事也。此巻には源氏［けんし］すみよしに参り給ふ上に、中宮［ちうくう］、春宮［とうくう］のわかみやまうけ給ふといひつる宮［みや］、五にてとうくうにつかせ給ふ。御ちゝの春宮［とうくう］は、朱雀院［しゆしやくゐん］の御子［こ］にて、おはしき。なに事も、すみよしの神［かみ］のめくみの有かたくおほえて、むらさきの上、あかしの上、はゝのあまうへ、女御［によこ］の宮［みや］なとおほしめすまゝに、ひきつれ給ひ参り給ひしなり。頃［ころ］は十月廿日の日、その程のことはに、しろくかれたるおきに、たかやにかさして（たかやかカ）、たゝひとりまひて入ぬる。まつはらに、はる〳〵とたてつゝけたる御車［くるま］、是

みな神祇［じんぎ］、すみよし（ママ）にて、むかしの須磨［すま］、明石［あかし］、なにはの（難波）かたさまを見やりて、心しるとおもひ出しつる心をつくへし。

扨［さて］も此女三［によさん］の宮を、かしは木のゑもんのかみ見たてまつりて、おもひかけたる事は、上の巻［まき］に六条院［てうのゐん］にて、かすめるくれ、はるの折ふし、おもしろきに、此御かたの庭［には］にて、御まりあり。ゑもんのかみも参り給ふに、みやのかはせ給ふねこ、いつくよりか、しらぬねこをひて（追ひ）、らうかはしく、みすの内へいりてさはけは、人々おひへさはく。宮［みや］も立［たち］給へり。ねこのつなにて、みすあかりて、御すかた見え給ふ。その折より、やまひとなり、あさましかりし事なり。つゐに此宮［みや］ゆへそかし。身をいたつらになしたまふ。そのほとのこと葉［は］、

春のゆふくれ。まり。ねこのつな引。たちすかた。もやのはしら。

なといふ事有へし。

さて、ゑもんのかみ、此宮［みや］のめのとに小侍従［こししう］といひし女房［はう］は、さるたよりなれは、かたらひて文をやる。そのことは、「みかき（御垣原）かはらを分［わけ］かねて、風［かせ］にあたりて、それよりも心わひしく」なと、かきてやる。小侍従［こしゝう］おもひよらぬ心ちして、「あなはけらし（かけかけしカ）」なとはかりかきて、返事をやりしなり。「はしりかき」とは、なをさりにて、心にもいらぬ事を云なり。かくて、小侍従［こしゝう］せめられこうして（困じ）、つゐにあはせ給ふ。頃は四月そかし。そのころ、むらさきの上、なやみ給ひて、いと大事［じ］におはしけれは、院［ゐん］もひたすらに打たえて、此御かたにおはしませは、よきひまつくりて、あはせそめしなり。

やかて程なく、はらみ給ふ。これを、けんしの御子［こ］と号［かう］す。たゝならすなやませ給へは、むらさきの上の御ことにさしあひ、又いかならむと、心くるしくおもひ給ひて、源氏［けんし］おはしましたれは、宮

［みや］は、さま〳〵空［そら］おそろしく、かなしくあひ給ひしなり。ゑもんのかみを夢［ゆめ］に見たるよしをかたり給へは、されはこそとおほしめして、御目［め］をも見あはせられすおはしませは、此程のとたえをうらみ給ふにやと、おもひなくさめ給ふ程に、いとあつきころなれは、夕風たちて、むらさきの上の御かたへ帰り給ひなんとし給へは、女三［によさん］の御なこりおしくやおほしけん。御とめ有し、ことはのほんか（本歌）。

(76)夕やみはみちたと〳〵し月まちてかへれわかせこそのまにもみん

「月まちてとも、いふなる物」との給へは、「其まにもや」とおほしめすを、いとおしくおほして、その夜はとまり給へは、さらん（去らんカ）には此事あらはれさらましと、いとゝかなしくて、朝［あさ］すゝみの程にかへり給ふに、けんし、あふきをおとさせたまひて、もとめさせ給ふに、御しとねの下［した］に、あさみとりのうすやうにかきたる文を、ゝしまきたるはし（端）見ゆる。あやしくおもひ給ひて、御かゝみなと御覧する所にて、御覧すれは、こま〳〵とかきたるに、まかふへくもあらす、かの中納言［ちうなこん］の手にて、たまさかにあひたてまつり、心のまゝならぬこひのくるしさなと、かきたるなり。けんしの御心のうち、いかはかりか有けん。小侍従［こししう］、御かゝみなともちて参りて見たてまつれは、きのふ、かのかたより参りたりし文の色［いろ］のかみを御覧するよと、なにとなくむね打［うち］さはき、ひし〳〵とする心ちしてけり。やかて、源氏［けんし］かへり給ひて後［のち］に、宮［みや］にとひたてまつれは、「いさとよ云（よゝしカ）しほとに、院［ゐん］入せ給ひしかは、しとねのしたに、をきたりし」との給ふに、よりて見るに、なにゝかあらん。小侍従［こししう］かくと申せは、宮［みや］はたゝ、なみたならては、かこつかたもなし。その程のことは、

みとりのうすやうの文。しとねのした、あらはるゝ。

なといふ事を付へし。それよりそ、けんしは人めはかりにて、つゐに其後［そのゝち］は、あひ給はす。人しれぬ御心のうち、さこそとあはれにも、あさましきなり。

さて、わかなの女楽といふ事。これは女三［によさん］の宮［みや］、いまた、ゑもんのかみにあはさりしさきなり。朱雀院［しゆしやくゐん］の五十の御賀［か］を、御子たちつとめたてまつり給ふ。此女三［によさん］の宮、つとめて参り給ふ。けんしのもとにおはしませは、さりともきん（琴）をならし給ふらんと、御うしろことのありしよし聞［きゝ］給ひて、もとよりえさせ給へは、御まへにて聞［きゝ］ところある程に、とり立［たて］て、よるひる、ならはせたてまつり給ふ。いとさとく心えて、ならひとり給ふそかし。「君［きみ］はかり、つたへたる人もなし」と、ほめ給ふそかし。うち〳〵に心みんとて、正月廿日はかりなれは、春の夜、のとかにかすむ夜、御かた〳〵をよひたてまつりて、御楽［かく］あり。これを女かくといふ也。夕きりの大将みすのとにて（外）、御こと（琴）はかりとゝのへて参り給ふ。女三［によさん］の宮［みや］のきんの御琴、むらさきの上はわこん、女御はさう（箏）の御こと、あかしの上はひわ、源氏［けんし］はしやうか（唱歌）し給ふ。ふえは夕［ゆふ］きりの御子［こ］、ひけくろの大将［しやう］の御（ママ）、玉［たま］かつらの御腹［はら］の子、これ、いとおさなくて、さう（笙）の笛［ふえ］ふき給ふ。さて、いつれもおもしろく有しなり。

其時の御すかたふりを花にたとふれは、まつ女三［によさん］の宮［みや］の御かたちは、二月中の十日はかりの青柳［あをやき］の、はつかにしたりはしめて、うくひすのは（羽）風にもみたれぬへし。御くしは、ひたりみきよりこほれかゝりて、柳［やなき］のいとの春雨［はるさめ］にみたれたる風情［ふせい］なり。女御のきみの御すかたは、こたかき峯［みね］より、あたりにならふ花なく、さきこほれたる藤［ふち］の心ちして、よしありて見え給ふ。むらさきの上は、大きさなとよき程［ほと］にて、やうたい（様態）あらまほしく、あたりにもにほひみちて、花といはゝ、さくら、梅［むめ］にたとへても、なを物ことにすくれたり。けに、ゆふ（優）なる御さまなり。かゝる中に、明石［あかし］の上は、けおとさるへけれ共、あらまほしくもてつけて、さ月の花たちはなも、みもく（実）し（具）て、をしおりたる心ちする。こまの（高麗）青地［あをち］のにしきのはし（端）さしたるしとねに、みつからおはす（ママ）。ひわをうちをきて、

たはやかに、つかひなしたるはち(撥音)をと、きくより見るは、なをまさりたり。これらを、ことによりて、よそへつくへし。

又、此巻［まき］に、おちはのみやと云［いふ］事、有。是［これ］はゑもんのかみ、わか北［きた］のかたに、もちたてまつる。此女三［によさん］の宮のあねそかし。御はゝは、其すちもなき下［け］らう(臈)のかうい(更衣)なり。朱雀院［しゆしやくゐん］の、にし山に御くしおろして、うつろはせ給ひしより、女三［によさん］の宮［みや］を、は、源氏［けんし］給はり給ふ。ゑもんのかみも宮たちを、ちゝおとゝ、のそみ給ひしかは、此女三(ママ)［によさん］の宮［みや］を給はり給へは、さておもひみたれてより、なかめて、「女三の宮に、さもおとり給へるそかし」とおもひて、よみ給ふ歌、

77もろかつらおちはをなにゝひろひけんなはむつましきかさしなれとも

とよみしより、此宮［みや］をおちはの宮と申。すかたかたち、こともなく、しめやかにおはせし人なり。小野［をの］にすみ給ひしより、小野のおちはの宮［みや］と云［いふ］事もあり。心得へし。

二十一、柏木［かしはき］

此巻［まき］、かしは木と云［いふ］事。月卿雲客［けつけいうんかく］を、月［つき］、日［ひ］、星［ほし］、雲［くも］、かすみ、まつ、よろつの木草［きくさ］になそらふるに、ゑもんのかみを、かしは木によそへたれは、さて、かしは木と云なり。歌［うた］にも此人をは、かしは木とよみたり。

扨、此人、女三［によさん］の宮［みや］の事ゆへに、病［やまひ］かきりになりて、いまはのおり、大納言［たいなこん］になさる。此人しゝ(死)たる事は、こひ(恋)といひ、けんし、すこし其心をほのめかして、酒［さけ］をしゐて、御心よからぬ(よからぬカ)御めつかひをし給ひしより、心のおにゝや、いとゝしく心かきみたれしなり。扨、かきりのおり、

かの侍従［ししう］をよひて、宮［みや］へ歌をたてまつる。

78いまはとてもえんけふりもむすほゝれたえぬおもひのなをやのこらん

女三の宮、

79たちそひてきえやしなましうきことをおもひみたるゝけふりくらへに

とありしをこそ、女三の宮の「けふりくらへ」とは申けれ。かしは木に、たよりあることは。

かの病［やまひ］のうちに女三［によさん］の宮、かほる大将［しやう］をうみ給ひしなり。源氏［けんし］は我子［わかこ］ならねとも、人の思はん事をおほして、もてなし給ふ。つゐにそのまゝ、よるなと、とまり給ふ事もおはしまさす、宮の御心のうちそいとおしき。御身のうさをなけきしつみ給ふ程に、御心もれいのさまにもおはしまさす。これも御物のけのゆへ有て、さてもかきりとおほして、かゝるつゐてにと、さしもはかなくよはき御心にも、御身のうきをおほしめしとりて、御父［ちゝ］ゐんの上へ申給ひて、御くしおろさせ給ひしなり。是［これ］を、かの大納言［なこん］聞［きゝ］て、いとゝ病［やまひ］おもりて、しに給ひけり。限［かきり］のおり、夕きりの大将［しやう］は、かの大納言［なこん］のいもうとむこそかし。雲井［くもゐ］のかりは、いもうとなり。いとなかよき事なれは、よひよせ給ひて、さま〳〵にいひをき、かのわかきみの御事をも、かたはしいひをきて、おやにもさきたちてうせにけり。

さて女三［によさん］の宮［みや］は、心ちすこしよくなり給ふ。かのわか君［きみ］は、いつくしくおはしませは、源氏［けんし］いとあはれにおほして、かしつき給ふ。いそか〈五十日也〉のいはひのおり、かの若君［わかきみ］を源氏［けんし］かきいたきて、女三の宮の御そはへ、人のなきひまにさしよりて、

80たかよにかたねはまきしと人とはゝいかゝいはねの松［まつ］はこたへん

とよみ給ひしかは、宮［みや］いふかたもなく、はつかしくおほして、ひれふし給へり。さこそ、はつかしくも心

うくもおほしけん。

ゑもんのかみのうせし事は、春［はる］の頃なり。父［ちゝ］おとゝ、なけき給ひし歌［うた］に、

81木［こ］のしたのしつくにぬれてさかさまにかすみのころもきたる春［はる］かな

と、よみ給ひしなり。これらを取［とり］あはせて付へし。

けふりくらへ。いわねの松。たかよにまきし種［たね］。いそかのいはひ。もゆるおもひ。

みな〳〵こひ(恋)のことは、心えさせ給ふへし。

二十二、横笛［よこふえ］

此巻［まき］、よこふえと云［いふ］事。かのゑもんのかみの北［きた］のかた、おちはの宮［みや］をは、一条［てう］の宮［みや］とも申。ゑもんの死［し］し給ひて後、あはれとおもひし中のかたみなれは、夕きりの大将［しやう］、かの一条［てう］の宮［みや］へ、あはれにかすかなるとふらひに、しは〳〵参り給ふ程に、した心ちなきにもあらす。八月なかはの月、ことにおもしろく、あはれなりしに、あこかれ出て、大将、此宮［みや］へ参り給ひたれは、御はゝの宮［みや］す所、わこんをひかせ給ふ。宮［みや］は御ことあそはして、なかめ給ふ。折ふし、大将［しやう］まいり給ひて、みなみのみすの前［まへ］のすのこにおはします。内より笛［ふえ］を取［とり］出して、大将［しやう］にすゝめ給ふ。此笛［ふえ］こそ古［こ］ゑもんのかみの、そのきはまてもち給ひて、まことにつたへたてまつらんよしをの給ひしなと、おもひ出るほと、ふきすさひたまふ。さうふれん(想夫恋)、ふき給ひて、みすの内をわりなくすゝめ給へは、思ひをよひかほなる人(伶人)さうふれんは、ひわをひき給ひしれいじん(ママ)にあり。ふえは、はん(盤渉)しきと見えたり〉。かくも、かたはらいたけれとも、おちはの宮［みや］、

82露しけきむくらのやとにいにしへの秋にかはらぬむしのこゑかな

ゆふきり、

83よこ笛のしらへはことにかはらぬをむなしくなりしねこそつきせね

といふ歌のゆへなり。

さて此笛［ふえ］をは、やかてをくり物とて、大将［しやう］の御かたへたてまつり給ふ。これなん、やうせい（陽成院）ゐんの御笛［ふえ］といひたり。大将［しやう］、わか御所［こしよ］、三条［てう］殿にかへり給ひて、すこしまとろみ給ひし夢［ゆめ］に、ゑもんのかみ、ありしなからのすかたにて、「此笛［ふえ］は、おもふかた、ことに侍り」といひて、歌［うた］、夢［ゆめ］の中、ゑもんのかみ、

84ふえ竹にふきよる風のことならはすゑのよなかきねにつたへなん

と、よむと御らんしけれは、「かの笛［ふえ］を、すゑのよに、かほる大将［しやう］につたへよ」となり。つゐに、つたへ給ふそかし。さてこそ、かほる大将［しやう］をは、よこ笛［ふえ］の大将［しやう］とも云［いひ］けれ。そのことはに、

ふきつたふる笛。おちは。ゆふきり。

扨［さて］も此巻［まき］に、かほる子（ママ）になり給ふ。かしは木、一めくりの仏事［ふつし］にも、おやたち、かきりなくなけき弔［とふら］ひ給ふ。六条院［てうのゐん］には、さま〳〵におほしめし出る事さへあれは、あはれにおほして、かの若君［わかきみ］の御かたよりと心さして、金を百両［りやう］、御心さしことさらに、御ことはとも、いろいろにそへ、つかはされけれは、人は此心をしらねは、おやたちをはしめて、哀［あはれ］にかたしけなさの御心さしと、御なけきの色に見えけりと、又はうれしく、おもひの外［ほか］に、よろこひ給ふそかし。「金」なといふ事あらは、「人こそしらね」なと云事つくへし。

此巻［まき］に、「たかんな（筍）」と云事、有。朱雀院［しゆしやくゐん］の御かたより、たけのこを女三の宮［み

や］へ参らせ給ふ。此宮、御くしおろして後［のち］は、入道［にうたう］の宮［みや］と申。此入道［にうたう］の宮［みや］へ、参らせられしなり。此若君［わかきみ］、とりもてあそひし所も（野老カ）、あひたりしかは、「たけのこ」と云心なと有へし。

鈴虫［すゝむし］　よこ笛のならひ

此巻［まき］、すゝむしと云［いふ］事は、八月十五夜の月のおもしろくすみわたりて、かきりなくあはれなれは、六条院［てうのゐん］はうそふきなかめ給ひて、入道［にうたう］の宮［みや］の御かたへおはしまして、月御覧するに、御まへのせんさい（前栽）に、はなたれ（放）たるむしともの中に、すゝむしの花やかになきけれは、入道［にうたう］の宮［みや］、

85おほかたの秋をはうしとしりにしをふりすてかたきすゝむしのこゑけんし、

86こゝろもて草のやとりをいとへともなをすゝむしのこゑそふりせぬ

と、よみ給ひし歌の故なり。「月くまなく」「ふりすてかたき、すゝむしのこゑ」なと云事、有へし。

二十三、夕霧［ゆふきり］

此巻［まき］、夕きりと云事。大将［しやう］の小野［をの］にて、よみ給ひし、

87山さとのあはれをそふる夕きりにたち出んそらもなき心地して

と、ありしゆへなり。此巻ゆへにこそ、大将［しやう］をは、夕きりの大将［しやう］ともいひけれ。大将の小野のかよひちは、此一条［てう］のおちはの宮に、ふかく心をかけ給ふ程に、そのころ母宮［はゝみや］す所、一条

［てう］の宮にて和［わ］こんひきし人、ものゝけにわつらひ給ひて、いたく（ママ）、山さとに、かやうのおりの用［よう］にや、こしらへ給へる所へ、うつろはせ給ふ。大将いとかなしくて、おはしたり。御馬［むま］にて出給ふ道［みち］すから、秋［あき］ふかき小野［をの］の山のけしき、すこくあはれなるに、おはしつきて、先［まつ］かの御心ちをとふらひ給ひて後［のち］、宮［みや］の御かたのみすのまへのすのこにおはして、みすひきかつき、少将［せうしやう］と云［いふ］女房［ねうはう］よひ出［いた］して、なにやかやの事ともの給ふに、程なく日もくれて、きりふかく立こめ、まかきのしか（鹿）も、むしのねも、なみたもよほすたより、取あつめ、かへらむかたもなき心ちして、うちかたらひて、此歌をよみて、其夜はとまり給ふ。そのほとの言葉、

夕きり。秋［あき］ふかき野山。此山かきのしか。むしのこゑ。たきのをと。おちは。

なとゝ云事を、小野［をの］とあらはつくへし。

去程［さるほと］に暁［あかつき］かへり給ふ。をの（小野）への文あり。返事は宮［みや］、いとゝ物うく、はつかしくおほしめして、かき給はす。いかゝせんとて、宮す所、苦［くる］しき心ちを、しゐてかき給。其返事を大しや（大将）う御覧する所を、北［きた］の御かた、御覧し付給ひて、うしろより此ふみを取［とり］給ひて、かゝる時のまきれに、其夜は小野へおはしまさゝりしを、母宮［はゝみや］す所、かろ〳〵しき御なは（名）、さても有ぬへしと、うすきかたにやおもひなされて、いとゝ心ちもくるしく、よはりはてゝ、つゐにかくれ給ふ。いと、つみふかゝりし、宮［みや］の御ためなり。扨も四十九日も、ほとなくすくるまゝに、京へむかへ奉りて、三条の上［うへ］と十五日つゝ、かよひ給ひしなり。

又、此巻に「つるはみのも（橡）（裳）」と云事、有。これ人のいたしたらは、おちはの宮［みや］のつかひし少将［せうしやう］の君［きみ］といひし女房は、さきの宮す所のゆかりなれは、かくれ給ひし後［のち］、うすくろそめ（薄黒染）のしみたるも（裳）、きぬ（衣）をきて、几帳［きちやう］、ひきよせて、大将［しやう］のとふらひにおはしたりしに、対面［た

いめん］せし事なり。

又、此巻［まき］に、しのひし事なれは、むまにておはし給ひし、くるすのなとへ（栗栖野）、むまの御ともなと、ゆきてとまり、「あかつき御むかへ、たまへられよ」との給ふ。されは小野［をの］に、「くるすのむま」「うつしをけ（桶カ）」なと云事、有へし。是は秋［あき］の頃［ころ］なり。又、みまやにありし時（御厩）、御むまにうつしをかせ給ひてと、れうほん（ママ）に有事なり。小野［をの］へいうまて（ママ）、人をつかはし給ふ時の事なり。くら（鞍）の事、見えす。

二十四、御法［みのり］

此巻［まき］、みのりと云事。むらさきの上、なやみ大事［だいじ］にて、年ころ千部［せんぶ］のほけきやう（法華経）のくやう（供養）、いかめしき大ほうゑ（法会）あり。たきゝ（薪）のきやうたう（行道）なとありて、いとたつとし。心ほそくおほしめして、御こなと（子）も、おはしまさす有けれは、かくなと（楽カ）おはします。ほけきやうのほうゑは、やよひ十四日也。御ほうじはて（法事）ゝ、をの〳〵帰り給ひなんとするに、花ちるさとの御かたへ、むらさきの上、

88たへぬへきみのりなからそたのまるゝよゝにとむすふなかのちきりを

花ちるさと、

89むすひをくちきりはたえし大かたののこりすくなきみのりなりとも

とありし歌の心なり。此よは、はかなかりし事、何のことも、さかしくこその給ひをかぬに、やう〳〵御心あてにも、しをかせ給ふも、いとあはれにそ。さふらふかきりの女房［ねうはう］とも、又かた〳〵も、あはれに有かたき御心のほと、おほかるへし。

此三の宮と姫君［ひめきみ］をそ、朝夕［あさゆふ］そたて奉り給へは、見奉らん程の事、あはれにて、六になり給ふ三の宮［みや］を、御まへにすへ奉りて、「我はかなく成［なり］たらん時は、此たい（対）にすみ給ひて、此紅

梅［こうはい］と桜［さくら］とは、かたみに取［とり］をき見給へ」との給へは、おさなき御心にも、いたくふしめに成［なり］給ひて、御袖をまさくりて立給ひぬ。明石［あかし］の中宮［ちうくう］の御はらの姫君［ひめきみ］をも、むらさきの上のやしなひにて、六条院［てうのゐん］のはるのかた、むらさきの上のたから物ゆつりえて、明石［あかし］の一品［ほん］の宮と申て、すませ給ふ。扨こそ、すゑまても、にほふ兵部卿［ひやうふきやう］の宮［みや］は、此たいに住［すみ］給ひしなり。

かくて、むけに頼［たの］もしけなく成［なり］給へは、中宮［ちうくう］いて給ふ。此中宮［ちうくう］にそ、よろつの事を申をき給ぬ。すこしおきあかり、中宮に対面［たいめん］し給へは、院［ゐん］御覧して、「けふは、いとよく、おきゐ給ふめれは、此御まへにては、こよなくはれ〳〵しけなめり」と、聞［きこ］え給ふ。むらさきの上、

90をくと見るほとそはかなきともすれは風にみたるゝはきのうは露

と、よみ給ひしなり。

かくて日をへておもりて、八月中程［なかほと］に、かくれ給ふ。院［ゐん］の御かた御心のうち、おもひやるへし。もしやと守［まも］り給へとも、限［かきり］のさまはしるかりけれは、御くしおろさんとて、其［その］作法［さほう］なとあるに、ふりわけかみのむかしより、てなれ給ひて、いまはとそきおろしけん（削ぎ）、明［あけ］くれの御心まよひ、夢［ゆめ］まほろしとも、わきまへ給はす。日ころなれつかうまつりし人々、さへにおもひわく（さらにカ）かたもなし。物おほえたる物の、なけかぬは、一人もなし。中〳〵院［ゐん］は、御心つよくもてなし給ひて、大将の君［きみ］＜夕きり也＞にの給ひあはせて、ことゝもをこなはせたまふ。此大将、むかしの野分［のわき］のあした、風のまきれにのそきて、見奉りし御あさかほ、いかならんよに、おほけなくおもふまては、なかりしかとも、忘［わす］れかたく思ひ奉りて、今［いま］ならてはと思ひて、なに心なく打ふし給へる御かほを、つく〳〵

とまもり給ふに、いとゝひかりさしそふ心ちして、むなしき御からに、我たましゐ入心ちして、はかなかりし也。はかなくは(灰)いになし奉りて、七日〳〵の御仏事［ふつし］も残［のこ］りなく、秋［あき］ふかく、風（肌）はたさむく、吹［ふき］しをりたる夕［ゆふ］くれに、父［ちゝ］のおとゝより、御子［こ］の蔵人［くらんと］の少将［せうしやう］して奉り給ふ。

91いにしへの秋［あき］さへいまの心ちしてぬれにし袖に露そをきそふ

とあり。此心、むかし大将［しやう］の御はゝ、あふひのうへのかくれ給ひしも、此ころの事なり。おほしめし出て、よみ給ひしなり。

92露けさはむかしいまともおもほえすおほかた秋の夜こそつらけれ

と、返しし給へり。

此御なけきより、みすのとへも出給はす、たゝ、おほしめしほれたる人に見えは、をこかましかりなん事をおほしめして、是［これ］や甘泉殿［かんせんてん］をいてやらす、へうはう(渺茫)として夢［ゆめ］ににたる心ねそかし。雲［くも］かくれ、此御なけきのゆへそかし。

秋のすゑつかたとよ、秋［あき］このむ中宮［ちうくう］の御つかひあり。六条の宮す所の御むすめ、秋［あき］このむ中宮［ちうくう］、

93かれはつる野［の］へをうしとやなき人の秋にこゝろをとゝめさりけん

此むらさきの上は、春［はる］の明［あけ］ほのにめて給ひし心に、かくよみ奉り給ふ。いと心ありてそ、おほえ(ママ)へし。けんし、

94のほりにし雲［くも］井なからもかへり見よわれあきはてぬつねならぬよに

御のりには、たゝいつくまても、年［とし］をへしわかれのかなしき心をすへし。此巻［まき］中〳〵ことはもな

し。いつくも、わかれのしき（仕儀）なり。

二十五、幻［まほろし］

此巻、まほろしと云事。源氏［けんし］、此御おもひになけきしつみ給ひて、そらを打なかめ給ひて、

95おほそらをかよふまほろし夢にたに見えこぬ玉のゆくゑたつねよ

と、よみ給ひし故［ゆへ］なり。

かくれ給ひて又のとしの春［はる］のひかりを見給ふにも、春［はる］に心をしめ給ひし事を、おほしめし出て、あはれなるに、三の宮［みや］の、かのかたみの紅梅［こうはい］に、うくひすの鳴［なき］けるも、「しらすかほにて」と、なかめ給ふ。

96うへて見し花のあるしもなきやとにしらすかほにてきゐるうくひす

大かたの春［はる］に、ほのめかされてにや、梅［むめ］の花さきみたれて、ちるさくらあれは、さくさくらありと、山見わたされて、いかゝあはれの浅［あさ］からん。藤［ふち］山ふきなとの、心ちよけに咲［さき］みたれたるも、うちつけに、露［つゆ］けくのみなれ給ふ。心えらひして、うへをきしに、あれはてぬと、あはれにて、

97いまはとてあらしやはてんなき人のこゝろとゝめし春のかきねを

ほたる兵部卿［ひやうふきやう］の宮［みや］参りて、紅梅［こうはい］の下［した］に、うそふき給ふに、けんし、

98我やとは花もてはやす人もなしなにゝか春のたつねきつらん

宮、うちなみたくみて、兵部卿［ひやうふきやう］の宮也。

99かをとめてきつるかひなく大かたの花のたよりといひやなすへき

あはれなりし御心なり。まほろしの春［はる］は、かたみの紅梅［こうはい］、桜なと云事あるへし。

さみたれになりて、いとゝはれまなき御心なり。大将［しやう］の君［きみ］、参りたまひて、御物かたり申給ひしに、またれつるほとゝきすのうちなくにも、

100なき人をしのふるよひのむらさめにぬれてやきつる山ほとゝきす

又、賀茂［かも］のまつりに、いにしへのみあれ（御阿礼）、おほし出て、さひしけれは、中将［ちうしやう］の君といふ女房［ねうはう］、むらさきの上の、心ことにおほしめしたりし人なり。源氏［けんし］しのひ〳〵おもひ給ひしかとも、おさなきより、おほしたて給ひしかは、ことのほかに、おちたて（怖ぢ）まつりて、うちとけ給はす。御かたみとあはれにて、此人はかりは御覧［らん］しはなたれすとや、おほしけん。まつりの日、うたゝねしたる所へ、おはしましたり。おきあかりたるに、かたはらなるあふひを御覧［らん］して、「いかにとや。此なこそ（名）、わすれにけれ」との給へは、中将［しやう］の君［きみ］、

101さもこそはよるへの水にみくさゐめけふのかさしよ名［な］さへわするる

と申されたりし。やさしかりし事なり。

ひくらしのこゑ、きゝ給ふにも、源氏［けんし］、

102つれ〳〵とわかなきくらす夏［なつ］の日をかことかましきむしのこゑかな

と恨［うら］み給ふ。ほたるのとひかふにも、「夕殿にほたるとふ」と、めつらしからぬふる事さへ、おほし出されて、時そともなくうらみ給ふ。

七月七日には、御あそひもなし。ほしあひ、みる人もなし。えたをかはせし御契［ちき］りをおほしめしいてゝ、前栽［せんさい］の露［つゆ］いとしけく、わたりとの（渡殿）ゝとより（外）とをり（通り）て、見わたさるれは出給ひて、源氏［けんし］、

103たなはたのあふせは雲［くも］のよそに見（しイ）てわかれの庭［には］に露そをきそふ

と、うらやまれ給ふ。

かくて、八月十四日に、御一めくりなれは、上下（天イ）いもゐ（斎）して、こくらく（極楽）のまんたら（曼陀羅）をかき（描き）をかせられたりしを、供養［くやう］したてまつり給ふ。中将［ちうしやう］の君［きみ］、

104君こふるなみたはきはもなき物をけふをはなにのはてといふらん

と、中将［ちうしやう］の君［きみ］のあふきに、かきたりしを、御覧しける御心の中［うち］、さこそおはしけめ。

九月九日には、わた（綿）おほひたる菊［きく］を御覧しても、「ひとりたもと（袂）にかゝる秋［あき］かな」と、かなしひ給ふ。

神［かみ］な月には、大かたの空［そら］もはれまなく、あはれもふかくて、「ふりにしか」と、うちなかめて、幻［まほろし］と云歌［うた］をよみ給ひしなり。

十一月、豊［とよ］のあかりには、人しれす、むかしの御事おほしめし出て、「日かけもしらす」と、こひ給ふ。御ほい（本意）、とけ給はんも、ちかき御心に、御まへに人、二、三人さふらはせ給ひて、御反古［はうぐ］とも、やきすて給ふに、かのすま（須磨）の迷の折、所々［ところ〳〵］よりたてまつり給ひける中［なか］に、かの御手［て］なるは、ことにゆひ（結ひ）あはせてそ有ける。たゝ今のやうなる御すみ付なと、けにあとは千［ち］とせのかたみなりと、此世なからの御わかれをたにも、なけき給ひけんよと、をしあて給へるに、おつる御なみたをまきらかし給ひて、

105しての山こえにし人をしたふとてあとを見つゝも猶まとふかな

「いかならむ道［みち］までも」とや、おほしめしけん。まきあつめ、ひきゆひて、かき付［つけ］給へる。「けんし、こまかにかき給へるかたはらに」と、他本［たほん］に有。か様［やう］にかき付て、みなやかせ給ふと見

えたり。

106かきつめてみるもかひなしもしほ草おなし雲井［くもゐ］のけふりとをなれ（ママ）

と、よみ給ひし御心の中［うち］、思ひやるにも、せんかたもなかりし。

寒［さむ］き夜のひとりねの、いとゝねられぬ人、ことにさこそは御さ有（ござある）らんと、みな人々おもひ参りて、さて御てう（手水）すめして、御をこなひしたまふに、雪［ゆき］いみしく降［ふり］て、さむきもわりなきに、うつみ火［ひ］おこして、御火［ひ］をゝきたてまつる。古［いにしへ］よりの御事とも、おもひ出る中［なか］にも、入道［にうたう］の宮へわたりそめ給ひしはしめ、心はしも色にいたし給はさりしかとも、あちきなのわさやと、ことにふれておほしたりそかし。様々［さま〳〵］の忘［わす］れかたき中にも、雪［ゆき］ふりたりし暁［あかつき］、立［たち］やすらひしに、身さへしみこほりたりしに、なきぬらしたる袖［そて］を、ひき返［かへ］し給ひしおもかけ、いかならん世［よ］にか又見んと、しつのをた巻［まき］にはあらねとも、むかしを今［いま］にと、くり返［かへ］し給ふ。御袖［そて］のうへに、玉［たま］ちるはかりに、ふりおちし御なみたを、御まへにさふらひし人〳〵の袖［そて］も、心せかるゝはかりにや。

扨も、しはす（師走）、ふつみやう（仏名）なり。ことし（今年）はかりと、おほしけるにや、たうし（導師）にさかつき給りて、御いはひあり。けふそ御かたち、いとゝ光［ひかる］やうなりしそかし。たうし、さかつきのつゐてに、かゝる事、有き。

107春［はる］までのいのちもしらす雪［ゆき］のうちにいろつく梅（めイ）をけふかさしてん

と、よみ給ひしにそ、雲かくれの御心なりける。正月のひきて物、上達部［かんたちめ］なとの物まて、調［とゝのへ］をかせ給ひてけり。源氏［けんし］、

108物おもふとすくる月日（よはひイ）もしらぬ世（身）にとしもわか身もけふやつきぬる

御法［みのり］、幻［まほろし］、二の巻［まき］は、いつれもおもしろけれとも、取わきたる事なし。

二十六、雲隠［くもかくれ］

此巻［まき］、よにふらさす（触らさ）、大かた同前［とうせん］のこと葉なり。光源氏［ひかるけんし］と申せは、雲［くも］かくれのよきたよりなり。

二十七、かほる大将［しやう］共、にほふ兵部卿［ひやうふきやう］共

此巻［まき］、かほるとも、にほふ兵部卿共、云事は、三の宮と申て、むらさきの上やしなひたてまつりて、梅［むめ］、さくら、ゆつり給ひしは、あかしの中宮［ちうくう］の御はら、源氏［けんし］の御まこの宮［みや］、けんふくし（元服）給ひては、兵部卿［ひやうふきやう］の宮と申。御かたちすくれて、御心はなやかに、うつくしくおはしまし候なり。

かほる大将［しやう］とは、かの女三［によさん］の宮の（若宮）わかみや。人めは源氏［けんし］の御子［こ］、まことには、かしは木の大納言［なこん］のこそかし。此君［きみ］も、けんふくなとも、けんし、れいせんゐん（冷泉院）に申をき給ひしによりて、冷泉院［れいせんゐん］にてせさせ給ふ。源氏［けんし］なに事も、申をかせ給ひしかは、よのおほえ、かろからす。院［ゐん］にのみさふらひて、いとかたしけなく、おひたち給ひける。をのつから、かうはしくて、此世のかほりならす、あたり有かたけれは、三の宮［みや］うらやみ給ひて、わさとこのみて、春［はる］はまかきの梅［むめ］をかさし、御身にふれ、夏［なつ］は花たちはなをあつめ、香［か］をなつかしみ、秋［あき］はかれゆくふちはかま（藤袴）をにほはす。紅菊［こうきく］までも、にほひをあつめ給へは、をのつから御にほひ、かうはしくおはして、人々、にほふ兵部卿［ひやうふきやう］とそ申ける。

此御かたそ、源氏［けんし］の御後［のち］には、たちつゝき人の心をもみたし（乱し）給ひし。されは、ほとけのかく

れ給ひし後［のち］、あなんそんしや（阿難尊者）、かせうなとの世に出給ひて、二たひほとけとらいせしかことくなり（渡来カ。と礼せしカ）。されは、「雲［くも］かくれ」、「にほふ」にもつくへし。「にほふ」と云事には、「にほひ、あつめし」なと云事、有へし。「かほる」には、「をのつから、かほる、匂［にほ］ふ」なといふへし。

竹川　ならひ

此巻、たけかはと云事、

109竹かはのはしうち出し一ふしにふかき心のそこはしりきや

といふ歌の故［ゆへ］なり。

此ひけくろの大将をは、後［のち］におとゝ（のカ）（大臣）とて、関白［くはんはく］もち給ひしそかし。玉かつらの御腹［はら］に、わか君［きみ］三人、姫［ひめ］きみ二ところおはします。父［ちゝ］うせ給ひて、さかりにいつくしくおはしけり。其ころ、かほる大将［しやう］、いまた四位［ゐ］の侍従［じしう］とておはせしころ、此あね君［きみ］を心かけ、かよひ給ひしなり。此殿［との］へおはして、姫君［ひめきみ］のおとゝ（弟）、これも、とう（藤）侍従［しゝう］とて、おさなかりしとあそひて、竹川うたひなとしてよみしなり。又おなしころ、夕きりのおとゝ（大臣）、雲井［くもゐ］のかりの御はらの御子［こ］、蔵人［くらんと］の少将［せうしやう］といひしも、此姫君［ひめきみ］を心かけて、ある夕くれに、この姫君たち、さくらをかけ物にて、碁［ご］をうたせ給ひしを見て、いとゝ心をつくしける。「竹川［たけかは］」に「碁［ご］」と云事、此こゝろなるへし。そのこと葉、

春［はる］の夕くれ。碁［ご］のかちまけ〈あねきみ、まけ給ふ〉。はなのかけ物。かいま見。

なとを付へし。

され共、此人〳〵のこひ（恋）も、いたつら事にて、姫君［ひめきみ］、れいせんゐん（冷泉院）へ参りて、わか宮［みや］なと

出き給ふ。いもうとの君［きみ］、内［うち］へ参りて、母［はゝ］の内侍［ないし］のかみゆつりえて、内［うち］の内侍［ないし］のかみに成［なり］給ふ。

紅梅［こうはい］　ならひ

此巻［まき］こうはいと云事。そのころ紅梅［こうはい］の大納言［なこん］と聞えしは、かしは木のこ(故)大納言［なこん］のおと(弟)ゝそかし。世のおほえいみしく、なに事も心はへありて、時の人もてなし奉り、大臣［しん］に成［なり］給へは、紅梅［こうはい］のおとゝとも此人を云なるへし。北［きた］のかたは、ひけくろ大将［しやう］のむすめ、かのひとり(火取りの灰)のはい、かけし人のはらそかし。真木［まき］はしらの、はなれかたくせし姫君［ひめきみ］、ほたる兵部卿［ひやうふきやう］の宮［みや］の北［きた］のかたに成［なり］しを、宮［みや］かくれ給ひて後［のち］、御やと(宿)へおはしきに、宮［みや］の御かたみに、姫君［ひめきみ］一ところおはします。此御かたのにはに(庭)、なへてならす、おもしろきこうはい(紅梅)あり。是を紅梅［こうはい］の御歌(方カ)［うた］と申なり。扨、紅梅［こうはい］と云なり。まゝ父［ちゝ］大納言［なこん］、この梅［むめ］のえたのおもしろきをおりて、御こ(子)のわかきみ、いまた、わらはてん上(童殿上)のほとなるを御つかひにて、にほふ兵部卿［ひやうふきやう］のもとへ、くれなゐのうすやうに文かきて、たてまつり給ふ時［とき］の歌［うた］、

110こゝろありて風のにほはすそのゝ梅［むめ］にまつうくひすのとはすやあるへき

と申されたりしなり。宮いとけう(興)ありて、おもひ給ひ、つねに御ふみなとありしとなり。

まことしき事もなく、五十四帖のほかに、すもり(わイ)とて、おほつかなきところを、清少納言［せいせうなこん］か、つくりいれたると、いふこともあり。その中に、こうはい、竹川［たけかは］ともいへり。又、竹川を、まついふ事もあり。おなし事なれは、論すへからすとなり。

源氏目録巻下　宇治十帖

一、橋姫［はしひめ］　うはそく共いふ　二、椎［しゐ］かもと
三、あけまき　四、さわらひ
五、やとり木　六、あつまや
七、うき舟　八、かけろふ
九、手ならひ　十、夢のうきはし　法の師共いふ

宇治十帖

一、橋姫［はしひめ］　うはそくの巻共いふ

此巻［このまき］はし姫［ひめ］と云事、かほる大将［しやう］の歌［うた］に、

111はし姫［ひめ］のこゝろをくみてたかせさすさほのしつくに袖［そて］そぬれぬる

是［これ］も宇治［うち］のはし姫の本説［ほんせつ］有。又うはそくと云事、宇治［うち］に、ふるき宮すみ給ふ。此宮［みや］は桐壺［きりつほ］の御門［みかと］の八の宮［みや］、けんしには御おとゝ（弟）そかし。れいせん（冷泉院）ゐん御くらゐのおり、朱雀院［しゆしやくゐん］の御はゝ、あしききさき（悪后）、よきさまにおもほしかまへて、「此八の宮［みや］を御くらいにたてまつらはや」なとのくはたて（企て）のありけり。御心かまへや、もれけん。源氏［けんし］なとの御心よからすおもひ奉りて、よにをしけされておはしけるか、八条に御家有て、すませ給ふ。此八てうの御家さへ、やけにし後［のち］は、いと浅［あさ］ましく、都［みやこ］のすまゐもむつかしくおほして、宇治［うち］に山里［やまさと］もち給へりける所にうつりすませ給ふ。それより宇治［うち］の宮［みや］と申。やかて

御くしなとおろして、すみ給ふ。いとうつくしきひめ君［きみ］二人、もちたてまつり給へり。みすてかたくおほして、そくなからをこなはせ給ふ。大かた此宮［みや］は、諸道［しよたう］のたつしやにておはしける程に、かほる大将［しやう］、とくゐ参りて、物なとならひたて奉り、なつかしくおもひたてまつりて、かよひし程に、姫君［ひめきみ］たちにもおもふ心有て、橋姫［はしひめ］の歌［うた］もよめるなり。此姫君［ひめきみ］たちの母君［ははきみ］は、大臣［しん］の御むすめにておはせしか、いもうとの君うみたてまつりて、やかて、はかなくならせ給ふ。其まゝ宮［みや］はひしりにて、そくなからをこなひ給ふ。ひしりと云［いふ］事ありとも、あらかふへからす。

此巻［まき］に、「有明［ありあけ］の月をまねく」といひて、よろつのやさしく、おもしろき事することあり。かほる大将［しやう］、そのころは、さいしやうの中将［ちうしやう］にておはしけるか、此姫君［ひめきみ］たちを、いかにしてなと、ゆかしくおもふ程に、ふかきあきは、まして山里［さと］いかにとおもひやりて、此宮［みや］へおもひたちて参る。道［みち］すから、山ふかくなるまゝに、風［かせ］のをと、ひやゝかに物さひしく、なにとなく袖［そて］もいたくぬれて、

112山おろしにたへぬこのはの露よりもあやなくもろきわかなみたかな

なと、くちすさひ給ひて、馬［むま］にて入給ふ程に、ちかくなるまゝに、物のをと、かすかに聞［きこ］ゆ。わさとの御あそひにはあらす、黄鐘調［わうしきて］にしらへて、ひきすさひたるばちをと、たえ〳〵に聞［きこ］ゆ。しやうのこと、いとねたく、おもしろくて、川なみのひゝき、松［まつ］の風、おりにあひたる心ちして、馬［むま］ひきとめて聞［きゝ］給へは、此宮［みや］に姫君［ひめきみ］たちのあそひ給ふなるへし。やをら入て、とのゐ人に尋［たつね］給へは、宮［みや］は宇治［うち］山のおくにあしやりとて、たつときひしりあり。四き にあてゝ、ねんふつをつとめに、此はうへのほりたまふおりふしなれは、御留守［るす］にて、いとかすかなり。

此とのゐ人に心をあはせて、のそき給へは、いとあはれにすこけにて、みすたかく巻［まき］あけて、はしらかくれにゐかくれて、はちを手［て］まさくりにして、雲［くも］かくれたる月をさしのそきて、「あふきなくても、まねくへかりけり」＜此巻の名句［めいく］也＞との給へは、今［いま］一人はことのうへに、かたふきかゝりて、「入日をまねくともいへ＜陵王［れうわう］、入日［いりひ］をかへしゝ事をよそへしなり＞。さま、ことにも］とて、打わらひなとしたるけしきとも、いひしらす、けたかく、うつくしく身にしむはかりおもふ。取［とり］わけ、「あふきならて」のおもかけは、まことしくおもひしみて、あかつき、かへりけり。宇治［うち］といふには、

山かさなれる、すまゐ。みやこよりうち（宇治）へ入事。四のを。はち（撥）。ありあけ、まねく。とのゐ人。さほのしつく。川なみ、たかく。

なと云事、有へし。

扨も此巻［まき］に、弁［へん］の君［きみ］といひし女房［ねうはう］は、此かほるのまことの御ちゝ、ゑもんのかみのめのとこ（乳母子）なり。世［よ］をとろへて、西国［さいこく］の受領［すりやう］の妻［め］に成［なり］たりしか、後［のち］に都［みやこ］へのほりて、この宮［みや］に姫君［ひめきみ］たちの御うしろみにて、さふらひけり。姫君［ひめきみ］たちの御母［はは］かたに、すこしもはなれさりしゆへなり。扨［さて］、此宮［みや］にて、かほる、此べんの君［きみ］、此宰相（ママ）［さいしやう］の中将［ちうしやう］しのひて対面［たいめん］して、むかしの事共をかたりきかす。いとあはれに、ふしきにおもひて、此弁［へん］の君をも後まて、かほる、はこくみ給ふ。かのゑもんのかみ、いまはのきはに、いかにとして此宮［みや］へたてまつらんとて、弁［へん］の君［きみ］めのとこなれは、いひおきし事有［あり］とて、とり出して、かほるにたてまつる。唐［もろこし］の浮泉綾（ママ）［ふせんりやう］にて縫［ぬひ］たる袋［ふくろ］の中に、たまさかにかよひし文［ふみ］の返事［へんし］、五、六まひ（枚）は、かの手［て］にてかきたる文のあり。「いかならむよにか（世）、たてまつるへきとおもふに、あひ

たてまつるうれしさよ」とて、たてまつり、とりてみ給へは、ふうつ(封)きたるうへに、上といふもじ(文字)かきたり。あくるもめつらかにおそろしくて、御覧［らん］すれは、大納言［なこん］の手［て］は鳥［とり］のあとのやうにて、かの君［きみ］の生［うま］れ給へる、ゆかしくかなしき事、宮［みや］の御さま、かへたる事のあへなく口［くち］おしき事ともを、こま〳〵とかきたり。けに、しゆせ(手跡)きは千年［ちとせ］のかたみにやと、いひしらす哀［あはれ］にて、とりてかへりしなり。か様の事を取あはせて、「宇治［うち］にて聞し身のはし姫［ひめ］」といふやうの句［く］をは、付［つけ］させ給ふへし。

二、椎［しゐ］か本［もと］

此巻［まき］しゐかもとゝ云事、かほるの歌に、

113たちよらんかけとたのみししゐかもとむなしきとこになりにけるかな

といふ歌［うた］のゆへなり。此うはそく、かくれ給はん程近［ちか］くなりて、かほる、れいの宇治［うち］へまうて給ふに、宮［みや］いつよりも物あはれなる御心ちして、れいの四きの御念仏［ねんふつ］に山へ入給はんとにや、姫君［ひめきみ］たちにも、物の給ひをきなとし給ふに、かほるも都［みやこ］へは、いまた入たらぬ(たゝぬカ)秋［あき］のけしき、をとは(音羽)の山も色付［いろつき］て、猶［なを］たつねきにけりなと、なかめておはしたるに、宮［みや］はまちよろこひ給ひて、なからむあとの事、姫君［ひめきみ］なとの事、数々［かす〳〵］申をき給ひて、そのまゝ対面［たいめん］もなくて、むなしく成［なり］給ひし事、あかすかなしき。「我［われ］も老［おひ］とけは、かならすおなしいほりに」なと、ちきり給ひし事おもひ出て、宇治［うち］の宮［みや］のいつしかかくれ給ひて後、あれたるを御らんして、「しゐかもと」の歌をはよみしなり。「しゐかもと」「宇治［うち］のわかれ」なと云事あらは、さとりあはせ(ママ)て付させ給ふへし。宮［みや］かくれ給ふ事は、秋［あき］なり。

又「宇治［うち］の中やと（宿）」「はつせまうて（初瀬詣）」なとと云事あらは、此巻［まき］の二月廿日ころなるへし。にほふ兵部卿［ひやうふきやう］の宮［みや］、此うはそくの宮［みや］に、かほる大将［しやう］参りかよひ、又、姫君［ひめきみ］たちをも心にくきさまに物かたり申をき給ひし程に、人しれすゆかしくおほして、にはかに、はつせへ参り給ふ。おほくは宇治［うち］の中やとりの、ゆかしけれはなるへし。扨［さて］、此姫君［ひめきみ］たちの御かたへも御心かけ給ひしかとも、人めしけく、京よりむかひ（迎）の人々とも参りあひしかは、つゐにかなはて、かへり給ふ。「宇治［うち］の中やとり」とは、十帖［てう］の中にあまた所あるか、是［これ］よりはしまりて、中やとはみゆ。「はつせ参り」も、あまたあり。此巻［まき］より、はしまる。

三、総角［あけまき］

此巻［まき］あけまきと云事、かほるの歌［うた］に、大君［きみ］によみてたてまつりしなり。

114あけまきになかきちきりをむすひこめおなし所によりもあはなん

といふ歌のゆへなり。よめる心は、うはそくの宮［みや］の一めくりの御仏事［ふつし］、姫君［ひめきみ］たち、いとなみ給ふ。かほるも事くはへむとて、わたり給ひてよみし也。返事、あね君［きみ］、

115ぬきもあへすもろきなみたの玉のをになかきちきりをいかゝむすはん

との給ひて、つゐに心つよくて、うせ給ひしなり。御いもうとの君［きみ］をも心かけて、の給ひしかとも、あね君［きみ］をふかく心かけて、うけひかす。

ある時、文のかへり事、すこしゆるくやうなりしかは、おとこのかたは心やすくておはしたるに、中［なか］の君と一ところにね給ひて、おとこの影［かけ］のしけれは、なへたる一ゑ（単衣）はかりき給ひて、姉君［あねきみ］かくれ給ふ。とゝまり給ふ中［なか］の君［きみ］に、いひよりたれとも、あらさりけれは、いとめつらかにうらめし

くて、なにとなくかたらひをきて、かへり給ふ。匂兵部卿［にほふひやうふきやう］の宮［みや］に中たちして、あひ奉りて後［のち］には、二条院［てうのゐん］のにしのたいへ、むかへさせ給ひて、わか君［きみ］なとまうけ奉りしなり。

扨［さて］、宮［みや］は御覧［らん］しはしめて、いといろなる御心にて、しは〳〵宇治［うち］へかよはせ給ふ程に、御母［はは］ささき、みかとなと聞［きゝ］給ひて、此宮［みや］をは、すちことにおもひ奉り給ふ宮［みや］なれは、かろ〳〵しく山（きカ）ふみを、いさめたてまつりたまふて、「御心につく人あらは、むかへ給ひて御覧［らん］せよ」なとゝの給ひて、御心にまかせぬ。姉宮［あねみや］は、「さは、おもひし事なり」と、いひしらす心ほそく、是をのみなけきくらし給ふに、御心ちもなにとなく、なやましくおはしませは、「此つゐてに、なくなりなん」とのみ、ふかくおもひ立［たち］給ふ。

かくて、にほふ宮［みや］は御心もあくかれはてゝ、いかにしてかとおもひ給へと、はるけき道［みち］なれは、するく〳〵ともおもひ立［たち］給はす。秋［あき］ふかきころなれは、紅葉［もみち］御覧［らん］せんと出立［いてたち］給ふも、宇治［うち］へおはしまさんの御心なり。舟ともかさりて、ぶがく（舞楽）とゝのへてあそひ給ふ。宮［みや］は御あそひに御心もいらす、御中［なか］やとりにのみ、なかめやられ給ふ。かの宮［みや］にも、さりとも、けふのつゐてに有［あり］なん。その上、みちし（道芝）はのかほるのかたより、「心し給へ」との給ひをくりけれは、人しれす、したまち給ひて、このし（木下）たかきはらひし、庭［には］のくちはとらせ、みすかけ（御簾）かへなとし給ふに、内より大宮［みや］のつかひとて、上達部［かんたちめ］、宮［みや］の大臣なとたてまつりて、「かろ〳〵しき御ありき、人すくなにて、世のためしになりぬへし」なとあれは、ことわつらはしくて、心ならす、むなしく帰［かへり］給ふ。

「さこそおはしつらん」と、心くるしけに、「おとことといふ物は、かくこそ有けめ」と、「我［われ］もよにあら

ましかは、つゐにはかゝるへし」と、ふかく姉［あね］きみ、おほしめし取て、いとと御心ちも、よは〳〵しくなりもてゆきて、かほる大将［しやう］殿おはしましたるに、「此中［なか］の君を、たゝ、わかみとおもひて、み奉り給へ」と、返々いひをきて、御年［とし］二十六にてかくれ給ふ。大将［しやう］は限［かきり］なく思ひて、すてに御いみ(忌)にこもりて、都［みやこ］へもかへり給はす。おほろけの事にはあらしと、かた〳〵より御とふらひあり。頃［ころ］は冬［ふゆ］なれは、いとゝ山里［さと］さひしく、ふりつむ雪［ゆき］にあとつけわひて、かたしく袖［そて］の氷［こほり］、とけさりしおもかけに、いとゝなけきくはへ給ふ。かやうの事をつくへし。「あけまき」「心つよかりしなけき」なとも、ことよせて付［つく］へし。「ふねのかく(楽)、まちかき程にてかへりし」なと云［いふ］事あるへし。これらは、「うぢ山」「うぢ川」「もみち」なと付へし。

四、早蕨［さわらひ］

此巻［まき］さわらひと云事、うはそくの宮［みや］のたのみおほして念仏［ねんふつ］なとにもこもり、今はのおりもおはしましたりしひしりのはう(坊)より、中［なか］の君［きみ］、姉君［あねきみ］におくれて、たゝ独［ひとり］なかめおはしましゝ所［ところ］へ、はるのはしめに、わらひ、つく〳〵し、おかしけなるかこに入［いれ］てたてまつるとて、

116この春はたれにか見せんなき人のかたみにつめるみねのさわらひ

とよめり。中［なか］の君［きみ］は春［はる］のひかりをみ給ふに、「春やむかしの」とたとられて、わか身ひとりを恨［うら］み給ふ。いそのかみふりにし宮［みや］のうくひすに春［はる］となつけ(告げ)そと、なけき給ふ。此宮［みや］のうせ給ひしも、やゝたちまさりて、姉宮［あねみや］のなけきをかなしひ給ふ。

さて、此巻［まき］の二月に、にほふ兵部卿［ひやうふきやう］の宮［みや］へむかへられ給ひて、いとめてた

し。そのことは、

ひとり、とゝまる。ふるさと、はなるゝ。さわらひ。峯［みね］の霞［かすみ］の立［たつ］を見捨［すつ］る。都［みやこ］へいつる。

なと云事つくへし。めてたく心ゆき、又、ふるさとの名残［なこり］のおしき心ねをつくへし。「うち川」「うれしきせ（瀬）」なと云事もあるへし。

五、宿木［やとりき］

此巻［まき］やとり木と云事、かほるの、うち（宇治）のふるき宮［みや］にてよみ給ひし、

117やとり木とおもひ出すはこのもとのたひねもいかにさひしからまし

といふ歌［うた］の故［ゆへ］なり。此心は、うちの大君［きみ］、失［うせ］給ひて後［のち］、とし月ふれとも、かほる大将［しやう］、なけき忘［わす］れ給はす。中の君［きみ］は、にほふ宮［みや］の北［きた］のかたになりて、京［きやう］におはしませは、宇治［うち］の宮［みや］、いとあれはてゝなとおほして、かの宮［みや］のきたのかたにおほせあはせて、寺［てら］になして、かたはらにしんてん（寝殿）を立［たて］て、時々わたりおはしまして、かのむかしの事、かたり聞［きか］せし弁［へん］の君［きみ］も、姫君［ひめきみ］にわかれ奉りて、あまになりてしを、爰の宿もりになし給ふに、おはしまして御覧［らん］しめくらして、日もくれぬれは、とゝまり給ひて、よみ給ひしなり。

さて、この巻［まき］に、にほふ宮［みや］は、夕［ゆふ］きりのおとゝの御むすめ六の宮（ママ）に、おとゝ、をしたち合［あは］せ聞え給て、時めかせ給ふ。宮［みや］は、かの中［なか］の君［きみ］を、かきりなくおほしめして、いつしか物をとはせん（思はせカ）事をかなしく、心より外［ほか］になけき給ふに、たゝならすさへなり給ふ。八月はか

りより、夕［ゆふ］きりの御かたへおはします。返々［かへす〳〵］も、山ちわけ出［いて］けん程［ほと］の心かろさ、人やりならす、くやしくおほししつみて、けにあまもつり（海士）（釣）する斗なる御枕［まくら］を、そはたてゝなかめ出し給へは、有明［ありあけ］の月も、やう〳〵すみのほりつゝ、ひやゝかなる風のをと、むしのこゑ〳〵にも、むかしのあさましかりし山さとのすまゐより物うくて、よみ給ひし。

118山さとの松［まつ］のかけにもかくはかり身にしむ秋［あき］の風はなかりき

と、よみ給ひしなり。あさましかりし山里［やまさと］のすまゐよりは、都［みやこ］はすみうきなといふ事、物のうらめしきにほひにとり合［あは］せて、付させ給ふへし。

さる程に、宮［みや］、か様［やう］に夕［ゆふ］きりのおとゝに、かよはせ給ふひまに、かほる大将［しやう］にて（ママ）の事なれは、かの中将（ママ）［ちうしやう］の君［きみ］をは、御このことくおほしたる事なれは、つねに此宮［みや］へもおはしかよひ給ふ。世中［よのなか］のうらめしき物かたりなとして、ふくるまておはして、いかゝ有［あり］けん。まことはしらねとも、はひよりして、れいのうつり香［か］、しみふかきを、宮［みや］、とかめいてうらみ給ふ。打［うち］とけて、心やすきかたなれは、宮［みや］も、のとかにおはしまして、ふかき秋［あき］のあはれは、物ことにもよほされて、なみたの露ふきむすふおはなの（尾花）、物よりことにさし出して、打［うち］まねくを御覧［らん］して、宮［みや］、なつかしき程の御ひたゝれ（直垂）はかりき給ひて、御ひは（琵琶）をわさとならして、黄鐘調［わうしきてう］のしらへ、ひきすさひ給ひて、よみし歌［うた］、

119ほに出ぬ物おもふらししのすゝきまねくたもとの露しけくして

女君［ひめきみ］の御返事、

120秋はつる野へのけしきもしのすゝきほのめく風につけてこそしれ

と、よみ給ひしなり。さて、女君にも、しやう（箏）のことすゝめて、ひかせ奉り給ふ。か様の事を、ことはにとりて、

つくへし。すてに都［みやこ］に、ゐ給ひつる時の事なれは、心うつし。（べしカ）かほる大将［しやう］の近［ちか］つきよりし時、かの中の君たゝならすおはしけれは、おひ（帯）のてにあたりたりし事、有。是は、しるしのおひのこと、てにあたる。

これも宮、ゆふきりのおとゝのかたへおはしますまの、あさほらけに、おもふ心しあれは、かほる、朝［あさ］かほの花をおりて、あふきの上にをきて、御物かたりのまに、あかみゆくを見て、歌［うた］。此歌［うた］の心は、姉君［あねきみ］のさしもゆいこん（遺言）にし給ひし物を、たてまつらすなりゆき、くやしき心ねならんかし。

121よそへてそしるへかりけりしら露のちきりかをきしあさかほの花

とよみたりし也。「あさかほ」「あふき」なと、これらは、「かほる」と云事にたよりて有。

か様にかほる、しは〳〵いひわたり給ふ。御むつかしく、わつらはしくおほしめして、いかゝしてか、のかれましと、おもひめくらして、其［その］ころ、ひたちのかみといひし、すゆりやう（受領）のめは（妻）、この中の君［きみ］なとの御はゝの御めいなり。中将［ちうしやう］の君とて、宮［みや］つかへしか、北［きた］のかた失［うせ］給て後［のち］、うはそくの宮［みや］、とき〳〵御覧［らん］しけるにや、たゝならす成［なり］しかは、宮［みや］、限［かきり］なくくやしくおほして、ありし事のやうにもあらすおほしめして、すてさせ給ひけれは、うらめしくはつかしくおほして、いてゝ、すりやう（受領）のめになる。いひしらすうつくしき姫君［ひめきみ］をうみ奉りて、母［はゝ］、人しれすおもひかしつきて、その後［のち］、かみ（守）のことも共いてきたるにも、ゆめ〳〵をとらす、もてなしゆく。年［とし］月ふる程に、廿［はたち］はかりにも成給ふ。いかにして、ちゝ宮［みや］の御かたへしらせ奉らんとおもひて、此北［きた］のかた、あひよりて、かくと申しをおほし出て、故大きみのかたみに是［これ］をたてまつらんと、大将［しやう］にかたり出させ給ひける。大将［しやう］も、さもとおほしけるか歌［うた］に、

122みし人のかたしろならは身にそへてこひしきせゝのなてものにせん

とよみしかは、「あかてわかれたるかたみ」なとの句［く］に付へし。

扨、大将［しやう］はたうたいの姫君（当帝）［ひめきみ］、女三の宮［みや］を給はりて、いかはかりのめんほく（面目）にかあらん。され共、なき人の事をわすれす、宇治［うち］へおはしたれは、此姫君［ひめきみ］、はつせへ参りけるか、うちに中やとりして、かの弁［へん］のあまにしるへきたよりなれは、やとりて物かたりなとするを、大将［しやう］の、小君（弁の君カ）［きみ］に心を合［あは］せてのそきてみ給へは、いにしへの姫君［ひめきみ］にも、いたくおほえ、宮［みや］の北［きた］のかたにも、にたてまつりたれは、心おこりして、つゐにあふ。此人の事そかし。あつまやにも、うき舟にも、手ならひの君［きみ］にも。（ママ）これらは、「宇治［うち］の中やとり」「はつせまうて」「かたみ」なとの事、宇治にてあるへし。

宇治［うち］十帖［てう］の中［うち］に、「きくのかけ物の碁［ご］」といふ事は、此巻［まき］に、かほるを大やけの御むこにとり給はんとて、よのそしりをおほして、女二の宮［みや］の御かたの菊［きく］えならす、おもしろき夕はへに、「殿上［てんしやう］に、たれかある」と御尋［たつね］あれは、「たれかし、かれかし」なと申中に、其［その］ころ、かほる、中納言［ちうなこん］なり。とり別めし出して、かのきくをかけ物にて御碁［ご］うたせ給ふ。宇治（内カ）［うち］の御かた、まけさせ給ひて、「まつ、一えたゆるす」とのたまひしかは、中納言［ちうなこん］心しておりて、

123よのつねのかきねにさける花ならはこゝろのまゝにおりてみましを

と申されしかは、うちの御かた、「母女御［はゝによこ］、おはしまさねとも」と、の給ひしなり。

124霜にあへすかれにしそのゝきくなれとのこりの色はあせすもあるかな

とおほせられて、むこに取［とり］給ふ。かくて、忍［しの］ひ〳〵参り給ふ。心やすきとにや、次［つき］のと

しの藤［ふち］のさかりに藤［ふち］つほにて、藤の宴［えん］し給ひて、やかてその夜［よ］、大将［しやう］の御もとへ宮［みや］うつろはせ給ふなり。その夜［よ］の笛［ふえ］にて、かのゑもんのかみのつたへし笛［ふえ］を大将［しやう］ふけるなり。

六、四阿屋［あつまや］

此巻をあつまやと云事、かほるの歌に、

125さしとむるむくらやしけきあつまやのあまりほとふるあまそゝきかな

といふうたのゆへなり。これらは、みやのきたのかた、かほるに語［かた］り出し給ひたりしひめきみを、母［はゝ］、さこん（左近）の少将［せうしやう］と云人を、すてにむこにとらんとせしそかし。それをひたちのかみ聞［きゝ］つけて、いもう（妹カ）とゝつけて、いとよきむことおもひてやらん、わか姫［ひめ］にひきこして、むこにとる。いと口［くち］おしくおほして、宮の北のかたの御もとへつけてゆきて、あつけ聞［きこ］ゆ。此北のかた、御ゆ（湯殿）とのゝまに、宮［みや］さしのそかせ給ひて、とかくいひより給ひし程に、めのと、あさましくおほえて、あら〳〵しき小いゑをもちたる所［ところ］にかくしをきぬ。さて大将［しやう］殿、宇治［うち］へおはして、かの弁［へん］のあまを先［まつ］やり給ひて、我［われ］も、かの三条［てう］のたひ（旅所）ところへおはしたり。とのゐ人、東［あつま］こゐにて、「たそや」なと、のゝしりとかめし、その時のうたなり。

かくて、そのあかつき、わか御車［くるま］にのせて、宇治［うち］へつれておはして、すませ給ふ。「たひ（旅）のいゑ」なとゝ云事には、

むくら。あまそゝき。あつまや。とのゐ人。

なと云事、付へし。あめ、すこしふりたりしなり。頃［ころ］は九月なり。さて、大将［しやう］は、しは〳〵宇

治［うち］へかよはせ給ふ。

七、浮舟［うきふね］

此巻うき舟と云事、うき舟の歌［うた］に、

126たちはなのこしまの色はかはらしをこのうきふねそゆくゑしられぬ

といふ歌なり。此ゆへは、あつまやの君［きみ］を、かほるいさなひて、宇治［うち］にとりをきて、時［とき］々かよひし程に、兵部卿［ひやうふきやう］の宮［みや］、かの北（北の方カ）の御ゆのまに、ほのかにみ給ひし人を、いかなる人やらんと忘［わす］れかたき秋［あき］の夕［ゆふ］くれにて、北［きた］のかたにも、とひたてまつり給へは、とかくいひまきらはしてすきゆく。

又のとしの正月に、宮、此御かたへおはしまして、うちとけておはしますに、宇治［うち］よりとて、うつえ（卯杖）、ひけこ（鬚籠）、まつ（松）に付［つけ］て、文をとりそへて、御まへなるわらは、もちて参りたり。宮［みや］、いつくよりの文にかとて、うたかはしさに、とりて御覧すれは、いとわかやかなる女の手［て］なり。あやしくおほす。「大将こそ宇治［うち］へ、つねにかよひ給へ。いかならむ」と心にかけて、御いゑ（御家人）人くはしくたつね給へは、しか〳〵と申。ありし御ゆ（湯）するのまに、ほのみ給ひし秋［あき］の夕［ゆふへ］おほしあはする事ともありて、しのひて出給ふ。

先［まつ］ほそきあなより、のそきて御覧すれは、わ（我）かきたの方［かた］にもおほえたり。人しつまりて後［のち］、大将［しやう］のおはしましたるまねをして、「みちにて、いみしくはちかましき事あり。返々、人にしらすまし」と、さゝやかせ給ふ。御こゑ、いとよくまねひ給ふ。ぬれしめりたる御にほひなとも、まかふへくもなし。右近［うこん］と云［いふ］女房［ねうはう］、出［いて］てつかうまつる。扨、きちやうの内へ入ても、たゝ大

将［しやう］のおはしたるとおもひて、うちとけぬれは、あらぬ人なり。浅［あさ］ましくおほしめせとも、かひそなき。「にほふもかほるも、おもひもわかぬちきり」とは、是［これ］なり。

暁［あかつき］かへらむとおほしつれとも、さらにたちはなれかたく、まことにしぬへくおほしまよひて、御みをすてゝ其［その］日は、とゝまり給ふ。其折［そのおり］こそ、うこんはしりてあきれ、浅［あさ］ましくおもへとも、夜はたゝあけに明ぬれは、かなはす。さま〳〵おそろしき事ともをかまへて、右近［うこん］そのへ（述べ）やりける。

扨、心しつかにとゝまりて、浅［あさ］からぬ御ことはをつきせす、「時のまも見すは、いかゝせん」と、あくかれ給へは、女も、「おもふとは是［これ］をいふにや」とおほして、いよ〳〵空［そら］おそろしくかなしけれとも、うちなひきなとせし。そのほとの浅［あさ］からぬ御ちきり、おもひやるへし。

さて次［つき］のあかつき、せんかたなくかなしひなから、をのかきぬ〳〵ひやゝかに、風のをとも、いとあらましく、しもふかきあかつきに、おきわかれ給ふ。御馬［むま］にて、かへり給ふ。そのおり、宮の御歌［うた］、

127よにしらすまとふへきかなさきにたつなみたもみちをかきくらしつゝ

うき舟、御返事、

128なみたをもほとなき袖［そて］にせきかねていかにわかれをとゝむへき身そ

なと、いひかはし給ふ。「おもひわかぬ事」なとには、つくへし。「人たかへ」なと付へし。

かくても猶こひしきは、せんかたなく、なにとすへきやうなくて、みや、御物いみ、なにやかやとかこつけて、又、しのひて出給ふ。こゝの人めもさすかにて、川［かは］よりをちに御やとをとり給ひて、ちいさき舟［ふね］にのり給ひて、さしわたすに、はるかなるきしに、こきはなれたらん心ちして、いと心ほそく、有明［ありあけ］の月のすみのほりて、水［みつ］のおもてくもりなきに、「これなん、たちはなの小嶋］と申て、御舟［ふね］さ

しとゝめたるを見給へは、大やかなる岩［いは］のさまして、されたるときは木のかけ、しけれり。「かれ見たまへ。千年［ちとせ］をふへきみとりのふかさを」との給ひて、宮［みや］、

129としふともかはらし物かたちはなの小しまのさきにちきるこゝろは

と、の給ひし返事そかし。歌［うた］の故［ゆへ］也。扨［さて］こそ、此浮舟［ふね］の君［きみ］なとゝもいひけれ。

扨［さて］、舟よりいたきおろさせ給ひて、御やとりにて、御心しつかにおはして、あやしきすゝ(硯)りめして、御ゑなとかきすさひて、女男［をんなおとこ］もろともにうちそひたるをかきて、「つねに、かくてあらはや」と、御なみたをうけての給ひし御おもかけ、いと、さこそ忘［わす］れかたくありけめ。此いゑに、あしろ(網代)屏風をたてたり。そのことは、

すゝり。ゑ。やと。川よりをち。あしろ屏風［ひやうふ］。

是［これ］みな、「宇治［うち］の川よりをち(遠)」なといふ事につくへし。

その後［のち］、又かほる大将［しやう］おはしましたり。そらはつかしく、かなしくて、打しめりてねたるを、大将［しやう］は、「まとをなるを、さらぬやうにて、うらむるにこそ」と心くるしくて、「こよなく、もてつけたるかな」と、いとゝ心まさりして、あはれもふかくおほして、もろともにはし近［ちか］く出給ひて、折ふしなくさめ給ふ。かほるの歌、

130宇治［うち］はしのなかきちきりはくちせしをあやふむかたにこゝろさはくな

と、よみしなり。かくて、二三日してかへり給ふにも、おもかけこひしくおもふに、いとおこかましく。(ママ)

さて、宮［みや］より(ママ)御心あくかれて、れいならすさへおはしけり。御文のかよひも、ところせきほとなり。大将［しやう］の御使と宮［みや］の御つかひと、たひ〳〵行［ゆき］あひしかは、それよりことあらはれて、大将

のかたより、とのゐ人カ人すへなとして、いときひしくもてなす。きゝあきらめて、大将［しやう］のもとより、かの宮［みや］の御事うらみて、

131なみこゆるころともしらすすゑの松まつらんとのみおもひけるかな

と、宇治［うち］への給ひをこしたる。事あらはれぬと、おもひなけくさま、いと心くるし。宮［みや］の御つかひの、あらはれしおりの文の色［いろ］は、さくらに付て、あかきしきし（色紙）也。「あらはるゝ事」なとあらは、「さくら」に付へしなといふ文（ママ）をつけへし。

さて、うき舟［ふね］おもひみたれて、いかゝせんと、身をうらみけるに、宮［みや］おはして、案内［あんない］し給へとも、とのゐ人、きひしくて、内へも入奉らす。とかくいひて、御つかひ、右近にあひたり。出へきやうもなけれは、侍従［しゝう］とて、右近［うこん］とおなし心なる女房［ねうはう］を、宮［みや］のおはします所へたてまつるに、御ともの人のむまにのせんとすれとも、えのらねは、わかくつ（沓）をはかせて、きぬのすそをとりて、立［たち］そひて参る。宮［みや］は御馬［むま］にて、とをくたち給へる所へ、つれて参りあひて、物の給はんとし給ふ所に、ひんなけれは（便）、馬［むま］のあふりをしきて（障泥）、をとろむくら（蓐）のしけき山かつの家［いゑ］の軒［のき］のしたに、おろし奉りて、なく〳〵物のたまふに、さとひたるいぬ（里）の（犬）、こゑ〳〵にをとなふも、心ほそくおそろし。其ほとのことは、

山かつの軒［のき］のした。さとひたるいぬ。あふりしく。

なといふ事を、「うき舟」なとに付へし。扨、なく〳〵宮［みや］かへらせ給ひぬ。侍従［ししう］、御有さまをかたりけれは、女きみ、枕［まくら］もうくはかり也。

かくて大将、「人はなれたる所にをきたれはこそ、宮もおはしませ」とて、「いそき、むかへ奉らん」とて、御家［いゑ］つくり給ふ。宮［みや］は、「それよりさきにむかへとりて、御心のまゝに」とおほして、御めのとのいゑ、

九条あたりなる所へうつろはせなんと、人しれすかまへ給へは、女は、「いかか、なりはつへき身にか」と、こかれ給ひて、「とにかくに、わか身をなき物になさはや」と、おもひなりけり。ことはりなりや。かは音［をと］、波［なみ］のこゑをきくにも、わか身のをき所とあはれにて、うすきぬに、はかまはかりき給ひて、人のねたるまに、つまと（妻戸）をしあけて、ゆくへきかたもしらす、御かほに袖［そて］をゝしあてゝ、よゝとなきて、えん（縁）より足［あし］をふみおろして、「鬼［おに］にても神［かみ］にても、われをつれてゆけかし」と、なき給ひたるに、かの宮［みや］とおほして、（ママ）おとこの直衣［なをし］すかたなるか出きて、「いらせ給へ」とて、かきいたきてゆく。これは、こたまなり（木魂）。とりもてゆくほとに、平等院［へうとうゐん］のうしろに、大なる木の下［した］に捨［すて］たりしを、小野［をの］のあま、はつせより下向［けかう］に、此平等院［へうとうゐん］にやとりたりけるか、見つけてとりて、小野［をの］へゆきて、やう〳〵かちし（加持）、なをさせいたはりて、人となし奉りて後［のち］こそ、あまになりしか。されは、「宇治［うち］」に「木玉［こたま］」といふ事もあるへし。木玉［こたま］にとられしころは、三月のすゑの事なり。

八、蜻蛉［かけろふ］

此巻かけろふと云事は、此うき舟の、あとかたなくうせて後［のち］、かほるよみ給ひし也。かけろふの、とひかふを見給ひて、

132 ありとみて手にはとられすみれは又ゆくゑもしらすきえしかけろふ

と、よみ給ひし故［ゆへ］也。

扨、うき舟［ふね］、からをたに残［のこ］さす、あとはかなくなりしかは、母［はは］のなけき、をしはかるへし。人めも浅［あさ］ましくて、残［のこ］しをきたりける御ふすま、てうとなと（調度）取［とり］あつめて、むかひ

の原［はら］にをくりて、ゆくゑなきけふりとなしゝ也。「かけろふ」と云事あらは、
　あとかたなき。水のあはときえし。のこるふすまや、けふりなるらん。
なとゝいふ事、付へし。宮［みや］は、ひたすらに此なけきにふし沈［しつ］ませ給ふ。侍従［しゝう］といひし女房［ねうはう］を、是［これ］を後［のち］には宮［みや］の御かたへよひ給ひて、御母［はゝ］中宮［ちうくう］の御かたにさふらはせて、こよなく御かたみに御らんしけり。

九、手習［てならひ］

　此巻［このまき］てならひと云事は、うき舟［ふね］、小野［をの］のあまにつれられて、小野［をの］にすみけり。あらぬよに、むまれたる心ちして、たれにわか身の事をも、ふる里［さと］の事をも、いふへきなれは、たゝつく〳〵と手ならひをして、すゝりにむかひて、おもふ事をも歌［うた］によみし也。さて、この巻［まき］より、手ならひの君［きみ］と云。心うへし。
　をのゝあまの、とりしはしめは、此尼［あま］、八十はかりなる母［はゝ］ひきつれて、はせへ参りて、下向［けかう］に宇治［うち］にやとり、此あまのあに、山にたつときひしり（聖）にてあるも、つれたりける程に、「うしろの木［き］の下［した］に、あやしき物あり」なと、人のゝしるを、行［ゆき］て見れは、いとうつくしきわかき女［をんな］しき、あやのうつりかも（綾）、なへてならぬ赤［あか］きはかまきたり。此あま、はせにて、ふしきの夢［ゆめ］を見たりとて、此ひしりに、かちせさせ（加持）なとして、つれ行［ゆき］てもてなし、いとをしみ給ひけるに、此あまのむすめ、はかなく成［なり］たりしか、かのむこ、むかしを忘［わす］れす、小野［をの］へつねにきけるか、此人をみて、「むかしの御かはりに」と、しきりにいひわたりけるを聞［きゝ］給ひて、むつかしき事をおもひて、あまの又、はつせへ参りたりけるまに、山よりひしり（聖）下［くた］り給ひたりけるにいひて、尼［あま］に

なりける。

かくて、さま〳〵都［みやこ］の事ともおもひ出しつゝ、身をなけんとて出たりしに、宮［みや］とおもひし人につれてゆくと、みしほとより、身のゆくすゑはしらす、いかゝなりけんと、浅［あさ］ましくおもひて、歌［うた］に、

133身をなけしなみたの川のはやきせをしからみかけてたれかとゝめし

月のおもしろきに、つく〳〵なかめて、

134こゝろには秋［あき］のゆふへをわかねともなかむる袖［そて］に露そみたるゝ

秋ふかくなりゆけは、大かたの空のけしきもあはれなるに、まして物思ふ袖［そて］の上おもひやるへし。すみ所は、かの夕きりの宮す所おはせし山里［さと］よりは、今［いま］すこしいりて、山にかたかけたる家なれは、松［まつ］かけしけく、風のをとも、いと心ほそし。門田［かとた］のいねかるとて、若［わか］きをんなともの、うたひ物まねひしつゝ、ひたひき（引板）ならすも、見しあつまちの心ちしてあはれなり。月のあかき夜、うちなかめて、

135われかくてうき世の中にめくるともたれかはしらむ月のみやこに

ことにふれつゝ、宮［みや］の御おもかけの忘れぬも、あさまし。さりとも、忘［わす］れはて給はしとおもふも、いとあはれなり。

春［はる］にも成［なり］ぬれは、いとと昔［むかし］の春［はる］のこひしくて、ねやのつま近［ちか］き紅梅の、色［いろ］もか（香）も、かはらぬも、「春［はる］やむかしの」と、ことはなよりも、これに心よせし。

136袖ふれし人こそみえね花のかのそれかとにほふ春のあけほの

扨、大しやう、おもひかけぬゆかりに聞出［きゝいた］し給ひて、たつね給ふ。小野［をの］には、此歌［うた］のことはをおもひて付給ふへし。

十、夢浮橋［ゆめのうきはし］

此巻［まき］ゆめのうきはしと云事、源氏［けんし］わか身いにしへの栄花［ゑいくは］をはしめ、御身のさえ(才)もよ(世)にこえ、品［しな］たかくむまれ給ひて、御かたちは、ひかるとさへいはれ給ひて、御心にいみしくおはせし事も、たゝ夢［ゆめ］のことくにて、たゝ一ふしの御なけきを善智識［せんちしき］にして、雲［くも］かくれ給ふ。又、か様に、こと葉［は］おほくつくりいたせは、物かたりも、はてはみな無常［むしやう］をしらせんためなれは、夢［ゆめ］のうきはしとはいふなり。「はし(橋)」をことはのやすめに、夢［ゆめ］のうきはしとは云り。

さて此巻［まき］に、大将［しやう］きゝいたし給ひて、此手ならひの君［きみ］のおと(弟)ゝ、ひたちのかみか子［こ］を、むかしのなくさめにめし出して、つかはせ給ふを御つかひにて、御文をつかはさるゝ。しるへなくてはいかゝとて、かの人をあまになしなとせし僧都［そうつ］におほせて、文をこひて、大将［しやう］の御文に、とりそへてゆきしなり。大将［しやう］の御文に、

137法［のり］のしとたつぬるみちをしるへにておもはぬ山にふみまとふかな

と、ありしなからの御手にて、御にほひもさなからなるを見し、手ならひの君［きみ］の心の中［うち］、さこそ有けめ。御返事に、いかにそや、あきれぬるやうにてとて、かなしと、本［ほん］には侍るなり。

そのゝち「山ちの露［つゆ］」といふ物を、人の作［つく］りて、たつねあひて対面［たいめん］し給へり、と作りて侍り。それは、五十四帖［てう］の外なれは、是にはなし。

夫［それ］、生死無常［しやうしむしやう］の雲［くも］あつく、本覚真如［ほんかくしんにょ］の月、出かた

し。無明［むみやう］の酒［さけ］にゑひて、衣［ころも］の裏［うら］の玉［たま］をしらす。おく〳〵（億々万劫）万胡［まんこ］にも、うけかたき人界［にんかい］に生［むま］るゝ事、梵天［ほんてん］より糸［いと］をおろして、大海［かい］の底［そこ］の針［はり］の穴［あな］をつらぬくよりも、うけかたし。又、仏教［ふつけう］にあへる事は、一眼［かん］の亀［かめ］の、浮木［うきゝ］にあへるかことし。今かゝる世［よ］に、あひ奉る事は、悦［よろこ］はすして、かたちのよきにふける。妄想［もうさう］天（天道カ）［てん］たうの花ことはにほたされて、あひよく（愛欲）のきつな、かたく結［むす］ひ、解［とくる］事、更［さら］になし。されは、無常［むじやう］の序［しよ］の声［こゑ］は、耳［みゝ］に近付［ちかつけ］とも、世路［せいろ］のいとなみに聞［きこ］えす。雪山［せつさん］の鳥［とり］は日々に啼［なけ］とも、栖［すみか］を出［いて］て忘［わすれ］ぬ。されは、「宮［みや］もわらやも、はてしなけれは」と心をやり、衣［ころも］をすみ（墨）に染［そめ］、をんあひふなうたん（恩愛不能断）の家［いへ］をいて、きおん（棄恩入無為）にうむゐの心さし深［ふか］くして、真実［しんしつ］のほうをん（報恩者）しやのすかたなり。諸行無常［しよきやうむしやう］は天［てん］に上る橋［はし］、是生滅法［せしやうめつほう］は、あひよくの川を渡［わた］る舟［ふね］、生滅［しやうめつ］々已［い］は釼［つるき］の山を越［こゆ］る車［くるま］、寂滅為楽［じやくめつゐらく］は成仏［しやうふつ］の間也、と覚［さと］る願念［くはんねん］の窓［まと］の中［うち］には、心を三明［さんみやう］の月にかけ、座［ざ］禅の床の上には眉［まゆ］に八字［じ］の霜［しも］をたれさらん、とおもひて、はやく世［よ］をいとひ給ふへし。しからすは、かゝる狂言綺語［きやうけんききよ］の物語［ものかたり］にたつさはるとも、しんしつ（真実）のふかき心をよくしりなは、なとかはさとり（悟り）をえさらん。心を直［すなを］にして情［なさけ］ふかけれは、慈悲［しひ］誠［まこと］にして、かん（感応）なうすへし。大和歌［やまとうた］は是［これ］、五大しよ（所生）しやうの仏［ほとけ］をつくるなり。されは、それにひかれて、成仏［しやうふつ］うたかひなしといふ也。